
ガン×ソード ~ in Gundam story ~

退助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガン×ソード ｛ in Gundam story ｝

【Nコード】

N6826I

【作者名】

退助

【あらすじ】

惑星エンドレスイリユージョン

そこは野蛮な夢が飛び交うはぐれ者たちのパラダイス
父の夢を継ぎ、世界を放浪する者がいる

その名はジーク・ヴェレナ

ガンダムという名のヨロイを駆る傭兵は橋を渡ろうとした時
ジークの運命が変わろうとしていた……

本編に入る前に（前書き）

本日はガン×ソード（in Gundam story）にアクセスして頂いてまことにありがとうございます。

タイトルをかつこよさげにしてみました。ただのガンダムコラボ小説です。

ガン×ソードの世界を舞台におき、私がそれに合うような（ただの偏見と独断&めちゃくちゃ手を加えたもの）版權ガンダムとオリジナルキャラを展開させるといふ感じ。 （他のロボット作品も同作法で制作予定）

今回はそのキャラとガンダムを紹介します。

本編に入る前に

主人公 ジーク・ヴェレナ（20） 男性

グローリアから近い名もない村にある研究施設の息子

少年時代、父が研究をしていたヨロイ『ガンダム』に乗ることを夢に毎日のように操縦訓練をし続けていた（そのシミュレータに映っていたのは恐竜型のヨロイだったとか）。父の口癖でもあった「ガンダムはヨロイの新たな可能性だ」が一番彼が好きな言葉だ。

ある日、カギ爪の男が施設を訪ねて父に協力を仰ぐがそれを拒否し、カギ爪の男に父を殺され、姉とは生き別れてしまう。

父の開発したガンダムに乗り命から逃げのび、仇を取るため、強くなるため、生き別れの姉を探すための旅に出る事になった。そして父が追い求めたヨロイの新たな可能性を探すために・・・
現在は傭兵紛いの仕事をこなしており、カルメン99とも面識ありふとしたことをきっかけにヴァンとウエンディと度々行動を共にする。

服装はガンダムにいつでも搭乗出来るようにパイロットスーツを着ているが、外出時には目立たないように隠している。

ガンダム搭乗時には安全のため専用ヘルメットも着用する。

好きなもの 辛い食べ物 ヨロイ シノ（ガンダム開発時に面識あり）
嫌いなもの バカ カギ爪の男 ファサリナのような女（性格共に風体が気に喰わない）

登場機体 インパルスガンダム（シルエット装備時の名前は頭にシルエット名が付く）

(出典元：機動戦士ガンダムSEED DESTINY ガンダムSEED MSV)

ジークの父が開発していたヨロイであるが本質はヨロイと別物、しかしレプリカヨロイに分類される。改造手術を受ける必要はない。戦闘機「コアスプレnder」とレッグフライヤー、チェストフライヤーと合体することで本機になる。

レプリカヨロイが不可能とされた2足歩行をGE-R流体なしで実現

ヴォルケインが装備していた光学兵器を装備する数少ない機体。しかしヴォルケインのものと比べると小型化・高出力化に成功している。

フェイズシフト装甲(以後PS装甲)と呼ばれる装甲を装備しており、エネルギーを消費することにより物理攻撃を無効化することが出来る。装甲展開時にシルエットごとでエネルギー消費が異なるため装甲に掛けるエネルギーを調整することで違う色が展開される。

この機体は合体・分離・シルエット換装が可能であり、オリジナルヨロイが使用している衛星と同系統の衛星『ミネルバ』から各武装・パーツを射出される。衛星内で自動整備、修復される。シルエット換装されると自動的にエネルギー供給がされる。

武装 20?機関砲

対装甲ナイフ×2

高出力ビームライフル

対ビームシールド

シルエット(今後も追加予定)

フォースシルエット

高速戦闘・対空戦闘が可能になるシルエット

ヨロイに飛行能力が備わる数少ない武装

追加武装 ビームサーベル×2

ソードシルエット

格闘戦特化がされたシルエット

対艦刀は他のシルエットでも装備可能

追加武装 ビームブーメラン×2

ビーム対艦刀×2

ブラストシルエット

砲撃戦・超長距離戦特化がされたシルエット

PS装甲出力が最も弱いため物理近接は防御不可能

追加武装 長射程ビーム砲×2

高速レールガン×2

4連装ミサイルランチャー×2

ビームジャベリン

カオスシルエット

高機動化、オールレンジ攻撃が可能となるシルエット

機動兵装ポットはスラスタも兼ねているため、こ

れがないと機動力は

低下する。

変形可能であるがレッグフライヤーをはずす必要が

ある。

追加武装 機動兵装ポット×2（ビーム砲、ミサイルラン

チャー）

複装ビーム砲（変形時のみ）

ビームクロウ付き機動防盾×2

アビスシルエット

水中戦特化がされたシルエット

が薄い

変形時の水中機動は最高だがビームは水中では効果

陸上では鉄壁の防御力を誇る

追加武装 二連装砲×2

三連装ビーム砲×2

二連装ビーム砲×2（変形時のみ）

ビームランス

ガイアシルエット

陸上での機動力を底上げたシルエット

専用レッグフライヤーと合体することで変形が可能

である

（ケンタウロス型）

陸が悪環境でも機動力が保たれる

追加武装 キャノンソード×2（取り外して近接戦闘可能）

ビームサーベル×2

本編は近い内になりますが面白い作品にしたいと思しますので
よろしく願います。

第1話 ツイン・ホワイト（前書き）

そこは宇宙の底にあるおとぎの国

荒野に夢、街に暴力あふれるボンクラの理想郷

惑星 エンドレスイリユージョン

全く違う二人が同じ男を追い求める

それが運命によって引きあうとはまだ知らない

第1話

ツイン・ホワイト

「全く・・・エヴァーグリーンの事件解決してんじゃねーかよカルメンの奴・・・」

そう呟きジークはコアスプレnderをブリッジシティへ進路をとっていた。向こう側に渡るために。

空中からでもいけるが動力節約のため、橋を渡り向こう側に渡ろうとしていた・・・

しかし、通行手形を手に入れるために仕事になりそうな情報をカルメンから仕入れていったのだが・・・誰かがもう解決していた後だった。

「だが一体誰なんだ？タキシードで蛮刀を持っているシルクハットのヨロイ乗り・・・んなへんてこな奴に先を越されるとはな・・・あ、名前聞くの忘れてた。」

しかし名前を聞いたところで何も無いのは彼は百も承知であり

「まあいいか、さっさとあの女締め上げにやな・・・」

ブリッジシティに到着し、カルメンを探すことに・・・というより探すこともなくなった。

ホテルの入り口に入っていくカルメンを偶然見つけた

「見つけたぞカルメン。」

「あらジークじゃない、どうだった？」

「どうだったじゃねーよ、とっくに解決してたぞ。」

「え？そうなの？」

ジークは頭を片手で抱えて呆れる

「着いたら着いたでヨロイの残骸が散らばっててな、町長から聞いた話だとタキシードのヨロイ乗りが解決させたと……」

「タキシード？それ本当？」

「ああ……知ってるのか？」

「目の前」

そう言うと吊り下げられた水槽が上がると同時に男の声が聞こえてきた。

「俺はいい、その辺で」その辺で寝るから？」

「あ？」

「久しぶりね、寝場所を選ばない男ヴァン。それとも二日酔いのヴァンだったかしら？」

「昔の話だ、今は夜明けのヴァンで通ってる。」

そこにいたのはタキシード姿の右のツバに金色のリングが付いており、けだるそうな顔をした男がジークの眼に止まる

「ま、まさかこいつが・・・エヴァ　グリーン的事件解決させたっ
て言う・・・!」

「そうよ、聞いたことない？ヴァン。」

「いや俺が聞いたのは100万本ホームランのヴァン・・・だった
ような・・・」

「ちよつと違うな・・・。ていうかこいつ誰？」

「ジークよ、話には聞いていたでしょ？それより、野宿専門のあな
たが何故ホテルに？」

ジーク達は近くのレストランに入り、ソファーに腰掛ける

「こいつに連れてこられた。」

「こいつ？誰これ？」

カルメンのその言葉にその少女は少しムツとした顔をした

「連れだ、前の街から。」

「連れなの？名前は？」

質問されたと同時にヴァンの眼が泳ぐ

「あゝ・・・えーっと・・・」

「ちょっと！今えーつとつて言ったでしょ！私の名前覚えてないの！？」

彼女がそう尋ねるも一言もしゃべらない

「相変わらずね。ま、相手はオチビちゃんだし。」

「おいカルメン失礼じゃないか？」

「それでヴァン、これは誰？」

「これって……」

ジークは（女っていくつになってもこれなのか……）と内心呆れる
少女がヴァンに尋ねても先ほどと同じ態度をとっていた

「ヴァン！まさかあたしのも！？」

「……すみません……」

話を進めている内にヴァンの前には魚の焼き物、他3人にはコーヒ
ーが出された。

「オチビちゃん砂糖はいくつ？」

「いりません。後、私の名前はウェンディ・ギャレット。あなたは
？」

「私は情報屋のカルール・メンドウーサ、人呼んでカルメン99よ。」

「
そう名乗ったカルメンの胸をウエンディがじーっと見つめている横
でヴァンは

「あのすみません。」

「はい。」

「調味料全部。」

「は？」

「全部。」

「か、かしこまりました・・・」

ウエイトレスに調味料を全部頼んでいた

「ちなみに言っておくが99は別に胸のことじゃブゲ！？」

「黙ってなさいあんたは。」

「・・・はい・・・」

カルメンに頭をどつかれて少し落ち込んでから立ち上がった。

「じゃ俺はコアスプレnderの整備あるから失礼するよ。」

「市長の説明会は2時からよ、忘れないで。」

「ああ・・・」

そう言っつてジークはレストランから出る。

このブリッジシティは5日前から橋が通行止めになっており通れなくなっている。

理由は老朽化による修理らしい

その事について市長からの説明があつたが明らかにならず、仮説の地下通路から女性を200人のみ通行整理券が配られる・・・どうにもきな臭いと感じたジークはゲート前に来ていた

「あらあなたも来たの？」

「どうにもあのヒゲ市長の話が胡散臭く感じてな。それよりもあのウエンディって子・・・一人で大丈夫なのか？」

「見てて差し上げましょうか？ヴァン。」

「そんな金ない。」

「サービスしてあげる。私の依頼を受ければね。」

「何だ？」

「報酬はこれでいいわ。」

そう言っつてカルメンが出したのは砲台のようなものが写った写真

「ん？ヨロイか？」

「ヨロイに積むにしても大き過ぎる砲台だな・・・戦艦か？」

「さあ？でもこの川の水は金属を含んでいるからそれを利用してるのはたしかね。市長バロンが。」

「分かった、俺が行こう。」

「アンタはヨロイで水中から調べてもらえない？市長室はヴァンに行ってもらおうわ。」

「ヨロイ？お前もヨロイ乗りなのか？」

「ヨロイじゃない、ガンダムだ。何度言わせれば分かる。」

「だってそうじゃない・・・ま、とにかく頑張ってるね、私はもう行くから。ヴァン、そいつのヨロイ、中々見物よ。」

そう言ってカルメンはゲートに向かっていく

「・・・仕方ないな、まあ俺はガンダムで水中を調べてみるさ。」

「ヨロイだったってあれじゃ無理だろ？あれただの飛行機だし・・・」

「だからヨロイじゃ・・・まあいいか、ま見ててくれ。」

そう言ってジークはコアスプレnderに乗り込み発進する

「チェストフライヤー、レッグフライヤー射出！」

手前のボタンを押してから数秒後、何かが空から舞い降りてきた。

そしてそれらと合体すると人型のヨロイ・・・ガンダムが完成する。

「あ、ホントにヨロイになった。」

その後装甲色が白、青のカラーリングに変わり、川の中に着水し探索を開始する。

「アビスが前の戦闘で損傷してなければな・・・まあぼやいても仕方ないな、やるか。」

川中を歩いて写真に写っていた場所に移動した

かなり水の抵抗があつてか着水地点から数分かつてしまった

川の水をくみ上げる装置、あまりにもでかすぎる建造物、そして水中に含まれる金属は装甲に使用しても申し分ないものだとは判明した。

「あきらかに何か舟を製造してたのは間違いないな・・・一体何なんだこれは？」

しかしその時点では何も分からず、止む負えず陸に上がる

「何の手がかりも見つからなかったな・・・後はヴァン次第ってところか・・・」

ふと見ると何かがこちらに接近するものが見えた

「何だあれ？」

戦艦のようなものが壁に衝突した

「あの戦艦・・・ヨロイみたいだな。」

ただごとじゃなくなったのを感じ取り再びガンダムに搭乗する

そこに今に落ちそうになるカルメンとその腕を掴んでいるウェンデイの姿が視界に写る

「あの二人無事だったか・・・いや今はそんなことより!!」

ガンダムのバーにアを吹かせ、二人の救出に繰り出す

何とか落ちる寸前で受け止めることが出来た。

「あ、ありがとう・・・助かったわ。」

「どうなっているんだ？何であんなヨロイがいきなり・・・」

「あの市長、独立国家作るとか言って私達を子作りに利用しようとしたのよ!」

「何だって!？なんて破廉恥な・・・」

そう言ってガンダムの腕を操作しゲート前に降ろす

『とにかく戦闘になる!ここは全員で避難してくれ!』

「分かったわ。」

「カールさん、このヨロイ武器も持ってないのにどつちやって・・・」

「カルメン99。大丈夫、ここからギークのヨロイの面白いところなんだから。」

ガンダムが宙に上がり

「フォースシルエット！」

そう叫んだ数秒後、何処からかまた戦闘機が飛んできて、積まれていたシルエットをガンダムの背中に装着された。

「すごい・・・」

「ね？彼のヨロイって汎用性高いのよ。」

そこにバロン市長の声が響き渡る。

『運命に流される野蛮人よ！！永久にさらばと言おう！！我等は自立の渡航で新たに旅立つ！！』

「何が旅立つだ、このスケベヒゲが！！」

「ヴィガラスシステム起動！！」

そう市長が叫ぶと甲板が展開し腕のようなものが生える

「教育的指導！！」

「まさかあいつ撃つて来るつもり!？」

「クソ!やらせるか!！」

ジークがヨロイまで接近しようとしたその時、そのヨロイにヴァンがいることが確認出来た

「あいつ……あんなところで何を!？」

「やっぱり……お前は、気に喰わない!」

そう言つてヴァンはシルクハットを180度回し、Vの字に持っている蛮刀をかざした

「消え失せなさい野蛮人!！」

市長は大砲をヴァンに向けて発射したと同時に、ヴァンの目の前に何かが落下してきた。

「何事!？」

「あれは一体……!」

「ウェイクアップ・ダン!」

剣のようなものが変形し、ヨロイの姿となった。

「あれがヴァンのヨロイ……」

「ヨロイですか！しかしメタルグレーに比べるなら・・・」

ヴァンのヨロイにメタルグレーからの砲撃が加えられるがヴァンは飛びながら避けていく

「そのようなリトルなど！！」

ジークは街に向けられた大砲を撃ち落そうとライフルを構える。

「街に攻撃はさせない！」

ビームが放たれ、次々と大砲が破壊されていく。

「何だ！？一体どうなっている！」

「分かりません！！銃が光ったようにしか・・・！」

「まずは奴を握りつぶせ！！」

市長がそう叫ぶと右腕がガンダムを掴もうと迫るが紙一重で避け、ビームサーベルを掴み

「はあああああ！！」

そのまま斬りつけ右腕を切断する。

「おのれ！左舷自在腕部展開！！」

先にヴァンのヨロイを潰そうと左腕で捕まえる。

「野蛮人に我が心臓、溶鉱炉からの熱血を授けよう！」

「アイサー！ヴィガラスキャノンセット！出力上昇！」

「射軸合わせ完了！」

ダンを捕まえた手が砲台のそばまで寄る

「溶鉱炉&ファイヤー！&ウォーター！！！」

ダんに溶鉱炉の溶液が直撃し、壁に叩きつけられると同時に水をかけられ水蒸気爆発を起こす。水蒸気が晴れて見えたのは鋼鉄に固められたダンが見えた。

「動けまい野蛮人！！！」

「あれじゃいい的だ・・・！だが下手に剥がそうとしたら・・・」

そう、下手に剥がそうとビームを撃ち込むとダンにも危害が加わってしまう。

成す術もなくガンダムが空を飛んでいる。

「全速前進！これで完結！橋ごと碎き我等は大海へと出港する！！！」

「ヴァーン！！！」

「真っ向衝角突きいいいい！！！」

「・・・・・・ありがとよ、これで心臓の位置が分かった。」

固められていたはずのダンが動きだし、鋼鉄を内側から剥がしだす

「何と!?!」

「なんてパワーだ・・・あれがヴァンのヨロイ・・・」

「いかん!!緊急回避!!」

「無理です!!間に合いません!!」

ダンは持っていた武器をヴィガラスキャノンに刺し

「チエス!!」

それを踏み一気にメタルグルーを貫く。

「鉄の血をぶちまける!!」

メタルグルーが大破し、ところどころに溶鉱炉の鉄が噴き出す

「わ、我等の夢が流される...!流されてしまう!!」

「いや、お前はもう流されない。流れる夢を見る、鉄の墓標の下でな。」

ヴァンのリングが鳴ると、メタルグルーは水蒸気爆発を起こし文字通り、鉄の墓標が完成する。

「すごい・・・鋼鉄の・・・ヴァン・・・」

ジークがそう呟き、この騒動は幕を閉じた。

そして日が暮れて・・・

「お疲れ様ジーク。」

「まあほとんどヴァンのおかげだったけどな・・・あの市長のヨロイ・・・結局何だったんだ？」

「さあ・・・確かに珍しいヨロイだったけどあんな有様じゃね。」

「でも何のために調べていたんですか？カルールさん？」

「カルメン99。」

「あ・・・カルメンさん・・・」

二人はそつと微笑む

「面白そうだったから。誰のためでもない、自分のため、アンタと同じよ。砂糖は？」

「あ・・・一つ・・・いえ、二つお願いします。」

「OK。」

「いつの間に仲良くなったんだお前ら？」

「さあ・・・教えてあげない。」

「何だよそれ……」

近くにあった扉が開き、ヴァンが現れる。

「どうだった？」

「ここを通ったのは間違いない。」

「兄さんは？」

「一緒だ、無事らしい。」

それを聞いてウエンディはホッとする

「二人は一体誰を探してるんだ？」

「ああ教えてなかったわね、ヴァンが追っているのは……カギ爪の男よ。」

それを聞いたジークの表情が固まる

「カギ爪だって!？」

「何だ?知ってるのか?」

「知ってるも何もあいつに親父が殺されたんだ!知らない方がどうかしてる……!」

「はいはいそう熱くないの。」

カルメンがジークを宥めた後

「じゃあね、また会いましょう!」

カルメンは飛行艇に乗り何処かへ飛び去った後、ヴァンも再び旅立つ

「……で、何でお前まで一緒なんだよ。」

「行き先が同じなだけだ。グローリアまで付き合っただけよ。」

「ちっ……勝手にしろ。」

「それよりもヴァン……私の名前言ってみて。」

「何で?」

「いいから!」

「別にいいだろ?」

「早く!」

「いいからさっさと行ってしまえよ。鋼鉄のヴァン?」

「……すみません。」

それを聞いた瞬間、二人はがっくりする……

第1話

ツイン・ホワイト（後書き）

次回予告

ええ・・・あの時はホントに信じられませんでした。ヴァンのヨロイもかつこよかったけどあの人のヨロイも・・・

でも次の街でもっとすごい人達を見つけられる事が出来ました。

ジークさんのヨロイみたいにお話でしか出てこない人達がホントにいたんですから。

ヴァンがすごく気に入られて・・・ジークさんも知ってたみたいで・・・あの街に行けば誰でも教えてくれますよ、だってあの人達・・・どんな物語に出る登場人物よりかつこよかったんですから・・・

第2話 戦士と勇者の協奏曲

（おまけ）

ウエンディ「はーい！皆さんお久しぶり！そうじゃない人は初めまして！私の名前はウエンディ・ギャレット、略してウギャー！！お願いだから略さないでね？」

カメオ「それより何ですかこれは？何でこんなミニバカドラマが復活してしまってるんですか？」

ウエンディ「作者の勝手な暴挙よ！」

カメオ「清々しい位はつきりとした答えですね姐さん。」

ウエンデイ「それよりも何で作者はこんな無茶なコラボ小説を書く気になったのかしら？正直理解に苦しむわ。」

カメオ「作者は妄想番長を超えた妄想総長ですからね、どんなものでもコラボ出来る柔軟な人なんでしょうね。」

ウエンデイ「カメオったら何てこと言うのよ！！ただでさえ文章表現力のなさ、はしよりと再現力のなさに定評のある作者のモチベーションが落ちて続きが掲載されないじゃない！」

カメオ「姐さんの発言の方がモチベーション下がっちゃいます。」

ウエンデイ「というわけでこんな妄想小説をこれからも応援お願いしますね！」

カメオ「いつになるかは分かりませんがなるべく早く掲載するそうなので亀の如く待っていてください。」

ウエンデイ「あ、オチがこんなあっさりしていいのかしら？」

カメオ「いいんじゃないんですかたまには？」

ウエンデイ「じゃあ次回まで何かオチ考えてくるわ！」

カメオ「あれ・・・？何でしょうこのイヤな予感は・・・」

第2話 戦士と勇者の協奏曲

ブリッジシティを後にしたヴァンとウエンディ、その途中で行動を共にしたジークはグローリアの近くまで来ていた。

だがその道中でヴァンが腹を空かせて倒れ、引っ張りながら街へ目指していた。

「なあウエンディ、ヴァンっていつもこうなのか？」

「いえ、私もエヴァーグリーンから一緒だったのでそんなに・・・」

「エヴァーグリーン？ワイルドバンチが襲撃していた・・・？」

「はい、そのときにヴァンに助けってもらって・・・そういえばジークさんもカギ爪の男を追っているんですね？」

ジークは複雑な顔をした後、口を開く

「ああ・・・厳密に言うと奴と一緒にいた女に用があるんだ。そいつが真の仇だ。」

「そうなんですか・・・」

「ホラ、もうすぐグローリアだ。食べ物ならいい場所を知ってるぞ。あそこのチリパスタはうまいんだぞ？」

「どこだ・・・それ・・・」

引きづられているヴァンが呟く

「大丈夫だ、もうそんなにかからないはずだから。」

そう言っているうちに彼らは『ピンクアミーゴ』と書かれた店に着く
ウエンディとジークは扉を開ける

「あー！ミルクとランチ下さい！」

「後、チリパスタ頼む。」

「は、はい……」

「それとバケツに水をくれ。」

そうして持ってこられたバケツの水をウエンディが倒れたヴァンに
水をかける

「目が覚めた！？お腹空き過ぎて倒れるなんて迷惑よ！」

「どれだけ大変だったと思ってるんだヴァン？」

「あ……店員さん……」

「はい？」

「店で一番安い料理と……調味料……ありっただけ……」

そこでジークはその店員を見て少し考え込む

(あの店員・・・何処かで見覚えが・・・)

そう考えているうちに女性の店員 ユキコから話しかけられる

「あの・・・何か？」

その声を聞いた瞬間

「あああ！！思い出した！君ユキコだろ！？」

「え！？まさか・・・ジーク！？」

「何だ？知り合いかユキコ？」

隣にいた男 フランコがユキコに尋ねる

「ええ、お爺ちゃん達と飲んでいた人の息子で・・・時々にはか会ってなかったんだけど・・・」

「元気そうで何よりだよ。」

「ささ、こんなところで何だから店に入って。」

ウエンディとジークはカウンターに腰掛け、ヴァンは少し離れたテーブルの席に着く

「何処から来たの？」

「エヴァ グリーンです。」

「あの人も？」

「いいえ。」

「一緒じゃないの？」

「いえ、今は一緒に「甘　い！！！！」

話している途中でヴァンが叫ぶ

「またやってるよあいつ・・・」

「ところでジーク、今まで何してたの？あれから連絡もなかったし・・・」

「まあ・・・色々あってな。俺はブリッジシティからこいつらと一緒だ。久しぶりに立ち寄りたかったしな。」

「そうだったの・・・」

しばらく間が置かれ、ユキコが尋ねる

「二人とも楽しそうね。」

「え？」

「旅をしてるんでしょ？」

「まあ・・・そうだろうな・・・」

しばらくジーク達が話をして、ヴァンが食事中のところまで老人4人が一緒に席に着く

「こんにちは。」

「こんにちは……」

「俺はネロ。」

「ホセだ。」

「バリヨ、そしてこっちはカルロス。」

バリヨが隣で寝ているカルロスを見ながら言った

「はあ……」

「ユキコ、あの爺さん達……」

「ええ、相変わらずでしょ？」

「こっちはづるさくて迷惑してるんだがね。」

フランコが少し怒り気味に呟く

「そうか？俺はあの爺さん達の話は好きだったけどな。」

「お前は？」

「ヴァンです、人呼んで鋼鉄のヴァン。」

それを聞いた瞬間、ネロ達は驚いた表情を見せる

「お前か、ブリッジシティのバロンを倒したのも！」

「ワイルドバンチを倒したのも!？」

「ああ……恐らく。」

「「気にいった!！」」

「食べ、タコスに身体にいい!」

そう言ってバリヨはタコスをヴァンの前に出す

「いや……でも俺……金が……」

「「任せる!！」」

「なんか話が長くなりそうだな……機体の整備があるから先に出るわ。」

「え?もう行くの?」

「いや、しばらくここにしようと思ってるから。すぐ戻る。」

「機体って……あんたヨロイ乗り?」

「まあ……そういう事だな。じゃウエンディ、また後で。」

「は、はい・・・」

ジークは店から出てそこから少し離れたところにコアスプレnderを呼び降ろす

「こいつだけは俺が整備しないといけないから・・・バロンの戦いの後だったし、しっかり見ないと・・・」

整備といっても点検程度で終わり、店に戻ってきた

そこで見えたのは先ほどの爺さん3人が若者相手に喧嘩していた光景だった

「え、遠慮するな・・・」

「か、かかって・・・こい・・・ひよっこ・・・」

「何なんだこれは・・・?」

「お、おいちよつとやばくないか?」

「やめよ爺さん、悪かったよ。ごめん。」

「そつだよ、無茶は身体に悪いし。」

「何だとバカにするな!!」

そこに歌声が聞こえてきた

その声の主は・・・ユキコだった

「この歌・・・チヅル婆さんの歌・・・？」

「歌っている時は・・・チヅルに似ているな。」

一悶着が終わり、日が落ち店が閉店する

外では爺さん達がヴァンと話をしようと付きまとわっていた

「ヨロイ乗りの心得を教えてやる！」

「結構です。」

「俺がザウルス帝国と戦っていた時は・・・！」

「ついてこないでください。」

「相変わらずだな・・・あの爺さん達。」

「ええ・・・あれから何も。」

「そういえばユキコさんとジークさんって何で知り合いなんですか？」

ウエンデイがそう尋ねる

「ジークのお父さんはお爺ちゃん達の飲み仲間で・・・」

「ああ、それで時々連れてこられて親父達の話聞いていたんだよ

な。」

ジークはその時の出来ごとを鮮明に覚えている

それは・・・ユキコとジークが子供の頃だった時

「あの時お前が邪魔しなけりゃヨロイの修理に手間がかからなかった！」

「何言っただよ余所見してたからそうだったんだろっが。」

「また勇者の話してる・・・」

そこにユキコが話しかける。

「ねえ、勇者の話聞いても退屈だし、お部屋に来ない？」

「うん。」

二人は酒臭い場所から離れ、部屋に入る。

「ジークはあの話ってどう思う？」

「さあ・・・僕の父さんはガンダムってヨロイ造ってるけど・・・一緒に戦ってたっていうのはちょっと・・・」

「私もお婆ちゃんからお話聞くんだけどね、途中から適当になるんだよ。」

「じゃああれってみんな作り話？」

「分かんないけど、私はお婆ちゃんがウソ付くとは思えないし・・・」

「おいジークー！何やってんだ帰るぞー！！」

そこにジークの父親の声が聞こえてきた。

「はいー！じゃあねユキコ。」

「うん！」

場面が変わり、ユキコの寝室

「お二人って幼馴染なんですね。」

「そう言う事になるな。でもユキコ、チヅル婆さんの店を一人で切り盛りしてるんだな。」

「ええ・・・私のためにお婆ちゃんが始めたお店だったから・・・」

「そうか・・・今日は遅いから寝よう。」

「ええ、おやすみなさい。」

ジークはユキコの寝室を出て、ユキコから借りた部屋に戻る

そして翌日の朝

ジークはウォーミングアップがてらコアスプレnderに乗り空を飛んでいた

ユキコ達は町内定例会に参加しているため、暇つぶしに飛んでいた。

町長の話を空でモニターしていた。

「犯罪率1%以下か・・・確かにこの街の連中はいい人ばかりだが・・・あの騒動からして問題は多いようだな。」

その時、突然街から離れた家屋が爆発し、ヨロイらしき物体が顔を出す

「何だ？ヨロイ？」

不審に思ったジークは近くまで飛翔した

「それはヨロイか！」

「そつだああ！！見ろおおこれが俺のヨロイだ！！尊敬しろ！！俺が造つたんだ！！」

そつ言いながらヨロイは街を無差別攻撃し始める

「まずい！？このままじゃ・・・とにかくガンダムに合体して・・・」

ジークは衛星からチェストフライヤー、レッグフライヤーを呼び寄せ合体する

「ソードシルエツト射出！」

空から飛来したソードシルエツトを背部にドッキングし、PS装甲を展開する。

人がいない場所に着地し、戦闘態勢をとる中

グローリアの警察が敵のヨロイに発砲する

「無理だ！！ヨロイは銃で倒せるものじゃない！早く逃げろ！！」

「お前ら！！たった一度の失敗で・・・俺を除け者にしやがって！！！！」

「除け者？まさか・・・昔ブッチって科学者が事故を起こしたと聞いたが・・・」

しかし考えている余裕はない、ここは街の人たちが避難が完了するまで足止めをする必要があった。

ジークはビーム対艦刀を一つ抜き、ブッチのヨロイ バットローズに斬りかかる

「やめろおおお！！」

しかしバットローズは触手で対艦刀を受け止めた。ビームが当たっているというのに斬れる様子がない。

「俺は・・・街のためと思って！！」

逆に触手に弾き返される

「クソ!!ビームで斬れないなんて・・・だが無暗に発砲したら街の被害が・・・」

バットローズは尚も進み、ユキコの店 ピンクアミーゴに近づく

「まずい!?チヅル婆さんの店が・・・!それ以上進むな!!」

対装甲ナイフを取り、バットローズの胴体に斬りかかるうとするがそれよりも前に触手で弾き返される。

「グ・・・!?!」

その時、センサーが熱源を4つ感知した。

「何だ!?!新手か!?!」

センサーが感知した方向を見ると、ピラミッドから4つ、ヨロイらしき物体が現れる。

「何だあれ・・・?!」

「行くぞ!!スクランブル・アマンダー!!」

ヨロイから聞こえてきたのはジークがよく知る爺さん ネロの声だった

「な!?!あの爺さん・・・ヨロイ乗りつてのは本当だったのか!?!」

ネロが体当たりをかますがすぐに弾かれる。

「エルグランドアタックが効かない!？」

「ネロ!尻拭いさせるなよ、こういう時は・・・分かってるな?」

「ふん!いいだろう、レッツゴー!!エルドラド!!」

ネロがそう叫び、4つのヨロイが空に舞い、一つのヨロイに変貌する。

「五体合体!エルドラ? !!!」

「な・・・空中で合体しやがった・・・俺のガンダム以外にもいたのか・・・」

「フリーフォール・グラッチェ!!」

そのまま落下し、バットローズを踏みつける。

しかしすぐに追い返され、倒れて起き上がるところに腕を掴まれる。

「ちょうどいい!!お前らを倒せば街の奴らは認める!!俺を!!」

「ネロ!!俺達がこらえている間に!!」

「分かった!!」

ネロはバットローズに狙いを定めるが照準が定まらない。

「酒・・・酒が・・・！」

「ネロ、今度こそ外すんじゃないぞ？」

「へ、リーダーを信じる。ボンバディーロ！！」

エルドラ？の胸からミサイルが放たれバットローズに直撃する。

「何故だ！！お前らもバカにされてきたろ！！いらないうって言われただろ！！違うか！！」

「何をさつきから甘えたことを「待てヴェレナ！！」

ホセがジークを止める。

「何で俺の名前が・・・」

「ここは俺達に任せろ。」

エルドラ？がバットローズに向きなおす

「若いな、若造。」

「俺達はそんなもののために戦っているんじゃない。」

「思い出され護れば・・・」

「それだけで・・・」

「それだけでいいんだ!!」

「何を・・・お前達まで！俺を！！バカにする!!」

怒号を上げエルドラ？に攻撃を加える。

「爺さん!!」

そこに・・・ユキコの歌声が響く

「ユキコ・・・」

「負けられんな。」

「ああ、いつもの事だ。」

「エネルギー0007、残り1？へブン!!」

「よし！一気に決めるぞ!!エルドラフィスト!!」

エルドラ？は左腕でパンチを決めるがバットローズに受け止められる。

「エネルギーが足りない！少しだけ足りない！」

「旧式は、ただ消え去るのみ。」

そう言ってエルドラ？の左腕を破壊する。

「うわああ!!」

「このままじゃ・・・」

そこでジークは爺さん達の話の思い出す。

エルドラ？は五体合体、今のままではパワーもエネルギーも足りないことを

だがもう一体・・・チヅルはもうこの世にはいない

しかし、そこにまたセンサーがピラミッド付近に反応する。

そこを見ると・・・チヅルの搭乗機、ピンクアミーゴを抱えているダンの姿が見えた。

ダンそのままエルドラ？目がけて投げ飛ばす。

ピンクアミーゴは風に乗り、エルドラ？に向かって飛んでいく

そして背部にドッキングされる。

「な、これは・・・」

そこに誰もいないはずのコクピットには・・・チヅルの姿が映った

「・・・チヅル・・・！」

そして一気にエネルギーが全回復を果たす

「揃ったあああ！！！！」

「へえ……補給ユニットも古臭い。」

エルドラ？の頭部の装飾が変化し、黒ずんだボディが明るい色に変化した。

「PS装甲……ではないようだが……」

エルドラ？の右腕が熱で赤く染まる。

「効率の悪いヨロイだ、進歩がない!!」

「若造、進歩とは」

「ヨロイと人の心の

「合体だ!!」

「エルドラ？アルティメット!!」

揃って叫び右腕を叩きこむがバットローズが同じように宿主で受け止める。

だが、エルドラ？のパワーが勝り、触手を押し切りボディに当てる

「ウソ……ウソ!？」

「アアアアディオオオオス!!」

「ア・ミーゴ!!」

拳を突き上げポーズをとったと同時にバットローズが消し飛んだ

街の人々が歓声を上げる

「すごい・・・親父の言っていたことは間違っていなかった・・・

」

そして、エルドラ？の腕が開き、そこにいたのはブッチの姿だった。

「・・・あれ？生きてる？」

「ごめんなさいは？」

「ごめんなさいも言えないのか!？」

「ううううごめんな・・・さい・・・!」

「今さら謝ったところで許されるとでも思ってるのか？」

ジークはガンダムのビームライフルを向けて言う

「ヒイイ!？」

「待てヴェレナ!」

ホセが止める

「お前もヨロイに迷ったんだろ？罪を償ったらまた街のために戻ってこい。」

「は……はい……」

ブッチは涙を流し返事を返した

ジークはそれを聞いてライフルをしまう

「これが……親父の言っていたエルドラチーム……」

ジークはコクピットハッチを開き、ヘルメットを取って顔を出す。

「爺さん！やっぱりあんた達は親父から聞いた通り、最高のヨロイ乗りだ！！」

ジークは親指を立てて激励した

「親父？ヴェレナじゃないのか？」

「違う、俺はヴェレナの息子 ジーク・ヴェレナだ！」

「何！？あいつの息子だって！？」

「ネロ、積もる話は後にしてエルドラを」

「分かってる！後で店に来いよ！」

「ああ！」

そして、エルドラが格納された後、ヴァンとウェンディは先に街を出ており、ジークは店の中にいた。

「あら？もうエルドラ？の整備はおしまい？」

「ああ、若い奴らが手伝ってくれてな。そういえばヴァンとあのお譲ちゃんは何処行ったんだ？」

「もう出かけたわ、何でも人を探してるんですって。」

「何だ・・・ヨロイ乗りの真髓を教えてやろうと思ったのに。」

そこでカルロスが目を覚ます

「お？起きたかカルロス。」

「みんな、俺も一杯もらっていいかな？なんか疲れちゃって。」

「妙な夢でも見たか？」

「いや〜楽しい夢だった。みんなで街を襲ったヨロイと・・・あ、そうだヴェレナやチヅルも一緒だったな。ホントいい夢だったよ。」

「カルロス。」

「え？」

「それは・・・夢じゃないぞ。」

バリヨは店の壁に飾ってあるみんなの集合写真を見て言う。

「ま、まあある意味夢ではなかったかもな・・・」

ジークはバリヨの隣で頂垂れていた

「何だもうちのびちまったのか？」

「そこもヴェレナと似てるな・・・顔や声だけじゃなく酒に弱いところも・・・」

「ああ・・・だから時々しかグローリアに行かなかったわけか・・・」

ふとバリヨは気になっていた事をジークに聞く事に

「なあジーク。あのヨロイだが・・・」

「俺のガンダムがどうかした？」

「あれはホントにヴェレナが遺したヨロイなのか？」

「あ、ああ・・・殺される1年前に完成して・・・」

「おかしいぞ。」

「何がおかしいんだよバリヨ。」

ネロはバリヨにそう尋ねる

「俺達は・・・ザウルス帝国と戦っていた時にヴェレナのヨロイと戦ったんだぞ。」

「それがどうかしたのか？」

「だがあのヨロイはヴェレナが持っていたものとは違う。」

「どう違うんだ？あの二つ目に角、色も似てるじゃないか。」

「見た目はな、だが全体の細かなものが違う。」

「ちょっと待ってくれバリヨ爺さん！親父が爺さん達と戦う時に使っていたのは……」

「そつだ、あれとはまた別のヨロイだ。」

「ああそついえば背中に背負っていたのは違っていたな。」

「それに合体もしてない。」

それを聞いたジークはある可能性を浮かべる

「という事は……親父の研究施設にガンダムが2機あったことになる!!！」

「そういう事になるな、恐らくあれはヴェレナが使っていたものの後継機だろ。」

「こつしちゃいられない!!すぐに施設に戻らないと!!！」

走り出そうとしたジークは立ち上がった瞬間足がふらつき倒れる。

「おいおい酒がまわってるのに慌てなさんなって。」

「少し落ち着けジーク。」

「これが落ち着いていられるかよ……！もしかしたら親父のガンダムが盗まれてるかもしれないのに……！」

「少し頭を冷やせ、今慌てたところでどうにもならん。」

「それにヴェレナが殺されてから2年も経っている、悪党はその時にもう盗んでいるはずだ。」

それを聞いたジークはしばらく黙りこむ。

「……そうだな、今さら慌てたところでどうにもならない……」

「若いなジークは。」

「一人前のヨロイ乗りになるには後20年はかかるな。」

「どんだけ気の遠くなる話……」

「よし！今夜は街の若いのと飲み明かすぞ！！」

「ジークも付き合っただろ？」

「ヴェレナの話もしてやりたいし。」

「……勘弁して下さい……」

第2話

完

第2話 戦士と勇者の協奏曲（後書き）

次回予告

その時に一度ジークさんとは別れました。彼も寄るところがあったみたいで

でも・・・その時には気付かなかったんですけど、あれっでもう1機あったみたいなんですよね。ちよつと驚きました。

その後で彼と出会った時は・・・少し雰囲気が変わっていましたね。それも怖い位に・・・憎しみに包まれて・・・

第3話 盗まれたガンダム

第3話 盗まれたガンダム（前書き）

そこは宇宙の底にあるおとぎの国

荒野に夢、街に暴力あふれるボンクラの理想郷

惑星 エンドレスイリユージョン

父が愛した町で驚愕の事実を知ったジークはヴァンと別れ

その真相を確かめに行く

それがまた自らを混沌の渦に巻き込むと知らずに

第3話 盗まれたガンダム

騒動が過ぎた翌朝

ジークは日が昇らぬ内にグローリアを後にし、父の研究施設があった村へと飛ぶ

そこで目にしたのは、ジークの記憶しているものとはかけ離れた荒れ果てた村の姿だった。

「何だこれは・・・俺の村が・・・」

盗賊にでもやられたのか、それともカギ爪の男の仕業か

だがいくら考えても仕方ない 今は父の研究施設に向かう

近くの広場にコアスプレnderを止め、研究施設の中に入る

ジークののヨロイ インパルスガンダムが格納されていた格納庫は逃げ出した当時のままの状態だった

そしてしばらく奥に進むと・・・父の自室、父が殺された現場に辿り着く

そこには荒らされた後もあり、床には父の血らしき血痕も視界に入る

「親父・・・・・・・・」

ジークは父との楽しい日々を思い出していた

「ジーク、お前のためにシミュレータつを用意したぞ！」

父は自慢げにカプセル型の機械を指差す

「これでガンダムの操縦訓練ができるぞ！」

「すごいや！これでマニュアル読破なんて退屈なことしないでいいや！」

ジークは期待に胸を踊らせ、シミュレータに入る

「いいか？これは俺とグロリアの奴らと戦った時に取っておいたデータがある。それを使って実践訓練をするぞ！」

父がシミュレータの機械を起動する

モニターに映ったのは恐竜型のヨロイだった

「父さん、このヨロイ何？」

「それは昔お父さんが戦ったヨロイ軍団でな、手ごわかったのなんのって……」

「父さん、これにまで勇者の話を入れないでよ……」

「よそ見るな！敵が来てるぞ！」

「分かってるよ！」

その時のシミュレータも当時のままシミュレータ室に放置されていた。

そして・・・父が殺された時の記憶も蘇る

「失礼します。」

父の施設に入ってきたのは、カギ爪をした男と長髪の女

「どちらさんで？」

「いえ、ここですごいヨロイが開発されていると聞いて立ち寄りさせてもらったのですが・・・いやーすごいですねこのヨロイは。」

「え？ハハハ！そうだろ！これが俺のヨロイであり俺の夢だ！完成したのは去年なんだが最終調整は先ほど終わった。」

「素晴らしい夢をお持ちなのですね・・・その夢は終わったのですか？」

「いやこれからだ！こいつを元にして新しいヨロイを創り上げる！まあ立ち話もなんだ、俺の部屋で茶でも飲みながら・・・」

そして父の自室に二人は招かれる

そこにジークとその姉『マリア・ヴェレナ』はとなりの部屋にいた。

「なるほど・・・あのヨロイを使って人の役に立ちたいと・・・」

「ああそうだ、あれを使いこの星をもつと発展させる。そして最終的にはこの星を旅立ち新しい星を見つける。」

「またあんな話ばかり・・・正直聞き飽きたわ。」

「いいじゃないか姉さん、親父も喜んでるみたいだし。」

「ねえジーク、ちよつと外に来て。」

「なんだい？」

ジークはマリアと外に出る

「ねえ・・・ここを出て私と暮らさない？」

「え！？何言ってるんだよ姉さん・・・」

「父は暇さえあればヨロイだガンダムだ・・・おまけに変なところと絡んでるし・・・」

「シノさん達のこと？シノさんはいい人だよ。」

「私は・・・あの女が私たちを捨てた母親に似てて嫌いよ。」

「似てるからって・・・」

「確かに捨てられた私たちを拾ってくれたのには感謝してる、けどそれだけよ。父親とは名ばかりで家族サービスもロクにしてない父

「親なんて・・・」

「そんなことないさ、親父は俺たちを養うために一生懸命・・・」

「そうよ・・・私たちの事なんか忘れて夢を追いかけていればいいのよ。」

「姉さん・・・」

「マリアはジークを見つめる」

「だからさ・・・二人で別の場所で暮らしましょ・・・たくさんいいことしてあげる・・・」

「ね、姉さん・・・それはちょっと・・・」

そこに、父の断末魔が響き渡る

「何だ!?!」

「父の部屋からだわ!」

2人が父の自室に駆けつけた時には・・・父が血まみれで倒れていた

「親父!!!」

「あなた達・・・私達の父親に何したの!!!」

「ごめんなさい・・・私はただ握手しようとしただけなのに・・・」

カギ爪の男の義手には血がこびりついていた

「ふ、二人とも・・・早く逃げる・・・」

「親父！」

「こいつらは・・・人類の敵だ・・・こいつらは・・・この星を・・・」

「申し訳ありませんが、これ以上同志の意思に賛同しない者達に私たちの計画を知られるわけには参りませんので。」

カギ爪の隣にいた女　ファサリナが三節根を取り出し、傷口に刺しとどめをさす

「ガアアアアア!!!」

「父さん!!!」

「お、お前たちだけでも・・・逃げるんだ・・・そして・・・奴らの好きに・・・さ・・・せ・・・」

そう言い残した後、父は動かなくなった

「ジーク!あんただけでも逃げなさい!!私が何とかしてあげる!」

「けど!」

「いいから!!!約束したでしょ!一緒に暮らそうって」

マリアの言葉半ばでファサリナが三節根で後頭部を殴り気絶させる

「ジーク君と言ったね、手荒なマネをさせてしまって申し訳ありません。お詫びと言っては何ですが・・・私と夢を見ませんか？」

カギ爪の男が穏やかな顔をして言った

「親父を殺しておいて何を・・・!!」

「あなたはお父さんのヨロイに乗ることを夢見ていたと聞きました。私はその夢を叶えて差し上げれます。」

「ふざけるな!! 見ている・・・! 俺が絶対・・・あのガンダムでお前らを殺してやるからな!!」

その後、慣れない操縦でガンダムを動かし施設から脱出した。

父の亡骸と姉を残して・・・

自然とジークの眼から涙が零れ落ちる

「父さん・・・姉さん・・・俺が・・・もつと強ければ・・・」

あの時、操縦が未熟であり動かすのが精一杯であったとはいえ

見殺す形で父と姉と別れてしまった。

だが悔やんでも今更仕方ないことだと分かっているも・・・ジークは懺悔の気持ちでいっぱいだった。

涙を拭い、父のデスクの引き出しを開け、もう1機ガンダムがあった事を示す物を探す

そしてある資料に目が留まる

「ん？これは・・・ガンダムの設計図？大分昔のものだな・・・」
その資料のヨロイの名前は・・・ストライクガンダムと書かれていた。

これがもう1機・・・父の乗っていたガンダムなのかは分からない。しかし

「この研究施設にあった事は確かみたいだな。よし、すぐ探さないと・・・」

「いや、探す必要はない。」

後ろから男の声が聞こえた。

「誰だ！？」

「それは既に同志達が運び出した。」

そこにファサリナが着ていたものと似ている服を着た大男が現れる。

「いただいた・・・？やっぱり2年前に親父のガンダムを・・・」

「小僧、何故あのヨロイが貴様が知らぬ所にあるか知りたくはないか？そしてあのヨロイが生まれたわけを。」

ジークは少し間をおき、その話を聞いてみることにする。

「いいだろう、俺も何が何だか分からなくなってるからな。それよりアンタ・・・名前は？」

「ガドヴェド・ガオードだ。」

「ガドヴェドか・・・続けてくれ。」

「はるか昔、この星はマザーの囚人惑星だった。その囚人の刑執行監視を行うための組織があった、その名はオリジナル7。」

「オリジナル7・・・？」

「オリジナル7は7人の刑執行人で構成されている。囚人の中に反抗する者が現れるとサテライトシステムからヨロイを召喚しこれを罰する。」

「囚人惑星か・・・反抗する奴がそれなりにいたなら結構大きいこととする奴もいたってことか？」

「察しの通りだ、囚人の中にマザーから持ち出したデータを持つているものが反抗運動を企てた。それはオリジナル7に対抗するため、5機のレプリカヨロイが開発された。」

「それが・・・ガンダム。」

「その名はデータ内に残っていた名前らしいな。それは反骨精神の象徴として囚人達に崇められた。確かに幾度か退けられたが所詮はレプリカ、オリジナルに勝てるわけもなく全滅した。」

「だが・・・生き残りもいた。」

「そう、その子孫が貴様の父『フランツ・ヴェレナ』だ。先代から引継ぎ、その後継機を造りだした。いつ起こるか分からない非常事態に備えるために・・・」

そして、その男から驚愕の事実を知る

「そしてそのヨロイを破壊したオリジナルの後継者こそ、この私なのだ。」

「アンタがオリジナル？・・・！」

「だが時が経つにつれてオリジナルは腐敗し、私利私欲のために権力を振るうようになった。そのような輩など滅んで当然！」

ガドヴェドは強く語る

「ということは今はオリジナルは一人も？」

「先代はな、今は同志が新たなるオリジナルを集結させている。そこで貴様がそのオリジナルの候補に入っているのだ。」

「俺が？冗談じゃない、親父を殺した女がいるところに誰が！！」

「確かに出さぬべき犠牲だったやもしれん。しかし、同志はこれ以

上そのような世界にせぬよう努力しておられる。その手助けをしてもらいたい。」

「聞こえなかったか？俺は親父にとどめを刺したあの女の仲間になる気はないと！！」

ジークは懐にあった装置のボタンを押すと、後ろの壁を突き破りガンドムの手が出てきた。

「アンタもヨロイ乗りなんだよな？先代ができなかったオリジナルの排除、この俺が成し遂げてみせる！！」

「所詮は反骨精神を受け継いだ人間か・・・よかろう！！」

ガドヴェドは斧のような武器を取り出し、指を鳴らすと斧に電気が走る。

「貴様の先代が犯した罪を貴様のヨロイの破壊によって断罪し、終わりにする！！」

ガドヴェドが斧を振りかざすと空から何かが降って来た。ダンと同じように

「あれが・・・オリジナルのヨロイか・・・」

「覚悟はいいな！小僧！！」

ガドヴェドが降って来たヨロイ　ディアブロ・オブ・マンディに乗りこむ

「ウェイクアップ・ディアブロ！」

「ブラストシルエット!!！」

ジークはブラストシルエットに換装し態勢を整える

「こちらから行くぞ！」

ブラストインパルス的高速レールガンを放つがディアブロはその寸胴な体型からは想像できない位のスピードでかわす

「ぬるい！それでも反骨精神を具現化させたヨロイか!!！」

ディアブロは急接近し左ストレートで殴り飛ばす

「ぐわ!?!なめるな!!！」

ガンダムはミサイルを斉射し牽制する。

何発か直撃するがディアブロに傷一つつかない

「その程度でオリジナルを倒せると思うな!!！」

爆発の塵が晴れたその時、目の前にガンダムはなかった

「何?」

ガンダムは上に飛び長距離ビーム砲を放つ態勢に入っていた

「この高出力のビームなら・・・落ちろおおお!!！」

引き金を引き、赤色のビームはディアブロに直撃する。

「やったか・・・！」

だが塵が晴れて見えたのはとんでもない光景だった

直撃したにも関わらず、ディアブロはそこに何事もなかったように立ち尽くしていた

「な！？直撃したはずだ！！何で傷一つ・・・」

「これだ、そのヨロイがオリジナルに勝てなかった敗因はそこにある。」

ディアブロはフィールドのようなものを纏っていた

「そう、それは光学兵器を無効化する電磁シールドがあったからだ。そのヨロイは光学兵器に頼り過ぎだった。」

「だから最終的には敗北したって言うのか・・・！」

「まだまだ、貴様のヨロイを破壊してそのヨロイ共々全てを終わらせる！！」

ディアブロは斧を振りかざし向かってくる

咄嗟に避けたが左のビーム砲が壊される

「くそ！」

ジークは再びミサイルを発射する

「小賢しい！！いくら小細工をしようが無駄だと何故分からん！！」

ディアブロは斧を円状に回しミサイルを防ぐ

塵が晴れぬ間に投降されたビームジャベリンがディアブロに突き刺さる。

「何！？」

「はあああああ！！」

そのまま押し出すようにジャベリンを取りそのまま崖に叩きつける

「これだけ接近すれば！！」

そのままバルガンを叩きこんだ

「己、小童だと油断したか・・・！！」

ディアブロに通信が入った。

「ガドヴェド様！！」

「どうした？」

「ハーバーパレードへ向かう時間が迫っています、お戻りください。」

「

「分かった。こ奴を黙らせてから行く。」

ディアブロはガンダムの顔面を掴み地面に叩きつけ、そのまま腹部に鉄拳を叩きこむ

「ぐわああああ!!」

「小僧、いずれは我々オリジナル7に敗れる。その時を楽しみにしている。」

しかしジークは攻撃の衝撃で気絶していた

ガドヴェドはその後何も言わないまま立ち去った。

そしてジークが目を覚ました時には日も沈んでいた

「あ、あいつは・・・見逃してくれたとでもいうのか・・・くそ!!」

その後、ガンダムは衛星に戻され修復される。

「しばらくブラストシルエットは使えそうにないな・・・」

コアスプレnderから通信が入る

「は、はい、カルメン99よ。」

「何だよカルメン・・・こんな時に。」

「あらお疲れ？」

「ちょっと色々あってな、何か用か？」

「急で悪いんだけどツイン・バレーまで来てくれない？」

「ツイン・バレー？何であんなところに？」

「保険よ保険、日が昇る前にきてよね。」

「分かった、すぐ行く。」

「あんだ・・・声怖いわよ、何かあったの？」

「い、いや・・・すぐ行くから待ってるよ。」

ジークはコアスプレnderを発進させ、ツイン・バレーへと向かう

第3話 完

第3話 盗まれたガンダム（後書き）

次回予告

そこは哀しい街でした。谷の底に捨てられたような哀しい街でした。ヴァンの哀しい過去と旅の理由を知ったのもそこででした。きっかけになったのはレイさんです。レイさんとヴァンは見かけも性格も全く違うのに、最初から何処か似ている気がしました。

二人は生まれて初めて出会ったその時から・・・

第4話 二つの盾と銃と剣

第4話

二つの盾と銃と剣（前書き）

そこは宇宙の底にあるおとぎの国

荒野に夢、街に暴力あふれるボンクラ達の理想郷

惑星 エンドレスイリユージョン

オリジナルの一人 ガドヴェドから知らされた驚愕の事実

ジークは戦いを挑むもその圧倒的な強さに敗れてしまう

更なる謎が深まる中、ジークはツイン・バレーへと向かう

第4話

二つの盾と銃と剣

カルメンに指示されジークはツイン・バレーに向かっていた。

入り口に着くとそこで待っていたのはもちろんカルメン

「あら意外と早かったわね。」

「そりゃどうも、でこんな急がせといて何の用だよ。」

「あ、そうそうこれはついでなんだけどね、アンタの話をして会いたいって人がいるのよ。」

「また勝手に俺の話をする……で、誰なんだ？」

「レイ・ラングレンって言うんだけど……私もつい最近会ったばかりで」

「ホントなのか！？レイさんがここに！？」

「え？何、知り合い？」

「ああ……ちょっと色々あつてな……」

そこに武士のような服を着て腰に刀のような銃を差した男が歩いてくる。

「お前がジークか。」

「レイさん……雰囲気が変わった？」

「ああ……こちらにも事情があつてな。」

「ところでシノさんは？結婚してたつて聞いて「ちよつとジーク！それは……！」

「いい、こいつの父親とは縁があつてな。シノは……カギ爪の男に殺された。」

それを聞いたジークは驚く

「そんな……あの野郎……親父だけじゃ飽き足らず……！！」

「フランツが殺されたのか？」

「ああ、とどめを刺したのはそいつじゃないが……実質あの男が殺した。」

「そつか……」

しばらく沈黙が続き、レイが重い口を開く

「お前のヨロイ、完成していたのだな。」

「ああ、というより大昔からあつたらしい。俺のはその後継機だ。」

「そつか、急で何だがウォーミングアップに付き合ってくれないか？」

「ウォーミングアップ？」

「ああ、お前のヨロイと俺のヨロイで勝負したい。」

「ヨロイって・・・まさかあれが!？」

「ああ、色々邪魔が入ったが・・・ヴォルケインは完成している。」

「あの・・・さつきから私、話がよくわからないんだけど・・・」

「別に知らなくていいぞ？無益な情報だから。」

「あつそ。」

カルメンは少し不貞腐れた表情をしていた。

「では始めるぞ。」

そう言ってレイは地面に銃を撃った

その瞬間、地響きと共に巨大なドリルが飛び出す

ドリルが開かれて出てきたのは、ジークもよく知るヴォルケインだった。

「さあ、お前もヨロイを出せ。」

「分かった。」

そう言ってジークは懐にある装置のボタンを押しコアスプレnder

に乗りこむ

空から飛来したパーツに合体しガンダムになる。

「いいヨロイだな、だが設計思想ではヴォルケインが上だ。」

「言ってくれるねレイさん。じゃ始めるか。」

「二人とも！！間違ってもツイン・バレーに引き金引くんじゃないわよ！！それと時間が来たら決着つかなくても中止！！いいわね！！」

そう言っでカルメンはタンダーで避難する。

「サンクシヨonz・チャージ ヴォルケイン！」

「ガイアシルエツト！！！」

空からガイアシルエツトが飛来し合体する

「ガイア・・・それで脚部のフォルムが違っわけか・・・」

「じゃさっさと終わらせようか、ちょっと疲れてるし・・・」

「負けた時の言い訳にはするなよ？」

「分かってる。」

ヴォルケインが先制を取りガトリング砲を発射する

しかしPS装甲がある分ダメージは喰らわない

「装甲があること忘れてたのか？」

「だが無限ではない、PS装甲でも展開時から76発浴びせればエネルギーが切れ効果がなくなる。」

「さっすが・・・だが！」

ジークは操縦桿を押し一気にサーベルを抜き接近する

「その前に倒せば済む事！！」

サーベルが直撃する一歩手前でヴォルケインはマントでガードする

サーベルは当たっている。しかしマントが斬れる様子がない

一旦逆噴射で距離を取る

「拡散マント・・・完成していたのか・・・」

「いくらそちらが先とはいえ光学技術はヴォルケインが上だ。」

「言ってくれるね・・・一応オリジナルに逆らったヨロイなんだがね。」

二人の攻防が続き、ジークのヨロイにアラームが鳴り響く

「やばいな喰らいすぎたか・・・PSが切れる・・・」

そう言っている間にPS装甲が閉じられ全身灰色に染まる

「装甲が切れたか、この一撃で終わらせる。」

ヴォルケインは拳銃でガンダムを狙う

「ビームも撃てないし・・・つか効かないし・・・いつそ実体剣としてキャノンソードでも使うか？」

ジークがキャノンソードを抜こうとした時

「はいそこまで！！どれだけ長い事ウォーミングアップしてるのよアンタ達は！」

そこにカルメンが割り込んでくる

「ジークはいいとしてレイ！仕事の時間よ！」

「というわけだ、仕事優先だ。」

ヴォルケインはジングウの中に入り地中に潜る

「一体どうしたんだ・・・？レイさん前に会った時より雰囲気どころか性格が・・・」

気になるのもあってかレイと共にツイン・バレーに入る

「ジーク、念のためヨロイの準備しておいて。」

「え？何でだ。」

「実はちょっと色々あつてね・・・」

カルメンが言うにはここ ツイン・バレーではエルとアールと言う双子の姉妹が父親の遺した遺産を巡って争っている。

これ以上犠牲者を出せないと言う事でアール側にヴァン、エル側にレイを用心棒として雇い翌日、決闘を行うと言う事らしい

「双子ばかりの街か・・・もちつと仲良く出来ないモンなのかね・・・」

「もう長い事争ってるから今さら和解は出来ないみたい。そういえばアンタも双子なのよね？」

「かなり似てないけどな。あれ？レイさんは？」

「それがさっき仕事の話が終わらせたらどっか行っちゃったのよ。全く何処行っただか・・・」

「案外向こうで決着つけてるかもよ？」

この時ジークはほんの冗談半分で言った事だったのだがカルメンから発せられたのは

当たり前のような言い方だった

「そうかもしれないわ、ちょっと出てくる。」

そう言ってカルメンは部屋を後にする

「…………え？今……当たり前のように言った…………？」

しばらくするとレイが戻って来た

「レイさん！ホントに決着つけに行ったのか……！」

「ああ、だが向こうの用心棒に邪魔された。」

「一体どうしたんだよレイさん……こんなことする人じゃなかったはずだ！」

「ジーク、俺はシノが殺されてから自分を変えた。あの男を八つ裂きにする、そのためなら手段を選ばない。」

ジークはその後、何も言えなかった。

ジークが知っていたのは笑顔が絶えない心やさしいレイ。しかし今目の前にいるレイは全くの別人だった。

その夜、ジークはレイと雇い主である得るの護衛についていた。

「納得いきません姐さん！これじゃ今までと同じですよ……！」

「そう？片割れは傷ついたけどアンタは無傷じゃない？」

「それは……」

「やっとこの街にも変化が起きるわ。自分と同じ顔と睨みあつなつてたくさんよ。」

「はあ……何で俺まで……」

ジークはテーブルで頂垂れていた。

「一応あなたにも報酬を渡すよう言われてるんだから、仕事はきちりこなしなさいよ？」

「それよりも……アンタら双子だろ？もっとう……」

「仲良くしろと？冗談じゃないわ、パパの遺産は私だけのものよ。」

その時 入口が開く

「皆さんこんばんは。」

そこに現れたのはヴァンだった。

「ヴァン!？」

「レイ君はいますか？」

呑気にあいさつしている間にレイはヴァンめがけて発砲したが、銃弾は男の右肩に当たった。

「え？」

レイが銃を連射した瞬間ヴァンは瞬時にしゃがんで避け、そのまま
蛮刀で斬りかかり、霊はそれを受け止める

素早く距離を取ったヴァンは物陰に隠れレイの銃撃を防いだ

「やめろ！やめてくれ！！」

「レイさん！！」

「あのさ、俺仕事受けちゃったんだよ。護るって。」

ヴァンがゆっくりとレイに近づく

「だから・・・ウチの依頼主、お前が殺る前に・・・お前を殺る」とにした。」

銃口に自らおでこをつけ睨みつける

二人は静かに笑うとまた攻防が始まる

「誰か！侵入者よ！誰か！！」

レイは部屋から脱出しヴァンはそれを追い掛ける

「何なんだ・・・あの二人・・・」

ジークはただ呆気にとられていた。

その後、ツイン・バレーの外に出てコクピットの中で寝る事にした

そこで

「ん？」

空の向こうに何か飛び去る物体を見つけた

戦闘機のような赤いヨロイが見えた

「何だあれは・・・？航空機ではなさそうだが・・・」

そして夜が明け、決闘の時間がやってきた

「エル、パパの遺産は私だけのものよ。」

「あんだこそ、今日からその顔と声は私だけのものよ。」

「立会人として確認するわ、各陣営は勝敗に従い入口の鍵を差しだし勝者の条件を無条件で飲むこと。OK?」

エルとアールは静かに頷く

「じゃあ二人は街の入り口の決闘場に移動して」

カルメンの言葉半ばでレイが銃を取り出し、アールの脇腹に銃弾を撃った

「姐さん!」

「レイさん何てことを・・・!」

「テメエ!!!」

ヴァンが斬りにかかるが地面が突然崩れ出して足が止まる

「鍵は揃った！」

エルは笑いながら遺産がある扉へと向かう

ジークもレイの後を追いついて扉まで走る

「何かあるのかしら？」

3人が向かっていった先には4本の手が生えているヨロイだった

「ヨロイ？」

「まさかこれが遺産だって言うのかよ……！」

「遺産などどうでもいい、奴の情報は？今さらなど言うのではないだろうか？」

レイはエルに銃口を向け脅す

「やめてくれレイさん！！これ以上人殺しは……！」

「ジーク、言ったはずだ。奴を殺すためなら人でなしにでもなる。」

そこにアールを抱えてヴァンが入って来た

レイはヴァンめがけて銃を撃つ

「アール！今頃来ても遅いわ！パパの遺産は私だけのもの」

『同志！』

急にモニターが起動し、男の顔が映し出された

「パパ・・・」

『お申し付け通りのヨロイ、ツインロックは一応完成はしました。機能を上げるためクローンの感應能力を利用したのですが・・・』

「クローンって何？」

「さあ・・・」

『申し訳ありません。制御パイロットの育成をことごとく失敗しました。唯一の成功例であるケイとジェイは脱走し発見することができませんでした。そして私達は研究過程で発生した病原体で同土のお越しを待たぬまま滅びるでしょう。せめてカロツサプロジェクトのデータがお手元に届いていればよいのですが・・・』

「まさか昨夜見たヨロイがデータを・・・？」

「あのヨロイ・・・二人乗りか。」

レイはツインロックのコクピットを眺めて言った

『なお、仮の街にいる実験体はデータ収集用のサンプルです。目的のため感情を操作したのですが、ミスで対立意識が芽生えてしまいました。無礼を働く事がありましたらどうぞ処分して下さい結構です。』

それを聞いた瞬間、エルとアールの表情が変わる

『重ね重ね申し訳ありません、しかし我々は今でもあなたに限りない内同志愛を抱いております。たとえ約束の期限が過ぎ、あなたに見捨てられていても我々は・・・』

だんだんジークは怒りに身体を震わせ、拳を握る

『私は・・・あなたのために・・・』

「この野郎！！！」

怒りにまかせモニターを叩き割る

「これが・・・仮にもこいつら生み出した親が言う事かよ！！！」

「無駄足だったな・・・」

「パパ・・・」

レイはその場を立ち去ろうとするがエルが縋りついてきた

「ねえ！嘘だよね！パパが私達をサンプルって・・・処分って・・・」

「・・・離せ。」

レイは縋りついてきたエルに容赦なく銃を撃った。

「エル！！！」

ジークはもう言葉が出ない位呆気に取られていた

「デメエ!!!」

そこにヴァンが斬りかかり、また二人の乱闘が始まった

「あの二人・・・どうかしてる・・・」

「お前はもう人間じゃねえな!!!」

「ああそうだ、復讐のためなら人間なんて・・・!」

「もう俺の知っているレイさんじゃない・・・馬鹿同士そこで殺しあってる。」

ジークがその場を立ち去ろうとしたその時、

ツインロックが突然動き出す。

「パパアアア!!!」

「あいつらヨロイに・・・!」

ツインロックが暴れたせいで建物が崩れ出入口が塞がれる

「エル!私達パパの中にいるのよ!」

「ええ!感じるわ!パパは私達のもの!」

「誰にも渡さない!!!」

「ここは私達だけのもの!!」

その後ツインロックからミサイルが放たれた

「ちっ・・・仕方ない!!」

ヴァンは蛮刀を振りかざし、ダンを召喚する

その拍子に天井に穴が開いた

「ヨロイ・・・!!」

「ウェイクアップ・ダン!!」

「しめた!あそこからならガンダムを呼び出せる!!」

ジークはガイアシルエット状態のガンダムを呼び出す

すぐコクピットに入ったが地盤が崩れバランスが保てない

「くそ!変形して叩くしかないか・・・!!」

ガンダムが変形しケンタウロス形態になる。

「そいつから降りろ!!」

「私達は・・・パパと一緒によ!!」

ツインロックがダンに掴みかかり壁に叩きつけた後、連撃を仕掛ける

「そいつから降りろ！！何で闘う！！」

「パパが望んでいるのよ！！」

「今度こそ私達はパパと3人で幸せに暮らすわ！！」

「だから・・・アンタ達も邪魔！！」

「レイさん逃げろ！！」

ジークがレイの前に出る

「ここは墓場だな。」

「パパと一緒に！」

「いつでも一緒に！」

「何処でも一緒によ！！ハハハハハ！！」

「あの二人があそこまで動かせるわけがない・・・何か特別な薬が投与されてるんじゃない・・・」

「分かった、ならそうしてやる。」

レイは銃で足元を円状に撃ち、ヴォルケインに乗りこむ

「サンクシヨンスチャージ・ヴォルケイン！」

「あいつもヨロイを・・・！」

ヴォルケインはガトリング砲を浴びせ腕を2本破壊した
だが次は残った2本の手から槍状の武器が飛び出す。

「パパ！！私達踊りも上手なの！！！」

ヴォルケインはコクピットに照準を定める

「デリート。」

しかしそこにダンが間に入り二人を庇う

「やめる！！やり過ぎだ、レイ！！！」

「俺に無駄なやさしさを振りかざすな。」

二人が睨みあっている間にツインロックが接近してくる

「俺にはやるべきことがある。そのためなら・・・決して迷わない
」！」

ダンとガンダムで通り過ぎ様に腕を破壊した後、ヴォルケインはコクピットの真後ろの部分撃つ

「な！？」

「俺の目的を阻むものは・・・何であろうと、排除する！」

ツインロックから火が噴き出した

その後ヴォルケインはジングウに乗りこみ地中に潜る

「レイ!!」

「レイさん!!」

「レエエエエイ!!!!」

ツインロックが爆発し、ツイン・バレーは崩壊した

何とか脱出出来た二人は外で待っていたウエンデイの元に行く

「ヴァン!ジークさん!あの人たちは・・・!」

二人はただ黙っていた

「じゃーねー、生きていたらまた会いましょう!」

カルメンはタンダーで何処かに飛び去った。

「・・・後味が悪すぎるな・・・」

「ああ・・・」

「しばらく同行してもいいか?コアスプレnderのエネルギーが切れかけてんだ。衛星に戻さないと・・・」

「好きにしる。」

こうしてまたジークはまた一人と行動と共にすることになった。

第4話 完

第4話

二つの盾と銃と剣（後書き）

次回予告

旅って言うのはホントに何が起こるのかわかりません。そこは爽やかで平和な港町でした。

でもそこでもヴァンは命を狙われました。気が付いたらジークさんは何処にもいなくなりました。多分付き合っただけになっちゃったんでしょう、その時はそう思っていたんですがそうじゃなかったんです。やっと見つける事が出来たみたいです。自分の仇・・・あの時の女の人が

第5話 構うバカ 突っ込むバカ

第5話 構う馬鹿 突っ込む馬鹿

「店員さん、ステーキと調味料ありっただけ。」

ヴァン一行はハーバーパレードのレストランに来ていた。

料理が運ばれ、ヴァンはステーキに調味料をこれでもかという位にかけていた。

「あのお、それどころにかならないか？気持ち悪い。」

「うるせーな、俺はこれがいいんだよ。」

「まったく・・・誰の奢りだと思ってんだよ。」

「え？」

「いや、勝手について来てるのもあれだから俺が食事代出そうかなと・・・」

「そんな、お構いなく！」

「いいんだよ、遠慮すんな。」

と、そこに隣の席から話声が聞こえてきた

「愛しているわ、マスカット。」

「俺もだ、ハニーチェリー。」

「ん？」

「何かしら……？」

「今まで迷惑を掛けたな、だが約束する。明日から俺達はパラダイスで目を覚ます。シャンパンのシャワーを浴び、シルクのシーツに包まれて、深く激しく愛し合うんだ。」

隣から男のプロポーズのような言葉が聞こえてきた

「もう金がないからって侘しい思いはさせない。」

「私はあなたがいれば何処だってパラダイスよ。」

「ウエンディ、耳塞いどいた方がよくないか？」

「子供扱いしないでください。」

「い、ごめん………」

「ハニーチェリー………」

「マスカット………」

そして二人は周りの眼を気にも留めずキスをする。

(よく恥ずかしくないよな……まあ俺よりは幾分マシか……)

「チェリーの味だ。」

もちろん飲んでいたカクテルの味だと言つのは言つまでもない・・・
ような気がする

「幸せになりましたよ、マスカット。」

「そう・・・だから・・・」

突然男がジーク達の席に向かって

「手を上げる！！」

突然、銃を向けてきた。

「あ？」

「え？」

「何だ何だ？」

「お客様！？」

女も周りの客に銃を向け脅す。

「マナーが悪いよ、黙って食事続けな！ベイビーちゃんもね？」

ウェンディが少しムスツと顔をゆがめる

「あの、人違いじゃないですか？」

「違わない！白いヨロイ乗りジークと『掃き溜めのプリティヴァン』とはお前の事だろ！！」

「何だよ掃き溜めって……っーかそのまんまんだけど俺の名前……」

「いいえ、僕は『縁の下の力任せヴァン』です。」

「気にいつてるのそれ……」

「ベイビーちゃん、お静かにね？」

「ヴァン達に何か用ですか？」

ウエンディが女に尋ねる間もヴァンは調味料を掛け続ける

「お前らのヨロイを寄越してもらおうか！」

「俺の？ダンをか？」

「まさか……ガンダムのこと？」

「そいつらをトニー一族に売りつけてお金に換えるのさ……」

「はあ？」

「あんたらのヨロイはそこらのは違うんだよな？」

「違っつっちゃ違っつがな……」

「トニーは街一番のヨロイマニアだ！吐きプリヴァンのヨロイならいくらでも金を出す！」

「ジークのヨロイはついでなんだけど・・・そしてそのお金で私達は結婚式を上げるの！街の教会で！」

「分かったらヨロイをよこせ！！」

二人が銃を向け同時に要求する

「断る、ダンは俺のヨロイだ。俺だけのものだ。」

「俺のガンダムは売り物じゃない。そこらのジャンク屋みたいに売りつけもしない。」

「なあ・・・命あつてのものだねって言うだろ！？」

「いや、あれが俺の命だ。俺達は一心同体なんだ。」

それはあながち間違つてはいない

「ええ！？死にたいのか！？死にたいのかよ！？」

そういう男の手は震えている

（かなり度胸がないな・・・このマスコット・・・アスコット？どっちだっけ？）

ジークは頭の中で余計な模索をしていた。

「あたしたち本気なんだからね〜！ねえマスカット？」

「お、おう……」

「はいはい。」

ヴァンが一瞬で男の手から銃を張り飛ばした後、ピンタを数回当てて倒す

「マスカット!?!」

「ごめんなさい!?!」

ウエンディがその隙について女の足を引っ掛けバランスを崩させ、ヴァンは女の銃を奪う。

「ハニーチェリー!!」

マスカット(?)がヴァンに向かうが蹴り飛ばされ、窓を突き破り外に出した。

「ほら、受け取れ!」

ヴァンはハニーチェリー(?)を男に目がけ放り投げ、マスカットの顔に尻もちをつく

「マ、マスカット大丈夫!?!」

「応用力が足りないな。とっとと消えろ。」

(そういうこいつも応用力あんのかな・・・?)

「フン！今は引いてやろう！だが・・・また会おう！吐きプリヴァン！！！」

「バカバカバカ！！！」

そして二人はそそくさを逃げていく

「俺いつの間にかはぶかれてるし・・・」

「何なんだありゃ？」

二人が振り返ると、店長らしき人が立っていた。

「お客様、誠に申し訳ありませんが・・・消える。」

3人は仕方なく、ロクに食事も出来ないまま外に出た。

少し離れたところで3人は休憩する。

「海って広いのね・・・それに天気もいいし・・・」

「海を見るのも久しぶりだな・・・」

ヴァンの腹の虫が聞こえた

「嫌な街だ、バカはいるし・・・飯はお預けだし・・・」

「そんなことないって！明るいし楽しそうだし・・・」

そこで時計がちょうど1時になり、からくり時計が動き出す。

「かわいい〜！」

「へえ・・・結構楽しそうな街だよなヴァン？」

しかしヴァンはお構いなしに歩きだし、ホットドック屋に足を運ぶ

「右手が義手の男ね〜。」

「ああ、カギ爪みたいな形なんだが・・・」

「さあね、聞いた事もないね。」

「ついでに聞きたいんだが・・・長髪の女は？」

「長髪？」

「ああ、黒くて・・・なんか雰囲気か怪しいような感じの女なんだが・・・」

「ああ、そういえば・・・」

その話の途中で何やら軽快な音楽が聞こえてきて、後ろを振り返ると・・・

「見つけた!！」

「見つけたわ!！」

そこにレストランで会ったカップルが奇妙な自動車に乗ってきた。

「な、なんだあの趣味的な乗り物……」

「またお前らか……変なのに乗って……」

「へっ！ウツトリするのも無理はないな！」

「してないし。」

「これは私が用意したボディを……」

「俺が改造した！」

「正に二人の愛の結晶！」

「ラブデラックス！！」

「最高のヨロイだ！！」

「……いや、ヨロイじゃないだろそれ……」

「このゴージャスなボディ！そしてラブリーなエンジン！はつきり
言っただけで逃げられた奴はいない！！」

「余裕で逃げれそうなんだが……」

「それジークさんだけです。」

「今日からあなたは愛の捕らわれ人ヴァン！」

「だから捕まって！ヨロイをよこせ！！」

男がヨロイ（？）のアクセルを踏み突っ込んでくる

「うわああ！？」

「さあ観念し」

その言葉半ばでヴァンはケチャップとマスタードの入った容器を投げ、フロントガラスにぶちまけ視界を奪う。

そしてそのまま店に突っ込み、店は無残な姿となった

「お・・・俺の店・・・」

「スマン！ゴメン！ソーリー！アイブラクシヨ〜ン！！よし謝った！」

「あれで謝ったつもりなんだ・・・」

「マスカット、私がああ男を！」

「分かった！バイバイマイラブ！！」

マスカットが前にあるボタンを押すと後ろの部分が切り離される

「ラブマシーンGO！」

その部分が飛行艇のようなものとなり、空を飛ぶ。

「頼んだぞハニチエリー!!!」

そう言いながら水柱を立てて落下した。

「こいつら何なんだ一体……」

「何あれ？」

見上げると上からダイナマイトが降って来た

「ああ！来ちゃダメよベイビーちゃん!!!」

しかし忠告が遅く、爆風でウエンディが海岸に飛ばされる

「きゃあああああ!!!」

「ウエンディ!!!」

「クソ……前が見えん……!!」

ヴァンが床を蹴り飛び上がる

その向かった先は浮上したラブデラックス

「はあ……付き合ってられん……」

ジークは呆れその場を立ち去った

近くに店で軽く食事を済ませ、街を歩く。

「こんな賑やかな町に・・・あの女が来るわけないか・・・・・・・・・・
ん？」

ジークの目線に止まったのは・・・あの時、父が殺された時に見た
ファサリナの後姿にそっくりの長髪の人物

まさかと思いジークはその人物に話しかける

「おい。」

「はい？」

その人物が振り返ると・・・間違いなく、ファサリナだった。

「あの、どちらさままで？」

「忘れたと言わせないぞ・・・俺の事を・・・！」

ジークは怒りの表情を見せる

しかし、ファサリナは反対に笑顔になり話す。

「あら、あなたはフランツさんの息子さんの・・・ジークさんと言
いましたか？」

「やっと思い出したか・・・！テメエに会える事をどれだけ望んだ
事か・・・！」

「あら？と言う事は・・・ガドウェドさんのお誘いを引きつけてくれるのですか？」

「ざけるな！！俺はテメエを殺すために今まで生きてきたんだ！！」

「あら・・・なんて乱暴な・・・それではお姉さんが哀しみますよ？」

「テメエに姉を語る資格はない！！」

ジークは思わずファサリナの胸倉を掴んだ。

それを見ていた野次馬は

「なんだなんだ？」

「男と女の喧嘩？」

「男の方は胸倉掴んでるわよ・・・」

「やーね・・・」

「でも女の方は結構美人だぞ？」

「レストランのカップルもそうだが・・・ああいう愛し方って流行ってんのか？」

好奇心な視線で見ている。

思わずジークは手を放す。

「私も女性です。女性の胸倉を掴むとは・・・少しデリカシーがないですね。」

「お前に言われたくない・・・！ここじゃダメだ、何処か建物の中に・・・」

「ええ、いいですよ。」

二人はその場から退散し、教会の中に入る。

「ここなら人が少ないだろう、じゃあ続きを」

「ようこそいらっしやいました！！」

そこに現れたのは看板を持った陽気な神父のような男

「おおこれはなんときれいな女性ですこと！！そして男性も華やか・・・これは本日最大の式が挙がるかもしれせん！！」

「まあ・・・ありがとうございます。」

「・・・っーか何だアンタ？」

いつものようにさりげなくツッコミを入れるが顔が強張っている

「ただいま5分の時間、50、000の予算で結婚式が挙げられま
す！」

「結婚式!?!」

「言われてみると・・・中に花婿、花嫁ばかりですね・・・」

「ああ・・・あのバカップルが言ったのはこれか・・・」

「誰かのご紹介？そうです！この街なら大丈夫！！たとえ善人悪人でも愛は平等なのです！さあ！今すぐ式の手続きをグブ!？」

ジークはたまらずその男の胸倉を掴む。

「誰がこんな奴と式など挙げるか！！ふざけるのもいい加減にしろ！！！」

「い、いやあ・・・まさか喧嘩中とは思いませんでしたので・・・しかし、これを機会に・・・」

「お前を機械で踏み潰してやろうか！！！」

「ヒイイイ!?!？」

「あら、私は構いませんよ？花嫁には少し憧れていたもので・・・」

「お前・・・!!！」

ジークは手を放し、呆れかえる。

「・・・この街はバカばかりか・・・！街の外に出る。」

「ええ・・・いいですよ。」

二人は教会を後にし、街の外まで出た。

「まずお前に聞きたい事がある。何故、父を殺した？」

「あの時も申し上げた通り、当時の状況で同志の計画を知られるわけには参りませんでした。」

「他に方法はなかったのか・・・！」

「あれ以外、方法はありませんでした。」

「お前・・・人の命を何だと思ってるんだ!!！」

「あなたの父親を殺めてしまった事は本当に申し訳なく思っています。今の私には謝る事しか出来ません。」

「謝って済む問題じゃないだろ!!！」

「では、何をしたら許してもらえるのですか？それが出来るのならはこの身を捧げる覚悟です。」

「ク・・・・・・・・・・・・・・・・!!！」

ジークの顔が限界まで強張る。その直後

「フッフ・・・ハハハハハハ!!！」

高笑いをしだした。

「それだ・・・それが聞いたかったんだよ・・・!!」

「では・・・」

「ああそうだ、お前の命だ!!それを俺に捧げるのならそれで本望だ!!」

「命ですか・・・しかし、今ここで私が死んでは後後困るのですが・・・」

「自分で言った事をはぐらかす気か?この身を捧げる・・・つまり屍を授けてもいいと言う事にならないか?」

それを聞いてファサリナが呆気にとられる

「何て残酷な考えをするのでしょうか・・・」

「残酷なのはお前らだ!その同志の計画は何かは知らないが・・・そんなものはどうでもいい、俺は・・・お前を殺すために強くなつた!!」

「ここで私を殺しても憎しみが増えるだけです。憎しみは何も生みません・・・」

「生まれるさ・・・仇を取れた達成感がな!!」

ジークは懐の装置のボタンを押し、コアスプレnderを出す。

「そのヨロイは・・・!!」

「ガドヴェドから話は聞いている。お前もオリジナル7なんだろう？
ならヨロイを出せ!!」

「ヨロイですか・・・?」

「そうだ!このガンダムで・・・父『フランツ・ヴェレナ』の仇を
取ってみせる!!」

「そうですね・・・仕方ありません、私はここで止まるわけにはい
きません。」

ファサリナは三節根を取り出し、電気を走らせる。

「まだ改修が済んでいませんが・・・止む負えません。」

そこにダンとディアブルと同じように、ヨロイが落下してきた。

「各フライヤー射出!カオスシルエット!」

「ウェイクアップ・ダリア。」

ガンダムはカオスシルエットと合体し、ファサリナはダリア・オブ・
ウェンズデイを起動させる

「あれから俺も成長したんだ・・・必ず勝ってみせる!!」

「時間もあまりありません、早めに切り上げます!!」

「心配するな、時間は掛けない。速攻で終わらせる!!」

ジークは背部の機動ポットを展開し、ミサイルを放つ。

しかし全てダリアの三節根に防がれる

その隙にビームクロウで斬りかかるがダリアは身体をくねらせ紙一重で避ける

「ガドヴェド様からお話は聞いておりましたが・・・さすがはオリジナルの補填メンバーに選ばれただけの事はありますね。」

「言っただろ、あれから成長したと・・・待っててくれ父さん、今仇は討ってみせる!!」

ガンダムの機動ポットが射出され、ダリアを取り囲む

「これは・・・?」

「一斉射撃!!」

機動ポットのビーム砲が四方八方に粹かい撃ち込まれる。

しかし、ダリアもディアブロと同じく電磁シールドでビームを防御する

「この程度のビームでダリアは倒せません・・・!!」

「甘い!!」

ガンダムが分離し、レッグフライヤーが突撃しダリアに直撃する

「あああ！！」

「おおおおおお！！！」

そのまま変形し、盾を変形させたアームで両腕を掴む

「これで終わりだ！！ビームクローで突きさしてやる！！！」

ビームクローが展開し、ダリアに突き刺さる

「ああ・・・！それでは無駄に花が散ってしまいます・・・」

「この期に及んでふざけたことを・・・！」

ガンダムの右腕のアームがコクピットに照準が定められ

「これで終わりだ！！死ねえええええ！！！！！」

一気に突き刺そうとしたが、その瞬間ダリアの身体が蒼く光り、液体がガンダムにかかる

「うわああ！？」

その拍子に地面に転がり、その液体から電気が走り、ガンダムのエネルギーが奪われていく

「うわあああああ！！！」

そして、エネルギーがなくなり、PS装甲が切れ動かなくなる。

「あなたに必要なのは己の憎悪すら忘れられるほどの甘い蜜・・・お時間が来ましたのでしばらくそこでお待ちください。」

そう言つてファサリナはダリアから降り、街へと歩く。

「待ちやがれ！！こうなつたらせめてこの手で・・・！！」

そう思いコクピットハッチを開けようとしたが、ハッチにまで液体がかかり、開けられなかった。

「くそ！！こんな時に何故開かない！！せつかく・・・せつかくチャンスが来たつていうのに・・・！！」

「慌てる必要はありません。そのGE-R流体は一日過ぎれば剥がれおちて出られるようになります。それに、またいつか会えますのでご心配なく。」

「ふざけるな！！俺は・・・俺はここで父さんや姉さんの仇を・・・！！」

「勘違いしているようなのでお教えします。あなたのお姉さん、マリアさんは生きております。」

「何だつて！？？どういうことだ！！」

「それは教えられません。では、ごきげんよう。」

ファサリナは挑発するでもなく、純粹に笑顔で別れを告げた。

「待て！！逃げるな！！チャンスは今しかないんだ！！動けよガン

ダム！！お前も待ち望んでいたチャンスなんだぞ！！何で動かないんだ！！！！」

ジークは操縦桿を無造作に動かし、その目には涙が流れ、ヘルメットに滴が滴る。

「やっと見つけたのに……！！仇が討てる絶好のチャンスが……！！こんなところで……！！クソ……！！」

クソオオオオオオオオ！！！！」

ジークはコクピットの中で必死に抵抗をしたが、結局その夜に力尽き、気絶するように眠った。

気が付くと朝になっていた。ファサリナの忠告通り、流体が剥がれおちた。

ハッチを開けて外に出たジークであったが、その表情は哀しみに暮れていた。

ガンダムを衛星に帰した後、ヴァン達と合流するためにハーバーパレードに行った。

そこで喫茶店に立ち寄り、ヴァン達の行方を店員に聞いた。

「あ……」

「何でしょう？」

「黒ずくめの男と……ツインテールの女の子を見かけませんでしたか？」

「ああ、その二人なら1時間ほどまえに店を出られました。」

「1時間前に？」

「ええ、何でも船に乗ると仰られていましたが・・・」

「そうですか・・・ありがとうございます。」

「いえ、こちらこそお役に立てず・・・」

ジークもその店を出て、海でコアスプレnderに乗りこむ。

「今から追いかけても意味がない・・・仕方ない。また当てのない旅の始まりだ・・・」

ジークはふと、首にかけているロケットのカバーを開け、当時、親子3人で仲良く写っている写真を見る。

「父さん・・・ごめん。また先が伸びてしまった・・・けど、今度会う時は・・・必ず・・・あの女・・・ファサリナを倒すから・・・それまで待っていてくれ・・・」

新たに決意をし、コアスプレnderを発進する。

昔のように当てもなく、ただ飛び続ける・・・

第5話 構う馬鹿 突っ込む馬鹿（後書き）

次回予告

ジョシユアさんと初めて会った時に、ジークさんと再会しました。何処か元気がなく、無理やり元気に見せていて少し心配しました。ジョシユアさんはヨロイに詳しくて思いやりがある人でした。ヴァンは嫌っていましたが私達はすごく気が合いました。何となく似ていたんです。私達。

第6話 ソローメモリー

第6話 ソローメモリー（前書き）

傷だらけの夢が風に吹かれて転がっている。

大きな欲望の嵐が小さな幸せを奪っていく。

惑星エンドレスイリユージョンはそんな星、所詮、宇宙の吹き溜まり。

ついに仇と出会えたジークであったが、その圧倒的な力に敗れ去った。

悔しさを抱いたまま、再び当てのない凱旋飛行をするのであった。

第6話 ソローメモリー

ハーバーパレードを出たジークは、とある山岳地帯を飛んでいた。辺りは霧に覆われ非常に視界が悪い。

「かなり霧が濃いな……あれ？」

ふと下を見下ろすと、巨大な竜のようなヨロイの前に一人の少年が立ち尽くしていた。

「な！？何だあのヨロイ……いや、問題はあいつだ！あんなところで何を……」

とにかく、例の如くガンダムに合体し、フォースシルエットに換装しそこに向かう。

するとそのヨロイが襲っていた対象は……なんと別れたはずのヴァンと聖職者のような服を着た少年だった。

「またヴァンか！まったくどうしてこう騒動に巻き込まれるんだよ！」

とにかく、あのヨロイを止めなければ二人が危ない

そう思いビームライフルを向けるが、その前に竜のヨロイの顔面に何かが直撃した。

「な！？」

続けて攻撃が加えられ、竜のヨロイはその場を飛び去った。

そして、攻撃された元を辿ると、その先には・・・ヴォルケインがいた。」

「ヴォルケイン・・・レイさんか!？」

「あいつ・・・!?!？」

「ヴォルケイン・・・ヴォルケインだ!」

少年がまるでヴォルケインを知っているかのように叫ぶ。

「僕です!探してました!一緒に帰りましょう!」

「あいつ・・・一体何を・・・!」

その言葉に應えるかのようにヴォルケインのハッチが開き、レイが姿を現す。

「僕です!ジヨシユアですよ!兄さん!」

「え・・・!ジヨシユアって・・・!」

「帰れ。」

レイは冷たくそう言い放つ。

「俺にはやるべきことがある。」

「兄さん……でも！」

「二度と追ってくるな。」

そついい残し、ジングウが地下に潜る

「兄さん！兄さああああん！！」

「おいジーク。」

「な、何だ？」

「この近くに町はあるか？」

「あ、ああ……この山岳地帯を越せばあるが……」

「ついでだ、送ってくれ。」

「俺は運び屋じゃないんだぞ……」

しかし、このまま放っていくわけにもいかなかったので仕方なく町まで飛んだ。

とある場所で休憩し、ジョシユアの話を書くことになった。

「兄さんは……カギ爪の男にシノさんを殺されて変わってしまいました。それまでは穏やかな人だったのに……」

ジョシユアの話全員が黙って聞いていた。

「復讐で頭が一杯になって……僕は兄さんを止めたいんです。」

「なぜだ？」

「相手を殺しても、傷が癒えるわけがないじゃないですか。」

それを聞いたジークは少し考え込んだ。

（確かに……俺のやっていることもそうだ……けど……）

「馬鹿馬鹿しい。」

そう呟き、ヴァンが立ち上がる。

「え……？」

「あいつがいるってことはあのヨロイ、カギ爪に絡んでるってことだ。聞き込みをしてくる。」

「僕も連れてって下さい！」

「嫌だね、復讐をやめさせるとか、癒されないとか、そんな口先だけで片付けようとする奴は足手まといだ。」

「ヴァン……」

「それに、俺はお前のクソ兄貴が大嫌いだ。」

「え!？」

「役立たずはウチに帰りな。」

「そんな言い方ってないと思うわ!!!」

そこでウエンデイが怒鳴る

「お兄さんが心配なのは当たり前じゃない!それに・・・みんながみんなあの人やヴァンみたいに強いと思わないで!!」

「ウエンデイさん・・・」

「フン、勝手にしろ。」

そう言ってヴァンはその場を立ち去った。

「ったくヴァンの奴・・・」

「ありがとうございます。」

「うっん、ジヨシユアさんの気持ち、分かる」

言葉半ばでジヨシユアがウエンデイの手を取る

「ウエンデイさん、僕たちも手分けして情報を集めましょう!そうしたら兄さん達も話を聞いてくれますよ!」

「そ、そうですね・・・」

「そうですね!兄さんは元々やさしくて穏やかなナイスガイなんですよ!ヴァンさんもきちんと話をすればきつと・・・」

「さすがに難しくないか・・・？」

「ジークさんも手伝ってくださいね！」

「え！？あ、ま、まあ・・・いいけど？」

「そういえばジークさん、お姉さんは元気ですか？」

「え？ジークさんってお姉さんがいるんですか？」

「あ、ああ・・・」

「ジークさんとマリアさんはすごく仲がいいんですよ！例えて言うなら兄さんとシノさんみたいな関係で」

言葉半ばでジークがジヨシユアの胸倉をつかんで持ち上げる

「ジヨシユア・・・少し黙っていようか・・・！」

その顔はジヨシユアを震え上がらせるには十分に怖い顔だった。

「は・・・はひ・・・」

「ジークさんってそういう人だったんですね・・・」

「おいウェンディ、真に受けるなよ！でまかせだからな！」

何はともあれ、ジークは単独で情報を集めることにした。

あの竜のヨロイは2年前からあの山岳地帯に駐留し、無差別攻撃をしているらしい。

そして、そのヨロイが現れる直後、カギ爪をした男と子供2人がこの町に立ち寄ったとのことだ。

一通り情報を集め、ジョシユア達がいるホテルに向かう。

そして、ジョシユアがいる部屋で落ちあった

「2人共、そっちはどうだった？」

「ジークさんとほぼ同じ感じですよ。」

「そうか・・・」

「あ、そうだ。これ見てください。」

そう言ってジョシユアが出したのは・・・あの竜のヨロイの写真だった

「あのヨロイのか。これがどうかしたか？」

「はい、この背中の部分に取りつけられているのはアスターパネルなんです。」

「アスターパネル？」

「これは太陽光をエネルギーに変換できる装置なんですけど・・・その変換の過程で霧が発生して、自分の存在がバレてしまうんです。」

「

「そうなのか？」

「はい、元々工業施設等で利用されるものなんですけど……ヨロイにつけたら非効率なんですよ。設計ミスとしか思えません。」

少し納得し、その写真を見て考えた。

「ん？ ジョシユア、このパネルでエネルギー供給を行ってるんだよな？」

「はい、それが？」

「ということはこのパネルさえ破壊してしまえば供給が出来なくなつて機能が停止するんじゃないのか？」

「やっぱりそうとしか考えられませんよね……」

「なら、明日にでもガンダムで破壊しよう。あれなら空中からでも攻撃が出来る。」

「そうですね、ヴァンさん達にも伝えないと。」

「ああ、そうだな。」

そして翌日、ウェンディと合流し、ヴァンの下に行く事になった。

その時、空から何かが落ちてくる

「何だ……?」

「ヴァン……あの二人、まさか!」

「え!?ヴァンさんがヨロイを!?!」

「ジョシユア!俺はガンダムでそちらに向かう!先に行ってくれ!」

「分かりました!お気をつけて!!」

そう言つてジョシユアはウエンディを追い掛けて行つた

ジークは村の近くに止めてあつたガンダムに乗り込み、ダンが落下した地点に向かう。

「レイさん!ヴァン!」

「おおジークか、遅かつたな。」

「一体何するつもりなんだよ?」

「ちょうどいい、ジークはあのヨロイをかく乱してくれ。」

「え?」

「こいつと協力して敵の動きを止めるんだ。その隙に俺が外装の間を狙い撃つ。」

「なるほど……その手もあつたか……いや、それより空中から俺が狙い撃つた方がいいんじゃないのか?」

「ダメだ、ビーム兵装では威力が強すぎる。頭部にあるコクピットごと破壊しかねない。」

「コクピットを無傷にして何をする気だ？」

「カギ爪に関する情報があるはずだ。だからコクピットがある頭部は破壊するな。」

「要するに俺が叩きのめしてヨロイ乗りを引きづり出していいんだな？」

「フ・・・お前に出来るものならな。」

「言ってる。」

ヴァンがそっぽやき、前に出ようとする。

「待て、位置を確認する。」

レイがセンサーでヨロイの位置を特定した。

しかし、既に接近させられていた。

「しまった！既に・・・！」

ヴァンがすぐに気づき、壱刀で攻撃するが弾かれてしまう。

「硬いね・・・さすがに。」

「援護する！」

ジークがバルカンで攻撃して敵の気を逸らした。

「何やってんだ！早く撃て！」

「……………まだだ。」

「チツ！」

敵が水圧カッターを放つ

ダンは避け続け、飛び上がり斬りつけようとする。

しかし、敵はすぐに頭を上げてきた。

「頭上げるなよ！！！」

敵がダンの刀を啜え、その拍子に落ちたダンに巻き付く

「くそ！」

「だが今なら！」

ガンダムが上に乗れり、外壁の隙間に対装甲ナイフを刺そうとするが、防塵壁に防がれる。

「硬い…………！」

「ジーク、下がれ。」

レイがそう言い、ガトリング砲でヨロイの外装を狙う。

「デリート。……!!」

レイが何かに気づき、狙いをわざと外す。

「おいおい、偉そうなこと言って外してりゃ……うん？」

ヴァンがふと近くの崖を見ると、そこにウエンディとジョシユアがいた。

「へえ〜。」

「あの二人がいたから攻撃出来なかったのか……」

ヨロイが啜っていた刀を投げつけ、ヴォルケインのガトリング砲を弾き飛ばし、ヴォルケインに体当たりを仕掛けた。

「クツ!ならば……零距离射撃で……」

「ヴァーン!」

ダンとガンダムのコクピットハッチが開く。

「おい、ダンの刀が何処行ったか見てないか？」

「あの、兄さんと戦っていたんですか？」

「早く教える！」

「ああ！そんなことよりも！」

「あいな！！！」

「待てヴァン、ジョシユアの話聞いてやれ！」

「んだよお前まで・・・わーったよ。で、何だ？」

「よく聞いてください！！！」

ジョシユアは昨晚ジークと話していた敵の弱点をヴァンに伝える。

「なるほどな、分かった。ちょっと待ってる。」

ヴァンは身に着けていたヘッドホンをいじる。

「おい、聞こえるか？」

「何だ？」

「お前の弟が背びれを狙えってさ。」

「何？」

「そいつは・・・何だっけ？」

「もう忘れてるし・・・」

「そこが展開して太陽電池になりますから、構造上外壁より脆いはずです！Sドライブなので簡単に壊れます！そこを狙ってください！」

「……だつてよ。聞こえたか？」

「……いらん世話を。」

ヴォルケインがそこを狙おうとしたが、ヨロイが銃を弾き飛ばしてしまつた。

「ク……！」

しかし、ヴァンがその銃をキャッチし、ヨロイに向ける。

「おい！こいつを借りるぞ。」

「圧撃は一撃分だけだ、外すなよ。」

「ハ、知るかよ。怖いなら、俺に祈りな！」

ヨロイが水圧カッターで攻撃してくる

咄嗟にガンダムのビームライフルで相殺する。

「今だ！」

「チエス！」

ダンが引き金を引き、見事にパネルに直撃した。

そして首が爆発し、頭部が地面に落ちた。

「ほらよ。」

ダンがヴォルケインに銃を放り投げ、それをキャッチする。

「ジーク、頭部を開けてくれ。」

「分かった。」

ジークは対装甲ナイフで慎重に頭部を開ける。

そこに見えたのは、パイロットらしき白骨死体があったただけだった。

「とつくに死んでいる・・・自動追尾システムということか・・・」

「ああ、お前の弟も言っていた。エネルギーの溜め方がおかしいつてよ。」

「こんなヨロイがあつたとは・・・」

「けど、何でカギ爪の男はこれを放置したんだ・・・?」

「開発メンバーを閉じ込めたが、勝手に動いていた。あの双子と同じだろ。所詮は失敗作だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そういう言い方はよせ。律義な奴じゃないか。」

「こいつが律義・・・ねえ・・・」

ヴァンが何かのパネルのスイッチに触れ、データファイルらしきものが出てきた。

「だが、そろそろ眠ってもいい頃だろう。データは有効に使わせてもらう。」

その時、レイがヴァンに銃を向けた。

「・・・やっぱり、か。」

「信用出来ないと言っただろ。そのボードを寄越せ。」

「はいはい。」

ヴァンがボードを落とした直後、蛮刀を出しレイの銃と合わせる。

「あの二人・・・また・・・!」

「やめてください! 兄さん! 僕と一緒に帰りましょう!」

ジョシユアは下にいるレイに向かって説得する。

「こんな危険な目に合ってシノさんを悲しませないで!」

「ジョツシユ、シノは悲しみも喜びもない世界に逝ってしまった。俺もあの日からそんな世界に足を突っ込んでいる。でないと・・・シノに逢えない。あいつの仇を取れないんだ。」

そう言い終えた直後、データボードを取ろうとするが、ヴァンに妨害され、ヴォルケインから垂らされているワイヤーを掴む。

「兄さん！レイ兄さん！！」

「ジョツシユ、お前は帰れ。二度と追ってって来るな。お前だけは・
・そっちの世界だけで暮らすんだ！」

ヴォルケインの真下にジングウが現れ、ヴォルケインを収納する。

「さらばだ、ジョシユア！」

そして、地下へと潜っていく。

「そんな・・・・兄さん・・・・兄さああああん！！」

ジョシユアの叫びは兄には届かず、山岳地帯に響くだけであった。

そして、騒動も終わり、4人はヴァンとレイがいたと言う店に立ち寄る。

「結局何なのコレ？」

「知らんが、カギ爪の手がかりだ。調べてくれる奴を探さないとな。近くの街だと・・・・トリノリアだな。」

そこに店の店員らしき女性が話しかけてきた。

「あなた達、あの竜を退治してくれたんだって？助かったわ！これ

で安心して山を抜けられる。そうそうお友達は？あの人にもお礼を言わなきゃ。」

「違うっつたる。もう何処かに行っちまったよ。」

「あーそう・・・お別れも言わないなんて冷たいのね。」

「リンちゃん！」

「あ、はいはい！」

ジヨシユアとジークはリンをずっと見ていた。

「どうかしました？」

「あの人・・・シノさんに似てたもので・・・」

「ああ・・・そうだな・・・」

「フン、行くぞ。」

「ちよ、ちよっと待ってよヴァン！そんな急に・・・ジヨシユアさん、ジークさん、私達はこれで失礼します。」

「はい・・・お気をつけて。」

ウエンディとヴァンは店を後にし、旅立っていった。

「ったく・・・いつもいきなりなんだなあいつ・・・」

「ジークさんはこれからどうするんですか？」

「俺か？俺もトリノリアに行こうと思う。」

「え？じゃあヴァンさん達と一緒に行けばよかったんじゃない？」

「嫌だよ、誰があんな奴と・・・」

ジークはデータファイルを取りだした。

「これだよ、俺の父が遺したデータファイルだ。これを解析してもらいたくてね。」

「これって・・・あのヨロイの・・・」

「ああ、他のガンダムの所在が書かれているらしい。実家で見つけたよ。」

「やっぱり・・・ジークさんのお父さんも・・・カギ爪に・・・？」

「まあ・・・そんなところだ。」

ジークは寂しげな顔で呟いた。

「さて、一足先にトリノリアに行かないとな。ジョシユア、元気でな。」

「はい！ジークさんもお気をつけて！」

そして、ジークはトリノリアへと進路を向けた。

第6話

完

第6話 ソローメモリー（後書き）

次回予告

それから、ジョシユアさんと一緒に旅をする事になりました。

何だか運命的だなんて思いました。

次に立ち寄った街が、偶然カルメンさんの故郷でした。

私達、そこにはほんの少ししかいなかったけど・・・一生忘れられない事件に出会いました。

第7話 カルメンの故郷

第7話 カルメンの故郷

ヴァン達と別れた後、ジークはトリノリアへ向かっていた。

「ヴァンとはち合わせると面倒な事になりかねない。急がないとな。」

少なくとも、徒歩のヴァンにすぐ追い越せるのだが念のため急ぐ事に

そして、一足先にトリノリアに到着し、そこにいるフィンドレイという技術師に実家で発見したデータを解析してもらうことになった。

「これはちょっと時間が掛るな……。」

「いくら時間が掛っても構いません。お願いします。」

「分かったよ、一日で終わらせる。」

こうしてフィンドレイの家を後にし、泊まる場所を探す事になった。

そこに目の前に見知った顔ぶれが視界に写った。

「え！？お前ら……！」

「ああ！ジークさんじゃないですか！」

「な、何でジヨシユアがヴァン達と一緒に……。」

「勝手についてきたただけだ。一緒じゃない。」

「でもカルメンまでいるなんてな・・・」

「ここ、私の故郷なのよ。」

「え？そうなのか？」

「ホント・・・懐かしいわ。」

カルメンがフィンドレイの家を見て呟く。

「懐かしい？」

「増築したんだ・・・ハエツタの家・・・」

「お友達ですか？」

「子供の時からだね。」

「おい・・・俺はお前の友達に会いに来たわけじゃ・・・」

「彼女のお父さんがフィンドレイよ。」

「え？そうなのか？」

「ええ・・・私の先生みたいな人。」

「そういえばジークさん、ここら辺から来てましたよね？フィンドレイって人に会いに来たんですか？」

「ああ、データの解析のためにな。」

「おい、勝手に仕事を頼むなよ。俺が先だろ？」

「言つと思つたよ、ヴァン。だからだよ。」

「つたく……………」

ジーク達が話している最中に、カルメンがドアの前で立ち止まる。

「何だか…………懐かしいわね……………」

カルメンがドアをノックしようとした瞬間、ドアが開いた。

「え…………？」

「あ……………」

そこから出てきた女性とはちあい、しばらく沈黙していた。

「…………カルール？」

「あ…………ハ、ハアイ……………」

久しぶりの再会を果たし、全員で家の中に入る。

「ホント…………久しぶり、もう帰ってこないと思ってた…………あなた、何も言わずに出て言っちゃうんだもの。」

「あ…………で、さっきも言った通りなんだけど、伯父さんの手を貸

してほしいのよ。」

「お願いします。」

「何とか頼めませんか？」

そう言ってコーヒーに砂糖をダバダバと注ぎ込む。

「ああ、俺のはまた後でもいいから……」

「何やってるんですかヴァンさん！」

「うるさい。」

ハエツタはしばらく黙り込んだ。

「ハエツタ？」

「お父さんは今……身体を壊して……」

「伯父さんが？」

「え？さつきはそんな素振りを見せてなかったが……」

「もう歳だしね……さつきは無理して請け負ってたんです。」

「ああ……それは悪いことをしたな……」

「いえ、今は花の栽培を請け負って食べてるの。」

「あの花・・・あなたが？」

「そう、街の人たちにも薦めてるの。おかげでみんなよくしてくれるわ。」

「・・・そう・・・それで・・・」

ジークは、少しおかしいと思っていた。

花を売るだけでよくしてくれるとは到底考えにくいからだ。

「ごめんね、カルール。」

「うっん、こっちこそいきなり・・・」

「勝手に決めるな。」

そこに杖をついてフィンドレイが歩いてきた。

「伯父さん！」

「6年もほったらかしにしおって・・・」

ふらつく姿を見てカルメンが支えに入った。

「どうだ？俺の教えたことは役に立っているか？」

「ええ・・・」

「話は聞こえた、そいつの解析だな？そこの兄ちゃんのと平行して

やるつ。」

「父さん！」

「いえ、俺のは別に……」

「心配するな、久々の仕事だ。いい刺激になる。」

こうしてハエツタの家を後にし、カルメンの実家でみんなで泊まる事になった。

家に着き、長い間放置していたため、掃除をすることになった。

ジークは家の家具を一時的に外に出していた。

ヴァンはソファの上で寝ている。

「おいヴァン……少しくらい手伝えよ。」

「ソファを出しただろうが。」

「それだけだろ！しかも寝るために！」

「追い出されたんだ……仕方ないだろ。」

「つたく……」

そこにカルメンが倉庫から自転車を出して出てきた。

「どっか行くのか？」

「あんと同じで追い出されちゃった。街でも偵察しよっかな・・・」

「偵察？自分の街を？」

「情報屋のクセよ。一緒に来る？」

「俺はいいよ、掃除があるし。行ってきなよ。」

「あら・・・あんたからそんな言葉が聞けるなんて想像できなかったわ。」

「ヴァンじゃあるまいし・・・」

そして、あらかた掃除を終え、眠りにつく事になった。

翌日、ウェンディはトリノリアに生えていた花を摘んで持ってきていた。

「気に入りました？それ。」

「そう見えます？」

「昨日取ってきてからずっと見てるもんな、その花。」

「正しい育て方、ハエツタさんに聞いてみますか？」

「ううん・・・まず、本で調べてみます。勉強にもなるので。」

「そうか・・・」

そこにハエツタとカルメンが姿を現した。

「あ、ハエツタさん。」

「こんにちは、昨日はよく眠れた？」

「そつだハエツタさん！ウエンディさんにこの花」

ジョシユアの言葉半ばでウエンディが口を抑え込んだ。

「気にしないでください！」

「・・・？」

「でも驚きね・・・たった一日でこんなにきれいになるなんて・・・」

「

「この子達のおかげよ。」

「ジョシユアさんってお掃除がとっても上手で・・・」

ハッと気付いたようにジョシユアから手を放す。

「こ、これからはピカピカジョッシユで「遠慮します。」

「反対にヴァンは何もしてなかったな。怠け者ヴァンだな。」

「いいえ、寝たまんまヴァンです。」

「そりゃそつだ。」

「フン……」

「あ、そつだ。ボードの解析、もう少し掛るみたい……ごめんなさいヴァンさん。何か分からない機能があつたみたいで……」

「いや、いい。なるべく詳しいことが分かれば……」

「あ、それとジークさんの解析が終わりました。」

「本当か？」

「ええ、これです。」

ハエツタはジークにデータファイルを渡した。

「ありがとう、早速結果を見てみるよ。」

ジークは外に出て、コアスプレnderの中でデータを見る事にした。

そこに写っていたのは……父が乗っていたストライクガンダムを含めて5機のガンダムのデータが映されていた。

「これは……ガンダムが5機存在していたのか……」

しかし、データによるとそのガンダムはストライクを残して全てが大破し、表の舞台から消えている事が記されていた。

「ん？何だこのシステムは……S・E・E・Dシステム……？」

しかし、データではそれしか分からず、疑問が残ったまま夜が明け

ジョシユアは事前にフィンドレイの仕事を見学を頼み、ハエツタの家に向かっていた。

家の前にバイクが停めてあった。

「あれ？お客さんかな？」

気になったジョシユアは窓からハエツタと誰かが話をしているところを目撃し、こっそり聞いていた。

「あの……雨で気温が下がって開花が遅れてるんです。ホントにすぐに……」

「いえ、こちらにも急ぎ過ぎました。」

「すみません……」

「私はゾネットのジャンクションに出向かなければならないので、2週間後にそちらに出向くように手配しておきます。」

「あの、あの人は……？」

「急用があると言う事で私が代理で来ました。二人分の薬と報酬を

置いていきますね?」

「助かります。」

「その代わりに、改良品種だけでも同志に送りたいのですが・・・準備お願いできますか?」

「あのカギ爪の人ですか・・・?」

窓越して聞いていたジヨシユアは驚愕していた。

「そんな・・・まさか・・・!」

一方、カルメンとジークは墓場に来ていた。

「これが・・・お前の両親の墓・・・」

「ええ、そうよ。」

カルメンは墓の前に蹲り、静かに語りかける。

「父さん・・・母さん・・・心配しないで、何とか一人でやってるから・・・だから・・・」

そこにジヨシユアが駆けてきた。

「カルメンさん!!」

「何?そんなに慌てて。」

「どうしたんだ？」

ジョシユアはハエツタの家で起こっていた事を全て話した。

「へえ・・・そう・・・そうなの・・・」

「早くヴァンさんに知らせないと!!」

「待つて!まず私が事情を聞きだすから。」

「カルメン・・・!どんな状況か分かってるのか!」

「その女はもういないの？」

「いえ・・・乗り物で何処かに・・・発信器をつけようにも隙がなくて・・・」

「あなたは帰っていて。必ずハエツタを連れていくから。それまでヴァンには黙っている事。」

そこに何処からか轟音が聞こえてきた。

「何だこの音は・・・?」

「あ、あれです!」

ジョシユアが指を指す方向に、何かが飛んでいた。

それを見たジークは目を見開く

「あれは・・・！データにあったガンダムか！？」

「ジーク、悪いけどあんたはあいつを追って！多分ハエッタと話をしていたのはあいつよ！」

「分かった！そっちも気をつけるよ！」

ジークはすぐさまフォーシンプルスでヨロイを追った。

「そこのヨロイ乗り！！止まれ！！！」

ジークがライフルを向けて叫ぶ。それに応えたヨロイがこちらに姿を向けた。

その形状は昨夜、データで見たものとはまるで違っていた。

背部に背負っている装備はストライクと同じだが、

頭部はツインアイカメラではなく、バイザー型。

それに色も黒でV字型アンテナもない。

「何だこのヨロイは・・・カギ爪の兵器・・・？」

その瞬間、向こうのヨロイがビームサーベルを抜きこちらに斬りかかった。

咄嗟にこちらもビームサーベルを抜き、それを受け止めた。

「やっぱりこいつ・・・ハエツタのところにいる奴か！」

そして、もう1本あったサーベルに手をかけていた。

「何!？」

サーベルが抜かれ、頭部が破壊される。

「しまった!？」

頭部が破壊されたことで機動力が失われ、そのままヨロイを逃がしてしまった。

「あのヨロイ乗り・・・こいつの弱点を知っている・・・?」

ガンダムは頭部を破壊されると、センサーが正常に作動しなくなり、カメラもやられるので視界がなくなる。

頭部を破壊されると的になるしかないのだ。

「・・・とにかく、こんな調子では追跡は出来ないか・・・ん？」

ふと下を見ると・・・ハエツタの家から火が出ていた。

「な!？ハエツタの家が・・・！」

とにかく、その場所に降りるとヴァン達が外にいた。

「ヴァン!! 一体何があった!？」

そこにハエツタとカルメンが走って来た。

「父さん・・・父さん!？」

「ハエツタ!」

ジークが燃え盛る家を見ると、フィンドレイが火中の中にいた。

「フィンドレイさん!!!」

「父さああああん!!!」

ハエツタがそう叫ぶも、フィンドレイは立っているだけだった。

「父さん!!何で・・・何で逃げないの!!!」

「父親だからだってよ。」

ヴァンがそう呟く。

「ヴァン、一体どういことだよ!」

「自分が重しなら、いなくなるってさ。薬をもらった、薬を街の連中に渡して、後は自由に生きろってよ。」

「薬・・・?」

ハエツタはショックでその場で蹲る。

その後、何を思ってたかヴァンは蛮刀を抜いた。

「カギ爪の男は何処だ！花は何処に運ばれる！」

「おいジヨシユア……一体何がどうなって……」

「あの、掻い摘んで話しますね。実は……」

ジークはジヨシユアからこれまで起こった事を話した。

あの花、オルフェの花粉は人体に影響を及ぼす毒性があり、一定以上を摂取すると人体を蝕んでしまう。

そんな花を品種改良し、カギ爪の男の組織に依頼され、培養していた。

それを回収しに来た人物がいたことで判明した……とのことだ。

「そんなことが……！」

「んな事はどうでもいい！さっさとカギ爪の野郎の居場所を教えろ
！！！」

そうヴァンが怒鳴るが、ハエツタは黙り込んだままだった。

それに痺れを切らしたヴァンはハエツタに斬りかかるうとする。

「やめて！！乱暴しないで！！」

それをカルメンに止められた。

「友達なのよ……子供のころからたった一人の……」

そして……

「ハエッタさんが会った事がないということは……カギ爪の男の情報はボードの中にしかありませんね。」

「それと……俺と戦ったヨロイの2つだけか……」

「フィンドレイさんのおかげでプロテクトは外されています。」

「中身は？」

「さあ……そこまでは……」

「なら私がゾネットのジャンクションに先行して分析させるわ。あなた達が着くまでに終了しているようにね。」

「頼む。」

「あの……お金は……？」

「俺が出そうか？」

「アフターサービス、ハエッタが会っていた女も探してみたいから。」

「ああ……」

「そうなるよ、私達はどっちやっつてゾネットまで行けばいいんでしょ
うか？」

「ジークさんが乗ってるヨロイで送ってもらおうというのは？」

「あいにくさっきの戦闘で推進系がやられてな、飛べそうにない。」

「となると・・・ムーニエルの街に列車が通っているはずですから
・・・」

そこに・・・

「へッ、列車だつてよ。」

「余所者は無責任だよな。」

「あの花が毒で年寄りビビらして、これからどっちやっつて暮らしてい
けばいいんだよ。」

「でも俺達はまだいいさ、ハエツタなんざ大損害の上に親父さんま
で死んじまった。」

「友達がやることかね。」

「あいつといると、ロクな事がない！」

そう吐き捨て、村人が立ち去っていく。

「あの一！」

「人に気も知らずにズケズケと・・・！」

「いいの！」

ウエンディとジークが喋ろうとしたが、カルメンに止められた。

「私は先行くから。」

「ああ。」

「カルメン・・・気をつけて。」

「・・・ありがとう、ジーク。」

カルメンは、タンダーでトリノリアを後にした。

ヴァンとジーク達もムーニエルの街に向かう。

再び上がっている・・・秘密の花園から上がっている煙を背に・・・

第7話 完

第7話 カルメンの故郷（後書き）

次回予告

もしかしたら・・・なんですけど、今まで会った人の中でヴァンより強い人がいるとしたら、それは・・・カイジさんかもしれせん。初めはジークさんかなって思ってたんですけど・・・カイジさんは、強くて優しく、底が知れない海みたいな人です。かつこいって、ああ言う人の事を言うんだと思います。あ・・・言いすぎですね。

第8話 海、サイッコー

第8話 海、サイッコー

トリノリアを後にしたヴァン達は、ゾネットに向かうためムーニエルに着いていた。

「ムーニエルって水だらけね・・・」

「ずっと前に急に地面が沈んだんだとよ。」

「それで船がいつぱい・・・」

「ああ、色々引き上げるためにな。」

「サルベージだな、中には古代遺跡の発掘物が引き上がるらしい。それらを売るために列車が通っているんだ。」

「へえ・・・ジークさんて詳しいんですね。」

「俺のガンダムもある意味古代遺物だからな。興味もわくさ。」

そこにジヨシユアが走り寄って来た。

「チケット取れました！」

「遅いぞ！」

「そんなこと言わないの！わざわざ行ってきてくれたのに・・・」

「フン、こんなことしてる間にもカギ爪の奴は・・・」

「そうですね、聞こうと思っていたんですけど、カギ爪の男って・
」

「どうかしたのか？」

「自動操縦のヨロイを作ったり、ウェンディさんのお兄さん連れ
てったり・・・あの黒いヨロイとか他にも色々・・・一体何をす
るつもりなんでしょう・・・？」

「興味ないな。」

ヴァンはそう呟き、立ち上がった。

「何処行くの？」

「乗り場はそっちじゃないぞ？」

「おしっ」。

そう言い残してトイレへ向かっていった。

「もう・・・ヴァンったら・・・！」

「全く、恥じらいと言うものが微塵もないな、あいつ。」

「デリカシーがなさすぎですね。」

「お前は周囲の状況を把握する能力がなさすぎる。」

「え？何ですか？」

「……………いや、聞かなかったことにしてくれ。」

ジョシユアは首を傾げて不思議に思っていた。

……………それが足りないんだよ、それが。

しばらく待っていると貨物列車が通り過ぎていた。

そこにヴァンが戻って来た。

「ん？おい！列車出てるぞ！！！」

「あれ、貨物車よ。」

「僕達に乗るのは次です。」

「え？……………なら早く言えよ……………！」

「大体俺達に乗る列車はまだ時間があるだろ？時刻表くらい目を通して」

ジークの言葉半ばで突然、貨物車が爆発した。

「な、何！？」

「ミサイルか何か……………！」

その貨物車の爆発により、ヴァン達が本来乗れるはずの列車が停止

し、乗れなくなっていました。

ジークはある程度駅員の説明を受け、ヴァン達に報告する。

「どうでした？」

「ダメだ、次の発車の目処は立たないらしい。」

「どうする、ヴァン？」

「他にゾネットに行くには……」

「船をあたってみますか？」

「仕方ないな……」

「でも客船とかあるの？」

「うん……」

しばらく対策を考えながら港を歩く。

「あの、ヴァンさん。」

「ん？」

「みんなでダンとガンダムに乗っていくって言うのは……」

「ヨロイは車やバイクじゃない。」

「俺のは一人用だ。全員手で抱えて乗るのは危険すぎる。」

「それに俺のでも長時間は無理だ。諦める。」

「はあ………」

「そういえば、ヴァンのヨロイってどうやって空から来るの?」

「さあな? 詳しい事は俺も知らん。」

「知らないって……それでいいのか?」

「ねえ、アンタらヨロイ乗り?」

そこに女性が話しかけてきた。

「はい………」

「俺達に何か?」

その女性はヴァンの身体を探るように叩き納得する。

「うん、頑丈そうね。ねえ、あたしと結婚しない?」

「……ええええええええええ!!?」「」

ヴァンとウエンディ、ジークが驚いた。

「せっかくですけど、ヴァンには好きな人がいるんです!」

「……そうなの？」

「……ええまあ……」

「あらすう……残念ね。」

「俺に関しては眼中なしか……」

「アンタ顔はかっこいいけどヤワそうだもん。」

「な、何だよその基準は……」

「あの……あなた誰ですか？」

「ムーニエルサルベージ組合の組合長、ビビアンよ。」

その後、ビビアンに連れられ歩いていく。

「へえ……アンタがあのか『百人撫でのヴァン』だったの。」

「いえ、『寝たまんまヴァン』です。」

「まあ……とにかくヴァンさ。」

「いい加減名前統一しろよな紛らわしい……」

「……で、何の用だよ？」

「私達、自分でお宝を引き揚げたり、依頼されて指定されたものを探してるんだけど……最近それにちよっかいを出してくる海賊が

いてさ。」

「海賊？」

「列車を爆破したのも多分そいつら・・・海のもの勝手に持ち出すなって、問答無用で攻撃を仕掛けてくるの。しかも姿を現さずさ。」

「なるほど・・・」

「なあ・・・もしかしてどくろマークを掲げたヨロイだったりしない？」

「聞いてなかった？姿を現さないの。」

「ジークさん、何が言いたいんですか？」

「・・・いや、こつちの話。」

ジークは黙って有耶無耶にしたが、全員が「なんだそりゃ」という顔をしていた。

「まあとにかく、俺達がつてことか。」

組合の役所に到着し、会議室に入った。

「みんな、ヨロイ乗りの人を連れて来たよ。」

会議室にいた全員がヴァン達を見た。

「左にるのがザナック副長。」

「よろしく。」

ジヨシユアはテーブルに置いてある図面を見て興味津津に話す。

「すごいですね！制御システムは何を使っているんですか？」

「は？何だいきなり・・・」

「明日、組合拳げての一大サルベージがあるのよ。」

ビビアンは天井の機械から図面を出した。

「物はこれ。旧市街からフォースS2から取りだした遺跡。」

「うわあ・・・50以上・・・」

「そうよ、でつかいよ。何とか引きづって近くまで持ってきたけど引き揚げはそれ以上に大変。」

「何だかドキドキします！」

ジヨシユアは期待に胸を膨らませていた。

「同感。何しろそれを海賊どもが引き上げを邪魔してくるかもしれないんだから、さつきみたいにさ。」

「列車貨物の爆破事件か・・・」

「ええ、これが失敗したら組合の面目が丸潰れ、依頼主の船籍探索機関、こちらへの違約金で全員首吊りよ。」

「ウチとしてもそれは困ります。」

そこにいたメガネをかけた青年がそう言った。

「そこで、あなた達に引き揚げ作業と物に輸送の護衛をしてほしいの。」

「・・・報酬次第だな。」

「百万でお釣りをつける。ゾネットへの特別優待急行券でどう？」

遺跡は引き揚げ次第、特別便でゾネットへ送られるの。最優先でね。その列車に乗れるよう話をつけておくわ。」

「どうする？ヴァン。」

「早くゾネットに行きたいんですけど？」

「やりましょうー！」

「お前が決めるな！」

「でも、やりますよね？」

「いい条件だと思うけど・・・」

「それに、背に腹は代えられんדר？」

3人の意見でヴァンが黙ってしまふ。

「あなた達・・・もしかしてチーム？」

「はい！」

「違う、着いて来ているだけだ！」

「私達にも協力させて下さい！何でも手伝いますから！」

「そうね・・・じゃ・・・」

そして、ゾネットに向かうための仕事が始まった。

ジヨシユアは船の掃除、ウエンディが港のそばにある酒屋のウェイ
トレス

ジークはビビアンの指示でガンダムを降ろした。

「これがアンタのヨロイかい？」

「ああ、いざとなれば水中潜行も可能だ。」

「それホント？」

「ああ。」

「じゃあ・・・」

ビビアンに指示されて、アビスシルエツトに換装し、パトロールついでに沈んだ物資を引き揚げていた。

「俺のガンダムは雑務のためにあるんじゃないのに……ゴメン父さん。変な事に使っちゃって……」

ある程度作業を終え、ガンダムを海から引き揚げた後、外で休憩をとることにした。

「はあ……久々の海中だったな……」

「海は……最高だろ？」

「うん？」

そこに海兵のような格好をした男が隣にいつの間にか立っていた。

「海はビツク、お前のクールなヨロイも受け入れてくれる。」

「は、はあ……」

「いつかこいつで旅をしてみな、海を……果てしなく広いこの海をな……」

ジークはなんのこっちゃと呆気に取られていた。

「……で、誰なのアンタ？」

「キャプテン・カイジ。」

そうカイジは名乗った。

「カイジ……？」

「ではそろそろ失礼するよ……グッバイ。」

そう言い残し、カイジは去っていく。

「な、何だったんだ今の……？」

そして、一通り作業が終了し翌日、

ジークのヨロイで遺跡にワイヤー取りつけ作業が行われた。

「ビビアン、右舷左舷共に取りつけ完了したぞ。」

『手間が省けて助かるわ。それで、例の海賊は？』

「レーダー、目視共にそれらしき船影は見当たらない。さっさと終わらせてゾネットに行かせてくれ。」

『分かった分かった。始めるから、周囲の警戒をお願い。』

「了解した。」

通信を切り、周囲の警戒に入った。

「それにしてもデカイ遺跡だな……。もしかして、ヨロイが入ったりして……」

ジークはセンサーで遺跡内部を見ようとしたが、何も映らなかった。

「それらしき反応がない、期待し過ぎたな……」

そう言ってる内に遺跡が海上へ引き上がった。

『聞こえる？そのまま海上に拳がってきてちょうだい。』

「了解した。」

ジークはガンダムを浮上させ、海面にホバーで立つ。

そこにビビアンから通信が入る。

『ねえ！海上に何かいない！？』

「え？何かって……まさか海賊！？」

『分からないけど……そこに何かいない？』

何の事だと思いつつ、水平線をのぞいてみると……

なんと、海面に浮かんだソファに座りこんでいる。

昨日見かけたカイジの姿があった。

「海、サイツコー！」

「は！？あれって……！」

戸惑っている隙を突かれ、海中からミサイルが放たれた。

そのミサイルがクレーンの左部分を破壊した。

「しまった!？」

1本しかないクレーンでは支えきれず、遺跡が海中に沈んでしまった。

ジークは慌ててセンサーで敵影を確認する。

「海中に敵影……!なんで今まで気づかなかつたんだ!？」

『こつちでも確認したよ!早くあのバカを捕まえて!!』

「わかった!」

クレーン周辺に船が浮きを放ち始めた。

「スモーク・オン・ザ・ウォーター。」

カイジはそう呟き指を鳴らすと、カイジの周辺から白い煙が噴きだした。

その煙が晴れると、引き上げ地点の海が凍ってしまった。

「海が凍った!？」

「まさか海賊たち、海の底から横取りするはずじゃ……!」

「やれやれ・・・やっぱり楽な仕事ってのは、ないもんだ。」

そう呟き、ヴァンはダンを氷に着地させる。

しかし、衛星軌道上から落ちてきたにも関わらず、氷に貫通しなかった。

「お？意外に分厚いな・・・おーい！海賊は俺達で相手するからお前らはデカブツを引き揚げろ！」

「ああわかった！頼んだよ！」

「さて・・・まずは海の中へつと・・・！」

「大丈夫なのか？」

「ああ、何とかなるだろ。」

「ホントかよ・・・」

そう言いながらもダンとガンダムが海中に飛び込む

そこに、ワイヤーで遺跡を横取りしようとしている潜水艦の姿が見えた。

「ちっ・・・動かしづれえな・・・」

「任せろ、水中戦用のコイツなら！」

「まあ、あのワイヤーを切るくらいなら・・・！」

ダンの大刀が遺跡と繋がっていたワイヤーを切った。

「何だ？ワイヤーを切ったって言うのに敵の動きが・・・」

すると、敵艦の発射口が開かれ、先端が拳になっている魚雷が発射された。

「何だ？あのとろい攻撃」

そう言ってる間にダンの顔面に直撃した。

「そのとろい攻撃に当たってどうすんだよ・・・」

そこに、また魚雷が発射される。

「二度も同じ手を食らうかよ！」

「アビスならその程度の魚雷！」

ダンとガンダムが魚雷を避けたが、その拍子に何かをつけられた。

「ん？何だ？」

「何かつけられた？」

敵艦が後退を始めた。

「おい！逃げるなよ！見えねえだろうが！おい！！」

「まずい！逃げられる！」

追いかけてしようとしたその時、今度は本物の魚雷を撃ってきた。

直撃は避けたが爆発でのダメージが当たってしまった。

「くそ！」

「さっきのは魚雷を命中させやすくするための装置を付けるためだったのか……！」

敵艦からの魚雷の波状攻撃が続き、ダンに左肩が破壊された。

ガンダムはPS装甲でなんとかダメージを抑えていたが、魚雷の攻撃のせいでまえに進めない。

しかし、とたんに魚雷の攻撃が止んだ。

「待てよ……ヴァン！変形して接近するから敵艦に張り付け！」

「わかった！」

ガンダムが潜航形態に変形し、ダンを掴ませ一気に接近した。

そして、ダンも敵艦に取りつくことに成功した。

「ありがとよ！バンバン撃ってくれたおかげで位置がつかめた！」

「さっき張り付けた装置がないと追尾ができないようだな！」

「もう離さねえからな！」

ダンが敵艦に大刀で斬りかかろうとしたが、突然ワイヤーが放たれ、ダンを固定する。

「な、何だ!？」

敵艦が潜行を開始した。ダンを海の底に落とし、水圧で潰してしまおうとしている。

「まずい!！」

ガンダムで急いで追いかけるが、水圧の限界がきてしまい、浮上する。

「あの潜水艦・・・あれだけの深度まで潜れるなんて・・・！」

連装砲を撃とうにもダンがいるのでは迂闊に攻撃はできない。

敵艦が浮上をしてきたところを見計らい、攻撃を開始する。

「緊急浮上では回避はできまい!くらえ!！」

二連装砲を連射するが、すべて避けられてしまった。

「なんて機動力だ・・・！」

そこに、急に海が揺れた。

「何だ今の揺れは・・・何かが発射したのか・・・？」

そこに砕けた氷が沈んできた。

「そうか、氷を爆破したのか！じゃあ後はこの魚を倒せば終わりってことだな！」

攻撃しようとしてトリガーに指をかけるが、敵艦の真下から何かが浮上してきた。

そこにいたのは、ダンだった。

「あいつ・・・あんな深さから浮上してきたのか!？」

「丸わかりだよ。海面をバックにすれば！さあ、海水浴はおしまいだ！」

ダンが変形し、そのまま敵艦に突っ込む。

「フフフ・・・まいったね・・・どうも。」

そのまま敵艦ごと、海中から飛び出し、ダンは空の彼方へ飛び去っていった。

「なるほど・・・帰還する時の形態を利用したのか・・・案外頭がまわるんだな。ヴァン。」

その後、無事に遺跡を引き揚げ、報酬とチケットを手に入れたヴァンは列車に乗り込んだ。

そして、ようやくゾネットに到着する。

「これかどうするの?」

「とにかく、あいつを探さなくちゃな。」

「カルメンさんの待ち合わせ場所って決めてないんですか?」

「ああ……どうしょ?」

「もう……」

「ま、なんとかなるだろ。」

「泊っているところとかは?」

「野宿か?」

「カルメンが野宿するわけないだろ……」

ヴァンとジーク、ジョシユアは歩き出す。

相変わらずヴァンに呆れているウエンデイが、歩き始めようとしたその時、向こう側のホームに見慣れた人物の姿が目に入った。

「………兄さん!」

第8話 海、サイッコー（後書き）

次回予告

ジャンクシヨンって分岐点って意味なんですよね。その時の私は意味を理解していませんでした。突然の驚きと・・・自分で考えなきゃいけないことで・・・頭がいつぱいだったと思うんです。ええ・・・あの時、分岐点に立っていた私は・・・まだまだ子供でした。

それは・・・ジークさんも同じ気持ちだったと思います。

第9話 愛ある裏切り

「まったく・・・とにかく、向こう側のホームから出ても行きつく先は一緒のはずだ。とにかく探すぞ。」

ジークが走りだそうとした瞬間、

特別列車の通り過ぎ様に、金髪の女性の姿が見えた。

「ん？」

「どうしました？」

「おい、早く探しに行くぞ。」

「あ、ああ・・・すまん。」

ジークは、ふと考えた。

(あの人・・・姉さんに似ている・・・気のせいかな?)

そう思いながらもヴァン達とウエンディを探しに行くことになった。

「じゃあ僕達はあっち探しますから・・・」

「ああ、俺はこっちを探そう。集合場所は、この中央広場だ。」

ジークはゾネットの案内板を指さして言った。

「じゃあ俺達も適当に回ってみるから。」

ジークとヴァン、ジヨシユアは二手に分かれてウエンディを探すこ

とになった。

「ウエンディ……一体どうしたんだ……？あんなにあわてて……」

辺りをキョロキョロしていると、誰かにぶつかった。

「痛っ……！」

ぶつかってきたのは、青い姫カットの少女だった。

「あ、ごめんな。不注意で……怪我は？」

ジークが気遣うが、少女は黙ったまま下を向いていた。

「ね、ねえ……君？」

「……！！」

「ああ、ごめんな兄ちゃん。そいつ、男恐怖症なんだよ。」

そこに緑髪のオールバックの青年と、赤髪のショートヘアの少女が現れた。

青髪の少女は緑髪の青年にすがりつく。

「もう！何で年上のあんたが迷子になるわけ！？」

「い、ごめんなさい……」

「おいおい、そういじめてやるなって。」

「あの・・・。」

「ああ、悪いな迷惑かけて。」

「いや、俺はいいんだ。今度は迷子になるなよ。」

ジークは青髪の少女に優しい目で語りかけた。

少女はただ黙って頷いただけ。

「さー早く行こー！」

「ま、待って・・・！」

「おいおい、また迷子になるぞ・・・。」

その3人組は何処かへ歩いて行った。

そこに放送が流れた。

『ウエンディ・ギャレット様、お連れのカール・メンドウーサ様
がお待ちです。至急、中央広場へお越しください。』

「あ、そうか。放送案内で来るようにしてもらえばすぐだったな・・・
行くか。」

一方、ゾネットの地下では・・・

ムーニエルから運ばれた遺跡が開封作業に入っていた。

そこに、金髪のロングヘアの女性が、ガドヴェドに話し掛ける。

「ずいぶん遅かったわね。」

「ああ、海賊が妨害に出たらしい。」

「迷惑な海賊ね。これって100年以上前のものでしょう？よく無事だったわね。」

「そうだ、その程度で壊れてもらっては困る。」

「そもそも、何でこれは地上に？」

「昔な、こいつの能力を使おうとして失敗したらしい。向こうと連絡が途絶えて、焦ったんだろうよ。愚か者めが・・・」

「へえ・・・それにしても、よくゾネットがここを貸してくれたわね？」

それに答えたのは作業員チーフのムッターカ

「かなり回したみたいですよ、RWCに。ホバーベースも提供しましたし、バロンのメタルグラーが使えなくなったので焦りましたが、ここでも再起動までなら。」

「いいだろう。どの道、完全な修理は本部に戻ってからだ。」

「後は・・・あの子の出番ってわけね。」

「おー！おおー！」

そこに子供二人と青年一人が通路を歩いてきた。

男子はとび跳ねながら通路を渡る。

「でかーい！ふるーい！」

「・・・かつこ悪い。」

「これ！敬つという気持ちはないのか！これは未来を」

「ポンコツ。」

「何！？」

「ポンコツ、オッサンと同じ。」

「・・・ウー殿、こ奴らに礼儀というものを教えてやってほしい！」

「・・・なぜ私が？」

「年配者として当然であろう。」

「我々はそれぞれに自立している。私的な意識に干渉する気はないし、される覚えもない。」

「それでは、集団として・・・」

「同志の思想のために任務を全うする。それだけで十分だ。」

「そのために、ウー殿こそが率先して統率をするべきではないのか？そのためにあの城を離れたのではないのか！」

「！・・・愚か者がずけずけと・・・！！」

「愚か者・・・？」

ウーとガドヴェドがにらみ合う。

「ちょっと、この子たちはまだ小さいのよ。礼儀は後から少しずつでも教えていけば・・・」

そこに、ファサリナがケースを持って歩いてくる。

「すみません。トリノリアの火災の後始末で私が最後・・・ではないようですね。」

「あ！ファサリナ！」

「みなさん、お変わりなくて何よりです。これからも同志のために仲良くやりましょう。」

「ごめんなさい、ファサリナ。本当なら私がやっておかなくちゃいけないかったのに・・・」

「いえ、こちらは何かと忙しかったので、代わってもらっただけで

も有難かったです。あ、各地でお土産も買ってきましたよ。」

「お土産？」

「食いモン？食いモン！？」

「ええ、今日の作業が終わったら、みんなでいただきましょうね。」

「おいおい、俺達は仲間はずれかよ？」

そこに、ジークが出会った3人が出てくる。

「遅かったじゃない？」

「マリが途中で迷子になるからいけなかったんだよ！」

「じ、ごめんなさい……」

「だから……もう謝らなくてもいいって……それに、ケイもあまりいじめないの。」

「ふうんだ！」

「ペイン、あんたがいながら遅れてくるなんてね。珍しいわね。」

「そうさ、おかげで4分16秒も遅れちゃった。」

緑髪の青年、ペインが腕時計を見て言う。

「あと一人来ないわね……」

「ごめんなさい。調整に手間取っちゃって・・・」

そこに黒髪のシニヨンの女性が歩いてきた。

「あら、オリガさん。機体の方で？」

「ええ。でも、問題は解決よ。それと、例の坊やもご到着よ。」

「やっと来たか・・・」

ガドヴェド、ファサリナはロッカールームに入る。

「遅いぞ、どこにいた？到着ホームでの見学は許可したが、その後の休憩まで与えた覚えはない。」

「申し訳ありません。私用にて場を離れてました。」

「お前にしては珍しいな。」

「本部への再起動報告は・・・」

「私がやっておきました。」

「ありがとうございます。ファサリナさん。」

「いいえ。同志も期待しておいでですよ。」

「お応えして見せます。」

「今から棺を開く。そのまま構わん。お前も見ておけ。」

「ガドヴェドさん、ひとつ報告が・・・」

「何だ？」

「例の男が上に来ています。」

「！ 確かか！？」

「この目で見ました。」

「ということは・・・あいつも上に・・・」

「いかがいたしますか？」

「そうか・・・奴は俺が引き受けよう。おまえはこいつに専念しろ。」

「はい。了解しました。」

「ガドヴェド、私もいいかしら？もしかしたら・・・こちら側に引き込める男がいるかもしれないから。」

「わかった、そちらは任せる。」

「ええ。」

「今日は何という日だ・・・オリジナル7が全員そろった。」

「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ……」

「足りない……ひとつ……」

「いや、来ている。」

「上のが？」

「これで私たちはお役御免かしら？」

「そう……揃ってしまえば私たちは……」

「いいじゃん！別に出ていかなきゃいけないわけじゃないんだし！」

「まあ、お気楽にいこうや。」

「それに……まだまだお楽しみは残ってるからね……フッフ……」

『ハッチ解放、本体出します！』

棺がゆっくり、大きく開かれる。

棺が完全に開かれ、そこにあつたのは

銃剣状のヨロイだった。

『開放終了、本体確認後、再起動の手順に入る。』

『了解、サウダーデ・オブ・サンディ、本体確認後、再起動準備。』

「フフフ・・・新たな顔ぶれを加えた同志のためのオリジナル？、今日こそ復活の日だ！」

一方、中央広場に着いたジークはカルメンとジョシユアと合流していた。

「遅いわね・・・」

「こんな分かりやすい場所、迷うと思えないけどな・・・」

「ラウンジにでもいるのでしょうか？」

「反対側にいたりして。」

「有り得るな。」

「ええ、恐らくヴァンさんなら・・・」

と、その間に

「ふざけるな！...！」

と、ヴァンの怒鳴り声が反対側から響いた。

「や、やっぱり・・・」

ジークとカルメン、ジョシユアは反対側に回った。

「もう、大声出さないでよ。恥ずかしい……から……」

見ると、ヴァンはウエンディを怖い表情で睨みつけ、蛮刀を抜こうとしていた。

咄嗟にカルメンがヴァンを取り押さえる。

「ちよつと！何考えてるの！！」

「そいつに聞いてみる！！」

「え？」

「ウエンディさん……？」

「………兄さんに………ミハエル兄さんに………会ったの。」

「ええ！？？」

「ど、どこういう事だよ一体………」

「ウエンディ、説明してくれる？」

ウエンディは、列車から降りたところからの出来事を話した。

ウエンディの兄、ミハエル・ギャレットを追いかけて、やっと追い付き、一緒に帰ろうと誘った。

しかし、ミハエルは二度とエヴァーグリーンには戻らない、カギ爪の男についていくと言い、ウェンディに「エヴァーグリーンに帰れ、二度と私を追ってくるな」と告げて去って行った。

「そう、お兄さんが……」

「もう戻らないって……本当なのか？」

ウェンディはただ黙って頷いているだけだった。

「そう……」

「もう一度聞く。兄貴は何処だ？何処に行った？」

「おいヴァン！」

「……知らない……」

「何でだ……！」

「聞かなかったから……」

「何で聞かなかった……！」

「で、でも……」

「カギ爪のこともだ！お前は兄貴と思い出話をしてただけか……！」

「だって……！」

「何で聞き出せなかった!!！」

「やめてください!!！」

二人の間に入ったのは、ジョシユアだった。

「そんなの無理に決まってるじゃないですか! やつと見つけた相手に帰って……帰れなんて言われて……他のことなんて考えられるわけないでしょう!!！」

「他のこと……!!！」

「ジョシユアの言う通りよ。ウエンディはまだ子供なんだから、そこまで要求できないわ。」

「ケツ!!！」

「……」

しばらく、その場が沈黙に支配された。

「……ねえ、ヴァン……」

「……」

「私……これから……どうすればいいの……? どうしてたら……いいかな……?」

「決まってるだろ。街に帰れ、お前に旅をする理由がない。」

「!?!?」

「ヴァンさん！それは言い過ぎ……」

「ヴァン！いい加減に……!」

ウエンディは立ちあがり、ヴァンをずっと見つめた。

しかし、彼は振り向こうとしない。

ウエンディは、黙ったまま……荷物を持って、ヴァン達の元から去って行った。

「……ヴァン。」

「……」

「元からだったが、今回のお前にはほとんど呆れさせてもらった。俺はここを出る。」

ジークはそうヴァンに吐き捨て、ヴァン達の元から去っていく。

「え!?!?ちょっと、ジークさん!?!?」

「止めないでジョシユア。彼は元々成り行きでついてきただけなんだから……」

「そうですね……」

ジークは当てもなく歩き、スカイガーデンまで来ていた。

「あ……………」

そこは、下のジャンクションとは違い、草木が生え、鳥達が飛び交う自然あるれる場所だった。

「ゾネットにこんな場所があったなんて……………」

ふとジークは芝生の上に寝転がった。

「……………ウエンディ……………本当に帰ってしまうのだろうか……………けど兄貴がいるということは……………」

ジークの追っているファサリナもいる可能性があった。

しかし、ウエンディをだしにしてまで見つけたくはない。

何処にいるのか、皆目見当がつかない

そう頭の中で思考をこらせていると

「何してるの？ジーク。」

ふと、聞き覚えのある女性の声が聞こえ、慌ててとび起きた。

目の前にいたのは、金髪ロングヘア、金色の眼をした……………

「やっと……………会えたわね。」

「……ね、姉さん……！マリア姉さん！」

ジークはマリアの傍まで駆け寄る。

「今まで何処行ってたんだよ！ずっと探してたんだぞ！」

「ごめんね、連絡手段がなかったし……それに、やることもあつたし。」

「それってもしかしてファサリナを探してたってことか？」

「そんなところかな。」

「なら一緒に探してくれないか？ゾネットに奴らがいるかもしれないんだ！」

「落ち着いて、焦らなくても会えるわ。」

「え？それってどういう……」

ジークがうるたえ、マリアは後ろを向く。

「ジーク、あのね……」

ゾネット地下では、順調にサウダーデの調整作業が進んでいた。

「ねえ〜！何であたしたちだけお留守番なの！？あたしもマリアお

「姉ちゃんと行きたい〜！」

「我慢しろって、俺達が全員出たら誰がここ守るってんだ？」

「……………そう、私達はオリジナル7を護るために存在する。勝手な行動は許されない。」

「護るためって……………ただの補充要員じゃん！抜けた穴埋めるためだけでしょ！」

「まあ、それでも待遇はオリジナル7と一緒にだからな。俺は別に構わねえぜ。」

「ええ……………それに、もしかしたらいいものが見られるかもしれないからね……………フフフ……………」

「……………ね、姉さん……………何て言ったんだ……………？」

「言ってるでしょ？私達……………オリジナル7補填メンバーに入らない？」

第9話 完

第9話 愛ある裏切り（後書き）

次回予告

そう・・・ジークさんは、やっとお姉さんと再会することが出来たんです。でも、兄さんと一緒に、カギ爪の男の一味になって・・・彼は戦おうとヴァンと同じ位にヨロイを出して、ゾネットはパニツク状態でした。

そこでジークさんは、ある真実を知ることになったんです。それは・・・

第10話 ネオ・オリジナルの補完

第10話　ネオ・オリジナルの補完

「……………ね、姉さん……………何て言ったんだ……………?」

「言ってるでしょ? 私達……………オリジナル7補填メンバーに入らない?」

ジークはマリアの言ったことに驚愕していた。

あのマリアがカギ爪の男の組織に入っていたことに……………

「何でカギ爪のところに……………!」

「決まってるでしょ? 夢を叶えるためよ……………あなたと一緒に暮らすって夢を……………」

「それだけなら俺を探すだけでいいだろ……………! 何でやつらに……………!」

「……………いくらガンダムを持ってても一人では限界があったのよ。私はあなたの搜索を条件にメンバーに入ったの。」

「ガンダム!? 姉さんがガンダムを……………!?!?」

「ええ、父の残したもう一機のガンダム……………ストライクを……………あの時に持ち出したの。同志と一緒にね。」

「何故ガンダムを奴らに売った!?!」

「同志は元からガンダムが狙いだっただのよ。私が持ち出さなくてもストライクは同志の手に渡っていたわ。」

不本意ながら、ジークは少し納得していた。

「ここじゃ目立ちすぎるわ、ついてきて。」

ジークはマリアの後をついていく。

ついてきた先は広い空間だが、暗く何も見えない。

「ここは・・・?」

「これを見なさい。」

マリアが照明をつけ、そこに見えたのは

「な・・・これは・・・!??」

「驚いた?ガンダムはあなたと私の2機だけじゃなかったのよ。」

そこにはそれぞれ形、色が違うガンダムが5機、存在していた。

「これはまさか・・・ガドヴェドが言っていた残りの4機・・・!」

「あら、ガドヴェドから聞いていたの?」

「存在していたことだけはな。」

「そう・・・これはオリジナル7に破壊された4機のガンダムを再生、改修したものよ。それぞれの弱点を補い、強化されているわ。」

「この白いガンダム・・・まさかストライク？」

「ええ、ストライクE。これが私の搭乗機よ。」

「ああ〜！マリアお姉ちゃん！！」

「お？もう戻ってきたのか？」

「あらかっこいいお兄さんねえ・・・フッフ。」

「マリア・・・この人が・・・？」

そこに補填メンバーである4人が現れた。

「な！？お前らあの時の・・・！」

「あら？誰かと思えばあの時の兄ちゃんか。」

「ていうかオ리가がお兄さんって言っちゃったよ・・・」

「オリガ！余計なことは言わないで！！」

マリアが顔を赤くして怒鳴った。

「あらマリア？もしかして・・・」

「え？マリアってそうなのか？」

「・・・・・・・・不潔。」

「だからその話はやめてっつて!!」

「不本意だが賛成だ、今はそんな気分じゃない。」

「あらつれないわねえ・・・・・・・・」

ジークはオリガを睨みつける。

「と、とりあえずみんな。自己紹介して。」

「はい！私はケイ・トリニティ！ロツソージスのパイロットだよ！」

ケイは赤いガンダム、ロツソージスを指さして言った。

「俺はペイン・ウィンド。あの緑色のガンダム、ヴェルデバスターのパイロットだ。」

「私はマリ・ベクレル。ブルデュエルのパイロット。」

「私はオリガ、あの黒いガンダム、ネロブリッツのパイロットよ。」

「以上がオリジナル7補填メンバーよ。」

「・・・・・・・・で、その補填メンバーとは一体何なんだ？」

「オリジナル7補填メンバーはその名の通り、欠損したオリジナル

7の代理になるために集められたヨロイ乗りで構成されているわ。オリジナル7が揃わない、死んでしまった時に代理としてオリジナル7になるの。」

「まさかと思うが・・・お前ら全員オリジナル7なのか・・・？」

「いいえ、今は6人。今は私が欠番の代理よ。」

「その欠番は誰なんだ？」

「分からない？意外に近くにいるのよ。」

それを聞き、ジークは思い当たる人物を頭の中で探し、一人だけ思い当たった

「ま、まさか・・・ヴァン！？あいつがオリジナル7・・・！？」

「ええ、ガドヴェドが今勧誘をしているところよ。もうすぐ私の役目は終わる。」

「じゃあ、カギ爪の組織とは用済みか？」

「いいえ、そのまま残る事になるわ。今後も同志の元にね・・・」

「それにさ、面白そうな事しそうじゃない？」

「ああ、絶対ド肝を抜く計画だろうぜ。」

それを聞いたジークはある疑問を投げかける。

「ちょっと待て！お前らカギ爪の計画を聞いてないのか！？」

それを聞いた4人は不思議そうな顔をする。

「……言われてみればそうだな。」

「マリ、何か知らない？」

「……私も詳細は知らない。」

「いいんじゃない？面白い事には違いないんだし。」

それを聞いたジークの顔が強張り

「お前ら幹部が知らされてない時点でおかしいと思わないのか！？」

能天気な振る舞う4人に怒鳴る。

「何だよそんなに目くじら立てなくてもいいだろ？」

「やっぱりこの人……怖い……」

「大丈夫よジーク、同志の考えてる事だからきつとすばらしい計画よ。」

そこにやさしく語りかけるマリア

「さあ、あなたも同志と一緒にすばらしい夢を見ましょ。」

マリアはやさしくジークに手を差し伸べると……

ジークは差し伸べた手を引っ叩いて振り払った。

「いい加減にしろよ……！お前らどこまで馬鹿なんだ！！」

マリアは驚いた表情で怒鳴るジークを見つめる。

「何も知らないでカギ爪の組織とつるんでたのかよ！？俺の親父を殺した奴の考える事なんざロクでもない事に決まっている！！」

ジークが言葉を進めていくうちにマリアの顔が強張っていく。

「今からでも遅くはない、すぐにカギ爪の組織から黙りなさい！！」

ジークの言葉半ばでマリアが怒鳴る。

「いつからあなたは私の言う事を聞かなくなったのよ……！何でも私の言う事は聞いてくれたのに……！」

「昔と違うんだよ姉さん。」

「やっぱり……さつさと父の元から去っておくべきだったわ……ガンダムに乗りなさい！」

「何？」

「あなたは私達のメンバーにするには遅すぎた……だから、あなたのガンダムを破壊する！」

「お姉ちゃん！私にやらせて！こんな奴のガンダムなんて・・・！」

「ケイ、ここは私に任せて。」

「・・・分かった、外に出るぞ。」

マリアとジークは外に出ると

すぐ近くでダンとディアブロが地上に降りていた。

「ガドヴェド・・・交渉に失敗したようね。」

「当たり前だろ、あいつは人一倍カギ爪を憎んでいる。」

「欠番メンバーはあの人に任せて、早くガンダムを出しなさい。」

「わかったよ、出る！ガンダム！！」

ジークがそう叫ぶと

空から合体しフォースシルエットに換装したインパルスガンダムが降り立つ。

「高速戦闘用の換装ね。エールパックにしといて正解だったわ。」

二人はガンダムに乗り込み、互いのガンダムを戦闘態勢に移行する。

「こちらから行くぞ！」

インパルスは牽制に機関砲を撃つが、ストライクEは構わずビーム

サーベルを抜き切りつける。

間一髪、インパルスもビームサーベルを抜きストライクEの攻撃を受け止める。

「くそっ、早い・・・！」

「ヨロイが良くてもパイロットが性能を引き出せなければこの程度。」

「何を・・・！」

「隙を見せているのがその証拠よ！」

ストライクEがもう1本のビームサーベルを抜いて頭部を攻撃しようとするが、

インパルスは空いている腕で斬りつけにくるストライクEの腕を受け止める。

「何度も同じ手が通用すると思うな！」

「へえ、流石に学習能力が高いわね。」

「やっぱりあの時の黒いヨロイは姉さんだったのか・・・！同じ予備動作をしたからな！」

「あれはこのストライクの量産型、同志のための防衛力よ。」

「量産型！？あれがまだあるって言うのか！」

「ええ、ストライクの設計図を元にデチューンしたものよ。」

父が乗っていたストライクの量産型

それがカギ爪の戦力になっている。

それは、ジークにとっては侮辱以外の何でもなかった。

「何でそんなものを作らせるような真似をしたんだ!!」

「全ては同志の計画のためよ。」

2機は瞬時に距離を取り空中へ飛び、

インパルスはビームライフル、ストライクEはビームガンで撃ち合うが、どちらも紙一重で回避し攻防を繰り広げる。

「父さんはあんな奴のためにガンダムを作っていたんじゃない!!」

「それは個人の感情よ、設計図は誰が使おうがその開発者の勝手よ。」

「おかしいだろ姉さん!!」

インパルスは再びビームサーベルを抜きストライクEに突っ込む。

「それとね、面白いものを見せてあげる。」

マリアはコクピットの端末のボタンを押した途端、

斬りかかったインパルスの腕を掴み、瞬時に膝蹴りを食らわせ、背負い投げの要領で地上に叩き落す。

「ぐわっ!？」

上空からストライクEが強襲をかけて来る

それをブースターで滑りながら回避する。

「何だ・・・急に動きが・・・!？」

態勢を立て直している間にストライクEが駆け

インパルスの頭部を鷲掴みにして崖に叩きつけた。

「ぐわっ!？」

「驚いた?急に動きが機敏になったでしょ?」

「何をしたんだ・・・!」

「私達のガンダムにはS'E'E'Dシステムが搭載されているわ。」

「何だつて・・・!？」

「これは太古の昔にオリジナル7に対抗するために作られた・・・
て言うのはガドヴェドから聞いてるわね?でも結局は破壊された。
敗因はビーム兵器に固執していたわけじゃないの。」

「じゃあ何なんだ……！」

「このシステムを使いこなせる人間がいなかったのが原因なの。これは、ヨロイインターフェイスシステムを解析し、擬似的にヨロイと一体化することができるの。」

それを聞いたジークは驚きのあまり声が出ない。

「動きが機敏になったのも、ガンダムと一体化したおかげなの。これがその証拠よ。」

マリアはインパルスに映像を送る。

ジークの目に映ったのは、金色の眼に虹彩がなくなり目が据わっているマリアの顔だった。

「あなたはガンダムのメインカメラやセンサーからしか敵を認識できない。けど私は自分の目や耳のように認識することができる。そして……！」

ストライクEは掴んだ手を離し、頭部に拳を何発か当てた後、回し蹴りでインパルスを吹き飛ばす。

「ガンダムを自分の手足のように動かせる。五感を共有するこのシステムがあればこそその業物よ。」

そして、ヴァンとガドヴェドの対決は、硬直状態を保っていた。

「なあ、ガドヴェド。俺はあんたに感謝している。本当だ、だけどやっぱり……今のあんたと同じ夢は見られない。」

ヴァンの語りかけにガドヴェドはだんまりを決め込んでいた。

「エレナはそんなことのために俺を助けてくれたわけじゃないから……」

「……わかった。最早問うまい。」

「すまないな。さあ……行くうか……ダン。さっさと済ませよう！」

「……つまり、姉さんに勝つにはそのシステムを使えばいいわけか……」

「！　あなた、まさか……！」

「そのまさかさ。こいつにもS・E・E・Dシステムがある！こいつを使えば姉さんに勝てる！」

「あなた、適合者がどうかもわからないのに強気ね？」

「やってみるさ。行くぞ……ガンダム……！」

ジークは一発逆転を狙い、S・E・E・Dシステムを起動させる。

果たして、それは吉と出るのか、凶と出るのか。

勝利の女神はどちらに微笑むのか、誰も知らない。

第10話 完

第10話　ネオ・オリジナルの補完（後書き）

次回予告

ついにジークさんとマリアさんの対決が始まりました。何とかつていうシステムを使ったんですけど、全然駄目だったみたいで、コテンパンにやられてしまいました。でも、そこで終わらないのがジークさんなんです。ある意味、ヴァンと同じで、ピンチをチャンスに変える力を持っているみたいです。

第11話　希望の夢　絶望の夢

第11話 希望の夢 絶望の夢

ジークはマリアに勝つためにS・E・E・Dシステムを起動させる。

「さあ、これで互角に……」

しかし、システムを起動したにも関わらずジークの身には何も起きていない。

「おかしい……何でなんだ!？」

「やっぱり、あなたは適合者じゃないわね!」

ストライクEは右腕のアンカーランチャーでインパルスを掴む。

「システムを起動しただけで私に勝てるとは思わないで!!」

アンカーランチャーを引っ張り、インパルスを宙に上げ、地面に叩きつける。

「ぐわあっ!？」

振動でヘルメットのガラスが割れ、額から血が垂れる。

「残念ね、それでよく今までガンダムを壊さなかったものね。まあ、ただのレプリカじゃ性能差は激しいけど……」

「く……!!」

「最後通告よ、私達の仲間になりなさい。そして、同志の夢を護るのよ。」

「もし、断った場合は・・・？」

「そのガンダムのベースを破壊するわ。」

「何！？出来る筈がない！！」

「出来るわ、ケイのロツソージェスならね。」

そこでケイから通信が入る。

『マリアお姉ちゃん、限界高度まで上がったよ。』

ケイの乗るロツソージェスは、巡航形態で限界高度まで上昇していた。

「衛星が見える？」

『うん、あのおじさんと欠番の間に見えるよ。』

「私が合図をしたら、砲撃形態でベースを破壊しなさい。」

『オツケー！』

「くそ・・・！」

「そつだ、いい事教えてあげましょうか。」

「何だ……？」

「私達は、死んだ父親に拾われたって言ったわね。」

「それは何回も聞いた。」

「実は私達……この星で生まれた人間じゃないのよ。」

耳にしたこともない事にジークは驚きの表情を見せる。

「何！？俺達はエンドレスイリユージョンの人間じゃないのか！？」

「ええ、それを聞いた時には私も驚いたわ……これは同志から教えてもらった事よ。」

マリアは、その時の事をジークに詳しく話す。

「私はこの星の人間じゃない！？」

「ええ、あなた方はマザーと呼ばれる星の人間なのです。」

それは、ストライク改修作業中にカギ爪からその話を聞いていた。

「実は、私もマザーからここに流れ着いた者でしてね。この星に降りる時、二つの小型冷凍カプセルも一緒に持っていきました。それが、あなたとあなたの弟さんなのです。」

その当時は、あまりの驚愕の真実にマリアは空いた口がふさがらない。

「20年前に冷凍カプセルを誰かに持ち去られてしまいました、いやあ探すのに苦労しましたよ。」

「同志……まさか、私達の村に来たのは……」

「ええ、あのヨロイもそうですが、あなた達を迎えに行ったのもあつたんです。少しばかり不測の事態が起きてしまいました……」

「それじゃ私とジークは一体何者なんですか!？」

「確か、カプセルには……えーと……ジョージ・プロジェクト試験体って書いてありました。」

「ジョージ・プロジェクト?」

「ええ、私も話だけは聞いたことがあるんです。当時のマザーは遺伝子操作で子供を産む計画が進められていました。そのリーダーの名前がジョージだったと思います。でも、頓挫して二人しか誕生しなかったみたいで……」

話の途中でマリアはカギ爪の手を取り涙で濡れた目で見つめる。

「ありがとうございます、同志。この地に降ろしてくれたあなたこそが……私達の本当の父親です……!」

「え……あ……どうも……いいんですか私みたいな老人が父親でも……」

「関係ありません!私達がこうやって生きているのも全て同志のお

かげなのですから！」

「う……ウソだろ……！カギ爪が俺達をこの星に……！！」

「全て本当よ、ちゃんと私も調べたんだから。」

「ウソだウソだウソだ！！ウソだあああ！！」

ジークは混乱し、頭を抑えて錯乱する。

「全て真実よ、同志のおかげで私達はこうして生きている。だから、同志の夢を護るのもまた私達の使命なのよ。」

ストライクEはインパルスまで歩み寄り、手を差し伸べる。

「そして、同志の夢は私達の夢でもある。さあ、一緒に……また二人で幸せな夢を……」

インパルスはストライクEの手を握り

「……フツ。」

瞬時に引き寄せバランスを崩させ、巴投げの要領でストライクEを投げ飛ばす。

「なっ！？」

ストライクEは突然の行動に対処出来ず、地面に倒れる。

「俺達はマザーって星の遺伝子操作された人間で・・・しかも冷凍保存された俺達を救ったのはカギ爪で、だから奴の夢を護れって？ふざけるのも大概にしろ！！」

ジークは先程と打って変わって怒りに任せて怒鳴る。

「誕生がなんであれ、俺は俺だ！俺の夢はこのガンダムで父さんの夢だったヨロイの新たな可能性を見出す事だ！！カギ爪なんざ知った事じゃない！！俺は貴様らを認めない！貴様らの夢は認めない！！」

「くっ・・・！ケイ、ベースの破壊を！！」

『りよ、了解！』

上空に待機していたロツソイージスは砲撃形態に変形し、大口径ビーム砲を発射する。

「させるか！ソードシルエット！！」

ベースが破壊されたと同時にソードシルエットが射出された。

「しまった！お姉ちゃん、換装パーツが行っちゃう！」

「大丈夫、何とかするわ。」

「させるか！！」

インパルスはブーストで突っ込み、ストライクEに飛び蹴りを喰らわせる。

「くっ!?!」

ソードシルエットが飛来し、戦闘区域の真上に着く。

「換装はさせない!?!」

ストライクEはビームガンでソードシルエットを撃ち破壊した。

「万策、尽きたわね。」

「甘いな、戦いは二手三手先を考えて行動するものだ。」

「え?」

爆煙の中から対艦刀が落下し、インパルスは上空でチャツチする。

「ソードを換装でなく、装備するために飛来させたって言うの!?!」

「シルエットはこういう使い方もあるんだよ!?!」

そして、対艦刀のビームを展開しストライクEに突っ込む。

「はあああああ!?!」

「やらせない!?!」

ストライクEが取り付けれる前にビームガンを連射する。

「なんとおおおお!!」

ビーム攻撃を食らう直前

ジークの目の虹彩がなくなり、その視界が鮮明に映る。

放たれるビームを全て避け、ストライクEに突きにかかる。

「何っ……!?急に動きが……!」

「負けるかああああ!!」

「そんな……!システムが発動したっていうの……!」

ストライクEが咄嗟にシールドで防御するも、

対艦刀はシールドごと左腕を貫く。

対艦刀を一気に振り下ろし左腕を破壊した。

「もらったああああ!!」

「やられる……!」

インパルスが対艦刀を振りかぶったその時

何処からかの砲撃で攻撃が妨害される。

「何……!?!」

『マリア、後退を!』

ストライクEにマリのブルデュエルから通信が入る。

「マリ、どうしたの?」

『ケースWEが発生、同志はゾネットから撤退する。』

「何かあったの?」

『何でも馬鹿でかいドリルからヨロイが現れたそうさ。今ミハエルがサウダーで同志を保護してゾネットを出たようだ。』

『あのお兄さんは私に任せて、撤退するわよ。』

「わかったわ。」

ストライクEは撤退するためにブースターで撤退を始める。

「待て!!!」

「ジーク、同志の夢は私が命に代えても護り通す。止めたければ、追いかけてくる事ね。」

マリアはそう言い残すと何処かに飛び去っていく。

「待て!!!」

インパルスはブースターで追いかけてしようとしたが

遠方からの砲撃によって妨害される。

「くそつ、邪魔をするな!!」

「悪く思つなよ、時間通りに事が運ばないからな。」

「マリアはやらせない。」

ヴェルデバスターは肩部の六連装ミサイルを、ブルデュエルは機動レールガンでインパルスの足止めをする。

「お前らの相手をしてる暇はないんだ!そこを・・・」

「あらつれないこと言わないでよねえ?」

インパルスの後ろからネロブリッツが、突然姿を現した。

「い、いつの間に!?!」

「姉弟の間に入る気はないんだけどね、お仕事の邪魔はさせないわ。」

ネロブリッツの背部にある大型クローでインパルスの首元にかける
と、

インパルスのエネルギーが吸い取られ、PS装甲が解除された。

「な、エネルギーが・・・!?!」

「殺しはしないわ、後でマリアにつるさく言われるだろうし。じゃあね。」

「マリ、俺達も撤退だ。」

「了解。」

ネロブリッツ ヴエルデバスター ブルデュエルはその場から撤退を始めた。

エネルギーを吸い取られたインパルスがその場で膝をつく。

「くそ！これじゃ追撃は不可能か・・・」

ジークはインパルスから降りると、上空に何か飛び去っていくのが見えた。

「あれは・・・？」

その飛行しているヨロイの右腕には、ファサリナとカギ爪の男がいた。

「カギ爪・・・！」

その瞬間

「ハハハハ・・・見つけたあ！！ヒヤハハハハハハ！！」

ヴァンの高笑いが出た。

ジークは変貌したヴァンを見て啞然とした顔をする。

「ヴァンよ、今のヨロイが答えを出した。やはり人は明日に生きるべきもの。過去に生きるお前は次の一撃で断罪し、終わりにする！」

「いいや違うね！」

「何!?!」

「これが始まりだ、やっと見つけた!後は捕まえてブツ倒すだけだ!」

ヴァンは再び高笑いをし、大刀を構える。

「俺の旅は間違っちゃいなかった!」

「ほう……この土壇場で化けたか。だが!つけ焼き刃など、私には通用しない!」

「ガドヴェド、俺はさ……あんたが好きだった。頑固に掟を護るあんたに。今でもそうだ、だから……あんたが邪魔なら……力づくで押し通る!」

「通しはせんわああああ!」

「通るんだよおおおお!!チエエエエストオオオオオオオ!!」

ダン、ディアブロが武器を振りかぶり、ぶるかると同時に

強い衝撃波が発生し、柱となって空へと伸びる。

「う……うわ……!?!?」

ジークは吹き飛ばされそうになり、地面に踏ん張り耐えた。

衝撃波が収まると……

その衝撃波によって出来たクレーターの中央に、膝をついているダンの姿があった。

「……………ガドヴェド……………」

「……………何だ?」

「いつか……同じ夢の話しよう……………」

「……………楽しみだ。」

ヴァンが帽子のリングを鳴らした途端

ディアブロの首にあるパイプから青い液体が血の様に噴き出していた。

「私の……私の夢が散っていく……私の犯した……罪と共に……………」

ディアブロがのけ反った状態で停止した。

その頃、カギ爪の男がいる場所では

「そうですね・・・」

「はい、ムッターカチーフからの報告です。」

「では間違いないでしょう。ガドヴェド君、君は本当に一途な人でした。ありがとう・・・」

ガドヴェド戦死の報は補填メンバーにも届いていた。

「え！？あのおじさん死んじゃったの!？」

「ええ、改造された人間にとって、オリジナルのヨロイの破壊は・・・自分の死も当然・・・」

「あの人のおかげで・・・俺達は集まれたんだ・・・」

「・・・・・・・・・・」

「報いるため・・・ってわけでもないけど・・・あの人の方まで生きましよう。」

ジークはPS装甲を切った状態で、ジョシユアとカルメンがいる場所まで歩いた。

「よかった、ジークさん無事だったんですね!」

「突然ガンダム出していると見て心配したのよ?」

「すまない。」

ジークはコクピットからワイヤーで下まで降りる。

「で、これと同じヨロイがもう1体あったんですけど……あれには誰が乗っていたんですか？」

そう尋ねるジヨシユアに、ジークは少し暗い表情を見せる。

「……俺の姉さんが……生きていた。」

それを聞いた2人が驚いた。

「姉さんって……まさか片方のヨロイに乗っていたのが!？」

「ああ……カギ爪の元にいる……俺をあちらに誘いました。」

「そんな……!？」

「よりによって……仇であるファサリナと共にいるなんて……
正直、驚いた。」

「そのファサリナなんだけど……」

「いい。」

カルメンが何かを教えようとするのを、手のひらを見せ止める。

「え……!？」

「仇だなんだ言ってる場合じゃなくなつた。」

ジークは遠い目をして、子供の頃の事を語りだす。

「俺は・・・俺は、姉さんが好きだつた。小さい頃、近所の子供にいじめられていた時も助けてくれて・・・そんな姉さんが・・・カギ爪によつて歪められてしまった。俺は・・・その歪んだ思想から・・・姉さんを助けたい。」

その強い意志を聞き、二人は笑顔になる。

「それじゃ、ぐずぐずしてるわけにもいかないわね。」

「ああ、俺はすぐにでも出発する。」

「待つてください！そんな今すぐじゃ・・・！それにさっきの戦闘でヨロイのエネルギーも・・・。」

「急いでいるのなら・・・デュエルパークへ向かうといいわ。ヨロイ関係で補給するならあそこが一番よ。」

「わかつた、ありがとう。」

ジークは二人に別れを言い、ガンダムに乗る。

「ベースを破壊された最中に、何かが落下した記録が残っている。ベースが破壊されることも想定し、物資を地上に下ろす機能も備わっていたんだらう。」

ジークはスロットルを切り、ガンダムを前進させる。

「まずはそれを回収してから・・・姉さんの後を追おう。」

ジークはふと、ヴァンとガドヴェドとの戦闘の事を思い出す。

「ヴァンの・・・ダンのあの感じ・・・いつもと違っていたな・・・

」

明らかに、いつもと比べ物にならない力が備わっていた。一体何故、あの状況でああなったのか、不思議に思っていた。

しかし、今はそんな事を考えている場合ではなかった。

「恐らく、奴らも気付いて行動をしているに違いない。一刻も早くベースが下ろしたものを回収しなくては・・・」

ジークは歩く。

父が遺した物を護るため、姉をカギ爪の元から救い出すために。

第11話 完

第11話 希望の夢 絶望の夢（後書き）

その後ヴァンはデュエルパークでのトーナメントに出ることになりました。1対1でどっちのヨロイが強いかな勝負するんです。事情はまあ・・・色々あって・・・プリシラさんはその対戦相手だったんです。思ってますけど、ヴァンの周りにはどんな事にも一生懸命な人が、自然に集まってくる気がします。味方も、敵も。

次回 ガンダムVSブラウニー

第12話 ガンダムVSブラウニー

「……………え、何て？」

「だから、金が足りないって言うてんだよ。」

ジークはガンダムの電力補給のためにデュエルパークへ辿りついていた。

しかし、その電力を発生させるには莫大なエネルギーが必要であり、それと同じく金もいる。

今のジークにはそれだけの金を持ち合わせていない。

「しかし、それだけ電力食うってことはこのヨロイ……他とは違う代物なんだろうな……」

「まあ……確かにな……」

「そつだ兄ちゃん、B-1グランプリに参加してみないか？」

「B-1グランプリ？」

B-1グランプリ

RWCが主催しているヨロイバトル大会である。

「それに出場すればエネルギーも補給してくれるし、勝てば賞金だって手に入るぜ。」

そう勧められ、B-1グランプリへ出場した。

結果は全勝 実弾兵器しか持ち合わせていないレプリカヨロイにとつてPS装甲は脅威だった。

武装らしい武装も使わず、肉弾戦で勝ち続けていた。

そして、準決勝

相手はピンク色の猫耳姿のヨロイ

このB-1グランプリ一番人気のブラウニーだ。

「こいつを倒せば決勝だ・・・追加装甲を引っぺがせばあるいは・・・」

ジークが戦略を考えている間に、戦いのゴングが鳴り響いた。

互いに真正面から突撃、ガンダムはブラウニーを掴もうと腕を伸ばす。

ブラウニーは横に避け後ろに回り込み、肘のニードルを突き付ける。

「何!？」

ジークはとっさに対装甲ナイフを抜きニードルを受け止めた瞬間

観客の歓声が鳴り響く。

『ここでガンダム、初の武装を使用しました！さすがはブラウニー』

「こいつ・・・PS装甲の弱点を狙ってきたか・・・！」

PS装甲ならブラウニーのニードルでも受け止めてもさして問題はない。

しかし、今の攻撃は腕の関節を狙っていた。

PS装甲は関節部分まで護ることはできない。ブラウニーはそれをわかって攻撃を仕掛けてきたのだ。

「洞察力は大したものだ・・・なら、S・E・E・Dシステムを使うしかないか・・・！」

ジークはS・E・E・Dシステムを起動しブラウニーと向き合う。

しかし、あの時の様な一体になる感覚は微塵も起きなかった。

「何か足りないんだ、何が・・・」

ブラウニーとの戦闘でS・E・E・Dシステムを使い、コツを掴もうとしたのだが、何も掴めなかった。

しかし、試合はまだ終わっていない。

ガンダムは駆け、対装甲ナイフでブラウニーを攻撃しようとした。

しかしブラウニーはガンダムの腕を掴み、そのまま飛び上がり、ガンダムの右肩を踏み後方に回った。

「こいつ・・・踏み台にしゃがって!」

振り向き攻撃を仕掛けようとしたが・・・遅かった。

ブラウニーのニードルがガンダムの首に突き刺さり、ガンダムは戦闘不能になった。

その瞬間、歓声が最高潮に達した。

『ウイナー、ブラウニー!これで決勝進出決定です!!』

「やるな・・・一撃でやられるなんて・・・一体どんな乗り手なんだ?」

ブラウニーの胸部ハッチが開き、ヨロイ乗りが姿を現す。

「みんなー!応援ありがとう!」

「な・・・女の子!？」

ガンダムを負かしたヨロイ乗りは、ピンク髪の可憐な女の子

その事実には驚愕していた。

「ちやんとご飯食べてる!?!」

ジークはコックピットハッチを開き、ガンダムを負かした女の子
プリシラを見据える。

「はぁ・・・まさかあんな子に負けるなんてな・・・」

試合が終わり、ジークは路地で頂垂れていた。

準決勝まで勝ち抜いた分の資金は・・・応急修理と電力補給でほと
んど素寒貧になっていた。

これで落下ポイントまでの電力は何とか賄えた。

しかし、それ以外の食費等を全く考えておらず

腹の虫がうるさく鳴り響いた。

「はぁ・・・腹減った・・・」

「ねえ・・・あなた準決勝の対戦相手でしょ？」

そこで話しかけてきたのは、プリシラだった。

「お前は確か・・・プリシラ？」

「知ってたんだ。」

「嫌でも目に入ってな。」

ジークが指差した先に

(ヴァン VS プリシラ)

と書かれた号外が貼り出されていた。

ヴァンはRWCに雇われ、次の決勝でプリシラと対戦をすることになった。

「そういえば、あなたのヨロイ・・・ガンダムって言ったっけ？」

「ああ。」

「すごいね、装甲もそうだけど機体の機動とかも。」

「そうか？」

「ねえ、あの時少し動きがおかしくならなかった？」

あの時　ガンダムのS・E・E・Dシステムを起動した時だ。

最も、失敗しブラウニーに負けた要因となってしまうたが

「あなたちゃんとご飯食べてる？食べないと力も出ないよ。」

「そういえば・・・ガンダムの電力補給を優先してしまってロクに・・・」

ガンダムへの電力補給を優先し、ジークはまともに食事をとっていなかった。

B-1グランプリでのコンディションは最悪

PS装甲のおかげで準決勝に勝ち残ったものだ。

それを聞いたプリシラがジークへ身を乗り出す。

「そんなんで勝負したの!? 駄目じゃない、全力で挑んでくれないと!」

「いや、しかしだな・・・」

「・・・わかった、家に来て。」

「え?」

「家でご飯食べさせてあげる! それで、全力の状態でもう1回勝負しよう!」

プリシラに誘われ、初めは拒否しようと思っていたが

「・・・わかった。俺もあんなコンディションで負けたんじゃ面子が立たないしな。」

プリシラの熱意に負け、夕食を御馳走になってもらうことにした。

プリシラの家に向かう最中、カルメン99に見つかり、後から付いて来ていることにも気付かずに

そして、プリシラの家・・・というよりブラウニーの貸ドックへ辿り着いた。

「プリシラー！」

「ごめん！遅くなった！」

「ここがプリシラーの家か・・・」

「あら、この人は？」

「今日戦った対戦相手、名前は・・・・・・・・あれ、まだ聞いてなかったっけ？」

「ジークだ、ジーク・ヴェレナ。」

「ジークさんね、入って！みんなでご飯食べよう！」

「ロクにお持て成しもできませんが・・・」

「いや、食わせてくれるだけでもいい。」

ジークが食堂に入り一番目に入ったのは

「おかえり、お姉ちゃん！」

「あれ、その人誰？」

子供達だった。

「子供？」

「みんな家で預かっている子達です。」

そう答えたのは眼鏡をかけた女性、ヨアンナ。

ジークはすぐに事情を察した。

この子供達は皆、孤児

プリシラが戦っているのも、子供達を食べさせていくためだと。

(そのために戦っていたのか・・・)

「遠慮なんてしないでよね！全力で戦う約束だから！」

プリシラにそう言われ納得し、ジークは席に着く。

「今日の食事に感謝を、地には平和を！人々には明るく愉快な未来を！スリー、ツー、ワン！」

『いただきまーす！！』

子供達が食事を取っていく中 その外では

カルメンやヴァン達はブラウニーを見ていた。

「そっか、結晶体を使って処理能力を早めてたんだ。でもこんなヨロイ、あの子何処で手に入れたのかしら？」

ヴァンはふと、子供の声が聞こえる方を見て

「なあ、何でジークあそこにいんだよ？」

「さあ？」

ヴァンの疑問に素っ気なく返事を返すカルメン

「プリシラ、食べないの？」

「まさか、俺に気を使って？」

「ううん、そんなんじゃないの。帰りに食べてきちゃったから。」

「駄目なんだよ、買い食い。」

「ごめん。じゃ、食後の運動でもしてきます！」

「・・・少し気になるな。」

「もしよかったら様子、見てきてもらえますか？」

「わかった、夕飯御馳走様。」

ジークは持っているパンを頬張り、プリシラの後を追う。

「お兄ちゃん、駄目だよ食べながら走っちゃ！」

「ごめんごめん、じゃ行ってくる！」

「駄目です！僕を・・・僕を置いていかないでください！！」

「おいガキ！！」

「はい？」

「うるさといって言うてんだろ！！」

陽も落ちてきて、ジークは途中で合流したヨアンナとプリシラを探していた。

「ん、プリシラだ。」

プリシラは何かを袋に取り出して食べていた。

食べていたものは、パンの耳

「プリシラ、こんなところで何を食べてるの？」

「パンの耳。」

「やっぱり・・・そんな気の使い方・・・」

「結構おいしいよ、これ。ダイエットにもなるし。それにさ、私ブラウニーの修理代とかカスタムの費用とかもかかるし。」

「でもあなたばかり・・・本当なら年上の私がみんなを・・・」

「そんなことないって。ヨアンナはみんなの世話で忙しいし、私はヨロイに乗るのが好きだもの！」

「プリシラ、前にも言ったけど、もうここまでにしらない？」

「何で！？後一回勝てば優勝よ！そしたら賞金や副賞だって・・・」

「負ければ全てなくなっちゃうわ。」

少し冷たく話すヨアンナにプリシラはしばらく黙りこんだ。

ここは、彼女達の問題 干渉は好ましくない

そう思ったジークは二人から離れていった。

「・・・勝手な事してるのはわかってるわ。ゴメンね。だけど」

「今までのお金でしばらくは食べていけるのよ。怪我してまで頑張らなくても。」

「ああこれ？やだなあ、ただの打ち身でほとんど治ってるって。」

「知ってるわよそんなこと！」

「はあ・・・なあんだ・・・」

崖下で盗み聞きをしていたカルメンが溜息をつく。

「これ以上無理してママみたいになったらどうするの！私達のために最後まで働き続けたママみたいに！」

「ヨアンナ、私はずっとママみたいになりたかったの。ママは私達を本当の家族みたいに育ててくれてた。そのためにブラウニーでバトルシヨールを続けて。」

「でもそのために死んじゃったら・・・今ならまだ間に合うわ。ジヨバンニさんの話をもう一度聞いてみない？」

「嫌だよ！八百長なんて！ママは反則はやってでも八百長はしなかったわ！私がやったらママに怒られちゃう！それに・・・あの人ママのブラウニーを侮辱したじゃない！」力強さに欠けてみっともない。『って！』

「プリシラ・・・」

「私は勝つわ、正々堂々勝ってみせる。そして大きなお家を造りましょう！あの子たちが大人になるまで暮らせるような立派な家を。」

プリシラの笑顔に、ヨアンナはこれ以上何も言えなくなった。

「嫌な事、聞いちゃいましたね。」

「後味悪いつて言うか何というか・・・」

「そこで何をしてるのかな？」

盗み聞きしていた3人の前に現れたのは、顔を引きつらせながらにやついているジークだった。

「げ、あんたいたの？」

「あ、あのこれ・・・」

「さっきプリシラが怪我したって聞いた時、何か企んだな？」

「え、べ、別に？」

すっ惚けるカルメンの態度が、YESと答えていた。

「言うておくが、プリシラはジョバンニの圧力には屈しない。それと、楽しんで勝とうなんて彼女のヨロイ乗りとしても誇りを傷付けることになる。」

「わーってるよ。」

ヴァンはそう言いながら、立ち上がる。

「そんな事、しやしねえよ。」

そのまま何処かへと歩き出し、カルメンとプリシラもその後を追う。

そして、翌日

B・1グランプリ 決勝戦

ダンとブラウニーの試合が始まるうとしていた。

『B・1グランプリファイナルカード！RWC決勝用のヨロイは初登場ダン！そしてシスターママ、おなじみブラウニー！...！』

実況者が熱く語り、観客の歓声が響く。

『掛け金のレースはブラウニー有利の8：2から6：4まで縮まっています！これはRWCが公社読者層にアピールしたものだと思われ
ます！』

「ジークさん。プリシラは本当に勝てるんですか・・・？」

ヨアンナは不安げにジークに尋ねる。

「大丈夫だ、プリシラは勝つ・・・必ず。」

『さあ時間だ！行くぞ！レディ・・・GO！！』

「いつくよー！ヴァンさん！」

「仕事なんてな、悪いがすぐに終わらせる。」

ゴングが鳴り、ダンとブラウニーが戦闘態勢に入った。

「駄目よ、調子に乗っちゃ！」

「乗ってない。」

ダンは大刀をブラウニーに向けて投げるが、ブラウニーは左足を上げ蹴り飛ばす。

「見え見えよ、そんな攻撃！」

「そうかい！」

ダンがブラウニーに向かって突っ込み大刀を取ろうとする。

「そうれ！」

ブラウニーは張り手でダンを弾き飛ばした。

「クッ……こいつ……！」

「お姉ちゃん頑張れ〜！」

「プリシラ、いつの間にあんなに強くなって……」

「特訓の成果が出たんだな。」

ジークは対ダンの特訓をプリシラに受けさせていた。

特訓相手は対艦刀を装備したガンダムとヴァンの戦闘データ

大剣を相手の立ち回りと力押しでの攻撃の対処法を身につけていた。

「もらった！」

隙ができたダンにブラウニーは左肩のニードルを突き付ける。

しかしダンは紙一重で避け大刀を取り戻した。

『ダンは再び刀を手にしました！ブラウニーを真っ二つに斬るつもりか！？』

「プリシラ！」

「大丈夫、プリシラは絶対に斬られない。」

「さあ終わりだ！」

「まさか、これ位で！」

ダンの大刀を避け、ブラウニーは振り被ったダンの大刀の上に立つ。

「何！？」

「だからさ、当たらなきゃ意味ないんだって。」

「いいぞ、プリシラ！そのまま・・・」

「行くよ！・・・」

そのままダンに接近し攻撃を仕掛けようとしたが

ダンは大刀を離しブラウニーのバランスを崩させる。

「うわ！？」

ブラウニーの腹に手刀を叩き込み、ブラウニーを吹き飛ばした。

「プリシラ！？」

『渾身の一撃だ！決まったか！？』

塵が晴れ、ブラウニーが立ちあがろうとしていた。

『いや、まだまだ！ブラウニーが立ちあがりました！！』

「だよな、大したもんだあいつ。攻撃が当たった瞬間、地面を蹴つて後ろに跳びやがった。オリジナル以外にこんなヨロイがあったなんて。認めるよ、お前とそのヨロイは確かに強い。」

ヴァンはブラウニーとプリシラを認め称賛する中、ブラウニーはその場を動かない。

「どうしよ……どうしたら……どうしたらいいの……」

その言葉は、相手の強さに戸惑っているものではなかった。

むしろ

「こんなに楽しいの……初めてー！！」

ブラウニーの外装が剥がれ、動物のような顔立ちが露出する。

『おおっとブラウニー！今大会初の完全戦闘モードになりました！』

「ついてこられる？ヴァン！！」

ブラウニーは高速移動でダンを囲み翻弄する。

「あんなに嬉しそうなプリシラ……ママが死んでから初めて……」

「

「いいぞプリシラ……今のお前はブラウニーと一心同体。今のお前なら、勝てる!」

「面白い奴だな、お前。名前なんて言っただけ?」

「プリシラよ!」

「プリシラか、ようし覚えた!」

「え……ヴァンが女性の名前を覚えるだって……!?!」

ジークがそう驚く中、RWC特別席にいたウエンディとカルメンは不満げだった。

「プリシラ、俺には一つ試してみたい感覚があつてな。悪いが……ちょっと付き合ってもらおう!」

「いつでもどうぞ!」

「じゃ……遠慮なく!」

ダンが大刀を両手で握り、思い切り振りまわしブラウニーが発生させた塵を吹き飛ばした。

『おおつとなんとという力技だ!』

塵が吹き飛んだ後に、ブラウニーはいない。

「ちっ!」

ブラウニーは高く跳びあがっており、後ろを取っていた。

「後ろか！」

「遅すぎるよ！優勝もらったー！！」

「ちえええい！！」

ブラウニーはニードルを突き付け妖精の一刺しで決めようとしたが、ダンは大刀から短刀を出し、ダンのボディを傷付けてまでブラウニーのニードルを斬る。

「え！？」

その瞬間、ブラウニーの胸に短刀が突き刺さった。

「プリシラー！！」

「え・・・お姉ちゃん負けちゃったの！？」

「まだ大丈夫だが・・・あの損傷では不利だぞ・・・！」

『ブラウニー！これは戦闘続行不可能か！？』

「あゝあ、まさか自分のヨロイを傷付けてまで攻撃するなんて・・・
・武装も追加しとけばよかった・・・」

「・・・あと一歩か・・・ガドヴェド・・・何が足りないのか教

えてくれよ……」

ヴァンは、ガドヴェドと戦った、あの瞬間をもう一度行おうとしていた。

しかし、ジークが試していたS・E・E・Dシステムと同じく、失敗に終わっていた。

そこに

「ちょっと待ったああああ！！ブラウニーってのはどっちだ！！」

「な、何？」

「レールワークスの真のファイナリストは真のスーパーヨロイの持ち主は……この俺、ザコタ様だ！！」

機関車をモチーフにしたヨロイとレールの様な巨大車輪だった。

「な、何あの人……？」

「レールワークス……RWCのヨロイか！？」

そう、ジヨバンニが前もって用意していたB-1グランプリの決勝カードだ。

『おおつと何だこのヨロイは！？乱入はルール違反だぞ！！』

「そつだ！邪魔すんな！」

「ひっこめ!!」

「もうすぐ決着なんだぞ!!」

観客から容赦ない野次が飛ぶ。

「うるせー!! 契約上ファイナリストは俺だって決まってるんだ。偽物は出ていけ!!」

「おいおい、そんな言い方はないだろ・・・」

「お、お前はあの時の・・・!?!」

このザコタと言う男とヴァンは面識があるようだ。

「あゝ、ヴァンって偽物だったの?」

「色々事情があつてな。代理だったんだ。」

「そつだ! 代理は下がってる! あの時とは違う、スーパーに生まれ変わった! 俺が決着をつける!!」

どつやらヴァンのこっぴどくやられたのだろう。とジークは心の中でつぶやいた。

「わかったわかった、後は好きにしろ。プリシラ、まだ動けるだろ?」

「うん。」

「ちょっと待て!!」

予定が狂ったジヨバンニは慌てるが、遅かった。

「待つ必要なんてない!!」

あまりの展開に、実況者も困惑している。

『え、え〜と・・・試合再開なのでしょうかね?』

「派手に決めるぜ!スーパーローリングアタック!!」

ザコタのヨロイ スーパー2000000系ライナーガインは巨大車輪に乗り、ブラウニーめがけて突撃する。

「何それ!?!」

ブラウニーは両足を車輪の下に滑らせ、車輪ごとライナーガインを持ち上げた。

「もっと頑張つてよ!!」

「フン!俺のテクに驚け!ブーストオン!!」

ライナーガインの乗る車輪からジェットが吹き出し飛ばされないようにする。

しかし……………

「あんな馬鹿でしょ!!」

それは、さらに吹き飛ばれる要因になった。

ブラウニーはその場でライナーガインを回転させ、ジェット噴射＋蹴り上げで場外に吹き飛ばした。

その吹き飛ばした先はRWCの看板がでかかど飾り付けられている場所だった。

「馬鹿です。」

「認めたよ……」

『RWC機能停止だー!!』

「と、言うことは……!!」

『チームシスターママ、優勝おおおお!!!!』

ブラウニーの優勝に、観客のボルテージが最高潮に達した。

『やったー!!』

「よかった……ホントよかった……!!」

「……形はどうあれ、おめでとう……プリシラ。」

「馬鹿な……私の計画のどこに……過ちが!!」

恐らく、あの馬鹿を雇った辺りから……だと思う。

そして、試合が終わり

「ありがとう！ジークさんのおかげで勝てたよ！」

「いや、プリシラの素質があつたから勝てたんだ。」

「そもそも、特訓なんて必要だったのか？あんなのが相手になつちまつたわけだし。」

ヴァンは崖にめり込んだままのライナーガインをけだるそうに見てつぶやいた。

それにジークとプリシラは苦笑いをするだけだった。

「ヴァン、そろそろ！」

「ああ、じゃあな。」

「うん、ホントにいらないの？賞金。」

「まあ何とかなるさ。」

「あ、あの・・・だったらさ・・・これ途中で食べて、パンの耳なだけで。」

「悪いな、有り難くもらつとくよ。プリシラ。」

「「はあ!?!」」

ヴァンが礼を言った瞬間、ウエンディとカルメンが口をそろえる。

「どうしたんだよ二人共?」

「そんなあつさり・・・」

「いいだろ、パンの耳位。」

「違うわよ。」

「いるか?」

「いない!」

何故か怒りながらウエンディは足早に立ち去る。

「あゝあ、初めて意見が合っちゃった。」

カルメンも毒つき、タンダーで飛び去る。

「ヴァン、また会えるかな?」

「会えるわよ、きっと。」

「そうね・・・また会って、今度こそ、勝つわ。」

「その前に、俺に勝たせてくれよな。プリシラ。」

「ジークさんはどうするの？ヴァンと一緒に行かないの？」

「もうちょっとここに留まるさ。それに・・・」

ジークは、プリシラが副賞で獲得したホバーベースに視線を向ける。

「このホバーベースの発電システム、ガンダムの補給に申し分ないものだ。使わせてもらってもいいか？」

「いいけど、もう一度勝負してからね？」

「いいだろう。受けて立つ。」

ジークとプリシラは、再戦を誓い拳を合わせた。

そして・・・

ガンダムのPS装甲の恩恵+ベストコンディションのジーク

あっさりブラウニーに勝ち、ホバーベースの発電システムを借りることができた。

ここから、ジークの運命は、大きく動こうとしていた。

第12話 ガンダムVSプラウニー（後書き）

あの後、ヴァンは大変な目にあっていたんですけど、同じ位にジークさんも戦っていたんです。ゾネットにいた緑色のガンダムと、ほかにもいっぱいいたそうです。ネロさん達の助けもあって切り抜けられたそうなんですけど。「出番がとられた」って嘆いていました。だって・・・ジークさんは新しい力を手に入れたんですから。

次回 運命の翼

第13話 運命の翼

「よし、これで電力補給は完了だ。」

ジークはガンダムの電力補給のため、ホバーベースの格納庫にいた。プリシラの好意もあり、しばらくホバーベースに留まっていた。

「ジークさん！」

ふと上から声が聞こえ見上げると

手を振っているジョシユアとプリシラがいた。

「ジョシユア！？お前ケガ大丈夫なのか？」

「もう治りました！」

「ねえ、今考えたんだけど・・・このホバーベースでジークが行きたい場所まで送っていいこうか？」

「いいのか、プリシラ？」

「うん！ヴァンと合流するついでに！」

「ヴァンと？」

「はい！カルメンさんから目的地のポイントを教えてもらったので！」

「カルメンが・・・わかった。」

カルメンは独自に各地を飛び回り、協力者を募り合流ポイントまで集合するように依頼をしていた。

ジークも前もって合流ポイントの情報はあったが、コンテナ回収から合流出来るか不安だったため、プリシラの提案を受けることにした。

合流ポイントへ向かうホバーベース

ジークはガンダムの最終調整を行う中、ブリッジではツッコミ不在のボケが往来していた。

「もうすぐコンテナの落下ポイントだな・・・一体何が積みまわてるんだ・・・？」

そう疑問に思う中、ジョシユアが格納庫に入ってきた。

「ジークさん、エルドラの皆さんが悪党を見つけたって・・・」

「エルドラ！？まさかネロ爺さん達も呼んだのか？」

「そうみたいです。」

「悪党ねえ・・・あの爺さん達らしいが・・・」

「それが・・・その向かう先がジークさんの目指したポイントなん

です。」

「何!?!」

それに驚き立ち上がる拍子にコックピットの天井に頭をぶつけ痛がる。

「もしかしたら、ゾネットにいたあの……」

(姉さんかもしれない……)

そうジークは考えていた。

マリアでなくても補填メンバーである可能性もある。

「わかった。すぐに俺も向かう。」

「で、でもシルエット装備もないのに……」

「通常でも十分に戦える。出るぞ!」

「あ、ジークさん!」

ジヨシユアの止める言葉も聞かずコックピットハッチを閉じ、ガンダムを発進させた。

一方、エルドラは悪党(?)の後を追っていた。

「見失ったな、逃げ足の速い。」

「おい、あれ何だ？」

ホセが指差す先に、地面に少しめり込んでいるコンテナがあった。

「悪党め、あの中に隠れたんだな！」

「迂闊に近づくなよ、ネロ。」

「わかつとる。」

咎めるバリヨ　そしてわかっていると言いながら近づこうとする。

しかしその時

遠方からの攻撃を受け、エルドラが足止めを食らう。

「うわ！？何だいきなり！」

「あれだ！」

バリヨが指差した方向に

「悪いねえ、爺さん達。それは渡すわけにはいかねえんだ。」

緑色のガンダム、ヴェルデバスターを駆るペイン・ウィンド

そして、ストライクEと同じストライカーパックを装備したバイザ
ー型のヨロイ

ダガーが5機

5機共、違う種類のストライカーパックが装備されている。

「お、おいあいつ・・・!」

「あれ、ジークのヨロイと同じ・・・!」

「1体だけじゃなかったのか!？」

ネロ達が追っていたのはダガーの5機ある内の1機だけ

誘き寄せて一網打尽にするため、高機動のエールパック装備が囷となり、見事にネロ達は引つかかったのだ。

しかし、これで怯む歴戦のエルドラメンバーではない。

「流石は悪党と言ったところだな!」

「だがこんなもので俺達を倒せると思っな!」

「お爺ちゃん達、余裕ね・・・」

逆に奮起するネロ達を見て、ユキコは青筋を立てる。

「まったく、ジジイ共はしぶとくていけねえ。さっさと冥土に逝っちまいな!」

「悪いな、まだチツルのところに行くわけにはいかん!」

「自律システム起動・・・さあ、いくぜ！」

ダガーが一齐に動き出し、エルドラへ攻撃態勢に入る。

「待て！」

そこに、フルブリストで先行するインパルスと、後ろで追いかけるブラウニーの姿が見えた。

「あれは・・・ジークか！」

「あいつもここに来てたのか。」

「ガンダムの相手はガンダムが勤める！」

「ジークのヨロイ以外にもあんなのがいたなんて・・・」

プリシラが驚く中、ジヨシユアから通信が入る。

『ジークさん！ガンダムのエネルギーは長く持ちません！』

「わかってる、一撃で仕留める！」

インパルスはエアール装備のダガーに向けてビームライフルを撃つ。

全く避けようとせず直撃・・・のはずだった。

ダガーは健在、傷一つなかった。

「な、何！？」

「嘘、今攻撃当たったよね!？」

「残念だったな、こいつの装甲はPS装甲の逆だ!ビームは効かない!」

ペインが自信満々に答える。

「プリシラ、取り巻きを頼む!俺はあのガンダムを倒す!」

「わかった!」

「ジークばかりに任せられん!」

「おう!新しくなったエルドラの力を見せてやる!」

「お願いだからあんまり無理しちゃだめよ。」

ブラウニーはランチャーとソード、エルドラはエールとI・W・S・Pのダガー

インパルスはヴェルデバスターと戦うことになった。

「お前、マリアの弟か。」

「あの時の・・・!」

「ロクな装備もなしに俺に挑むとはな・・・あのコンテナの中身があればまた別の話なんだろうけどな!」

「あの中に何かがあるのか知っているのか!？」

「いや、だが緊急射出されたモンってのは大抵そうだろうよ。」

インパルスはビームライフルを数発撃つが、ヴェルデバスターは飛び上がり回避

「あれは渡さねえ、同志の計画が予定通りに進まねえからな!」

ヴェルデバスターの両肩ハッチが開き、ミサイルが放たれる。

インパルスは横にブーストし回避する

「もらった!」

ヴェルデバスターは右腰ガンランチャーを放ち、散弾がインパルスを襲う。

しかし実弾だったためPS装甲で防御可能だった。しかし・・・

「くそっ、今のでエネルギーが・・・!」

防御にはエネルギーが消費される。

かなり浴びたので消費量が大きかった。

ペインは腕時計を見ていた。かなり余裕があるのだろう。

「そろそろ時間だな・・・」

エルドラ、ブラウニーはダガーとの戦闘に入っていた。
性能差と数に圧倒され苦戦していた。

「こんなの、ザウルス帝国と戦っていた時に比べれば・・・」

「おい、ちょっと待て！」

突然、バリヨが声を上げる。

「どうしたバリヨ？」

「1機少ないぞ！」

「少ないだあ？」

「はっ、俺達に恐れをなして逃げたか！」

「違う、このヨロイは人が乗っていない・・・ありえん。」

バリヨが、何かに気付く直前

インパルスの右腕が攻撃により破壊された。

「うわ！？な、何だ！？」

「油断したな、もう1機は狙撃専用だ。どさくさに紛れて潜ませていたってわけだ。」

「遅かったか・・・！」

「悪党らしい卑怯なやり方だな！」

「俺は予定通り事が運ばないと気が済まねえ夕チでな・・・なんでもするさ。」

インパルスは対装甲ナイフを抜き一気に接近する。

ヴェルデバスターは銃剣型ビームライフルを連結させ、キャノンモードに移る。

「こいつで吹き飛びやがれ!!！」

キャノンモードから放たれたビームはブラストインパルスに勝る火力咄嗟に回避しようとしたが、避け損ない右脚がビームを浴び破壊されてしまう

「く・・・!？」

着地したが、片脚ではバランスが悪く地面に倒れてしまう。

立ち上がるうとしたが、エネルギー切れの警告音が鳴り、PS装甲が落ち機体色が灰色に変わる。

「エネルギー切れで右半身欠損、終わりだな。」

ペインは地面にひれ伏すインパルスをにやつきながら見下す。

戦闘が行われる中、ジョシユアは隙を見てコンテナに辿り着いていた。

そこにいたのは、何かをいじろうとしていたカルメン

「カルメンさん！」

「ジョシユア！」

「ここで何をしてるんですか？」

「このコンテナ開けようとしてるんだけど・・・システムが複雑すぎて・・・」

「貸してください。」

カルメンはジョシユアと変わり、端末を使いコンテナを開けた。

「あんだ、意外に役に立つのね・・・」

かなり見下した発言だったが、ジョシユアには届いていなかった。

コンテナの中身を見るカルメンとジョシユア

「これって・・・」

「すぐにジークさんに知らせないと・・・!!」

「月並みなセリフだが・・・最後に言い残すことはねえのか？」

「何故、お前らはカギ爪の男の計画に賛同している・・・！お前達の目的は何だ！」

「教えてやってもいいか。正直、同志の計画はどうでもいい。俺はRWCに復讐できればそれで良かったんだ。」

「何？」

「俺はRWCの運行部長をしていた。列車は時間通りに運行しなくてはいけねえ。けど、必ず時間を狂わす輩が存在する。」

ペインの言動が、だんだん怒りが混ざってきて震えてきた。

「そんな奴らは存在する価値はねえ・・・だから、二度と乗れないよう殺した。事故をなかったことにもして、狂わせた運転手も殺した！どいつもこいつも時間にルーズ過ぎるんだよ！だから俺が正した！なのにあのクソ社長は俺をクビにしゃがった！！ルーズな奴等を排除して何が悪い！！！」

「お前のそのエゴの犠牲になり、遺された人の気持ち考えた事があんのかよ！」

「知るか！ルーズな奴らの家族もルーズに決まってる！！いい教訓になつたと考えれば済む話だ！！！」

「人の命を奪っておいて又ケ又ケと・・・！！」

「同志は言った！時間は守る事は大切だ、だから自分が世界中のみんなをマナーを良くさせよう、と！俺は確信した、これでRWCの奴らに復讐できるってな！！時間を守れねえ奴は死んで償え！！」
怒り狂うペインの言動は人間のものではなかった。

「世の中予定通りに事は進まない！俺も・・・家族揃って平和に暮らしたかった・・・だがそれはカギ爪のやつらに狂わされた！人の犠牲の上で世界を変える？寝言は寝てから言いやがれ！！」

「黙れ！！お前はここで塵も残さず死んでいけ！！」

ヴェルデバスターはキャノンモードをインパルスに向け、ビームをチャージする。

そこに、ジョシユアから通信が入る。

『ジークさん！すぐに分離してください！』

「何！？」

『ジョシユアの言う通りにして、ジーク。』

「くたばれええええ！！」

ペインがトリガーを強く引き、ビームがインパルスに向かい、当たった瞬間爆発した。

プリシラとネロ達が爆発の方を向き、驚く。

巻き上がる塵で見えないが、先ほどの攻撃で吹き飛んだのか。

「口だけは達者だったな・・・まあ、みんなそうだったからな・・・」

ペインが攻撃態勢を解く。

その瞬間、塵の中から何かが飛び出してきた。

インパルスのレッグフライヤーだ。

「な!？」

先ほどの爆発は分離した瞬間チェストフライヤーを盾代わりにしたものの

完全に警戒を解いていたペインだったので、レッグフライヤーの直撃を食らい地面に倒れる。

更にコアスプレnderが塵の中から現れる。

「最後の悪あがきか・・・潔く死にやがれ!!」

ヴァルデバスターが攻撃を仕掛けようとしたその時、後方から何か

が横切った。

「な、何だあれは!？」

横切ったものは、コンテナに格納されていたチェストフライヤーとレッグフライヤーだった。

空中でコアスプレnderと合体し、ガンダムとなる。

そして、インパルスの後ろからシルエットが飛来してきた。

そのシルエットは、赤い翼のような形状をしていた。

シルエットと連結し、PS装甲が展開される。

「な、何だあれは!?!」

「合体か!」

「なんか、ちよつと違う……」

その場にいたネロ達とプリシラも驚いていた。

「今さらそんなもん!」

ヴェルデバスターは三度キャノンモードをインパルスに向かって撃つた。

しかし、インパルスは避けようとしなかった。

「ジーク!?!」

「馬鹿者!何故避けない!?!」

「いやあああ!?!」

ビームがインパルスに直撃した。

「クハハハハ！これで終わりだぜ！！」

誰もがビームで吹き飛ばされる・・・そう思っていた。

しかし、結果は違っていた。

「な、何だあれは・・・！？」

ペインは驚愕していた。

当たっているはずのビームが・・・ビームの膜によって無効化されていたからだ。

「ビームシールド・・・ビームを防御機構に転用させたんだ！」

「どっついつことなのジョシユア？」

「ビーム粒子によってビーム攻撃を分散させてるんです。」

「は？」

ジョシユアの説明にあまり理解できてきかないカルメンであった。

「キャノンモードの攻撃を完全に防いだだと・・・馬鹿な！」

「ペインって言ったな、見せてやる・・・これが俺のガンダムだ！！」

デステイニーインパルスのツインアイが光り、赤いウィングユニットが開くと同時に
粒子が噴き出す。

その姿はまるで、光の翼

「新型引っ提げたくらいで調子に乗るんじゃねえ!!」

ペインの緑色の眼の虹彩がなくなり、S・E・E・Dシステムが発動する。

ヴェルデバスターの装備をフル活用し攻撃を仕掛ける

しかし、光の翼によって機動力が上がっており、ビーム、ミサイルを全て回避する。

その隙を狙ってランチャー装備のダガーがデステイニーインパルスに向けて高出力ビーム砲を撃つ。

右腕のビームシールドを展開し、薙ぎ払うようにビームを防ぐ。

すぐに左腕で背部にマウントしている長射程ビーム砲を展開、ランチャーダガーに向けて高出力のビーム攻撃を行う。

流石の対ビーム装甲を施したダガーでも耐えることが出来ず、貫かれ爆発した。

その間もエルドラとブラウニーの戦闘は続いている。

ソードダガーは対艦刀で薙ぎ払おうとするが、飛び上がりで回避さ

れ後方に回られる。

「その手の攻撃は、ヴァンとジークの戦いで読めるんだから！」

ブラウニーの妖精の一刺しでソードダガーの頭部が貫かれ、機能が停止する。

その時、遠方から狙うもう1機の姿があった。

狙撃戦用のライティングダガーだ。

ブラウニーを捉え、引き金を引く直前

「エルドラ・カタラータ！」

エルドラの飛び蹴りがライティングダガーを襲う。

「こそこそ隠れてないで堂々を戦え！」

機械相手に無駄なことである。

「エルドラ・アタツケ！」

エルドラ渾身のパンチが決まり、ライティングダガーは弾き飛ばされ、空中で爆発する。

エルダガー、I・W・S・Pダガーが近接武器を持ち、挟み撃ちでデステイニーインパルスを斬ろうとする。

しかし、デステイニーインパルスにある2つのビーム対艦刀により

返り討ちにあい、爆発する。

これにより5機もいたダガーがあっさりと全滅した。

これに焦りを見せるペイン

「こいつうううー!!」

銃剣型ビームライフルを連結、キャノンモードを連続で撃ちまくる。

デステイニーインパルスは光の粒子を撒き散らしながら回避する。

「お、おい……ウソだろ……」

ペインから見たデステイニーインパルスは

攻撃が当たっている……ようにしか見えなかった。

粒子による分身で敵を翻弄しているのだ。

「攻撃……当たってるだろ……何で……何で当たらねんだよ……!」

そのままデステイニーインパルスは急降下し、対艦刀でビームライフルを破壊する。

「こいつ……さつきと機動が違う……まさか!？」

ペインは……気付いていた。

S・E・E・Dシステムが発動し、ジークの銀色の眼の虹彩がなくなっているのを

「そうか・・・今わかった。俺はガンダムになりきっていなかったんだ。だからS・E・E・Dシステムを使いこなせていなかったんだ。俺の身体をガンダムに貸すだけでよかったんだ。」

ペインは冷や汗を流しながら驚き、ジークの表情は歓喜に満ちていた。

デステイニーインパルスは、そのままヴェルデバスターの頭部をつかむ。

「やっぱり・・・小手先で動かすものじゃなかったんだね・・・父さん。」

「い、今さらそのシステムを使いこなしたところで・・・!」
強がりを行っているペインの目の前が光りだす。

「な、何だ・・・まさかこいつこんなところにも武装が」

気付いた時には遅かった。

デステイニーインパルスの掌にはビーム砲が搭載されていた。

掌からビームが放たれ、ヴェルデバスターの頭部が破壊される。

「うわあああ!」

擬似的にガンダムと一体化するS・E・E・Dシステム

直接ダメージはないとはいえ、目の前で強力な光が放たれたのでペインの眼が焼けた。

眼を抑えながらペインは悶え苦しむ。

「く……くそ……」

ある程度楽になり、眼を開け腕時計を見る。

「お……おいウソだろ……狂ってる……俺の特注腕時計が狂ってる……」

ペインが愛用している腕時計は、どんなことがあっても指針が狂わない。

戦闘の衝撃で壊れたのだろうか、正確な時間が刻めなくなっていた。しかしそれは幻覚 実際は眼が焼けたせいでまともに見えなくなっってしまったせいだ。

「テメエ……よくもやってくれやがったな!!」

ヴェルデバスターはDestinyインパルスの右腕を掴み離さない。

しかし、それでもジークは慌てる様子を見せなかった。

「俺の予定を狂わすどころか、俺の時計を歪めやがったな!! テメエは絶対ただじゃおかねえ!!」

ペインはコックピットにある自爆装置を作動させた。

戦う力を失ったヴェルデバスターに残された攻撃方法は、捨て身の自爆しかなかった。

ジヨシユアや周りにいる仲間もそれに気付いた。

「あのヨロイから高熱反応!？」

「まさか自爆するつもり!？」

「いかん!逃げるジーク!!」

「俺は・・・ペイン・ウイ」

ペインの言葉半ばでヴェルデバスターが自爆し、周囲の地形を巻き込み爆発した。

その衝撃でエルドラやブラウニーも動けずにいる。

衝撃が収まり、爆心地を見る一同だったが、未だ塵が立ち込めるばかり。

「そ、そんな・・・ジークさんが・・・!」

「年寄りより先に逝っちゃまっていおって・・・バカタレが・・・!」

「あ・・・ああ・・・!」

全員が悲しみに暮れる中、塵から何か飛び出してきた。

……デスティニーインパルスだ。

あの爆発の中、ビームシールドを張って耐え凌いだのだ。

右腕には、ヴェルデバスターの腕が掴まれた状態のままだった。

空中で止まり、光の翼を誇示するかのよう展開する。

悲しみに暮れていた仲間は一転、喜びに溢れていた。

ユキコにいたっては嬉し涙を流していた。

これで、補填メンバーの一角 ペイン・ウィンドを倒した。

この報はカギ爪の組織にも届いているだろう。

しかし、それでもジークは止まらない。

運命の翼を羽ばたかせ、運命を切り開くために。

第13話 完

第13話 運命の翼（後書き）

デステイニーシルエット

ミネルバから射出された、インパルスの最終シルエット

全てのシルエットのメリットを集約しており、幅広く立ち回れる。

翼状の推進システムがあり、使用している姿はまるで光の翼を纏い分身しているかのよう。

専用フライヤーも残されており、専用装備も搭載されている。

その中でも両腕にあるビームシールドは、高威力のビーム砲も完全防御できるほど。

武装

ビームブーメラン×2（両肩）

ビーム対艦刀×2

ビームライフル

長射程ビーム砲×2

兵装マニピュレーター×2（両手の平にビーム砲）

ビームシールド

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6826i/>

ガン×ソード ~ in Gundam story ~

2011年12月31日00時46分発行